

# 高宮八丁遺跡Ⅱ

—第2次および第3次発掘調査概要報告書—

1992 · 3

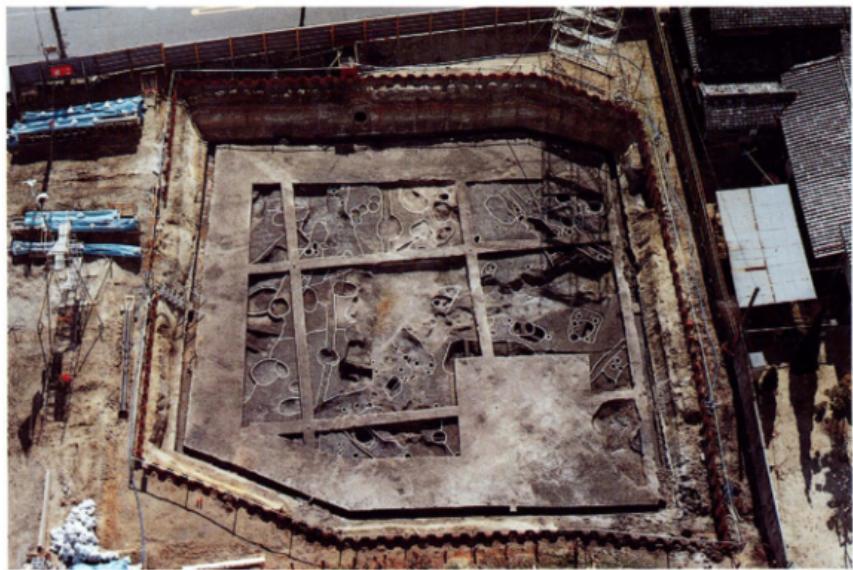
寝屋川市教育委員会

# 高宮八丁遺跡Ⅱ

—第2次および第3次発掘調査概要報告書—

1992 · 3

寝屋川市教育委員会



秦代時代遺構面全景(北から)



上坑126 遺物出土狀況



古墳時代自然河川須恵器出土状況



同上 建築材出土状況



玉類



碧玉・めのう・紅簾片岩



鉄石英製玉錐・石のみ



石廻丁

## 序

高宮八丁遺跡は、近畿地方を代表する弥生時代前期～中期前葉の集落遺跡です。昭和60～61年の発掘調査で出土した土器・石器・木製品をはじめとする大量の遺物は、遺跡が北河内地域における稻作農耕の開始期の拠点集落としての役割をはたしたこと明らかにしました。一方、このときの調査で見つかった遺構は、集落のまわりを巡ると考えられる多数の溝や貯蔵穴などにとどまり、当時の人々の生活した住居跡や井戸跡が存在する居住域の位置は不明でした。

今回の発掘調査の調査地は、この第1次調査の調査地の北側に隣接しており、集落の内側に位置し、住居跡などの遺構の存在が予想された区域です。平成2年11月～平成3年3月と平成3年8月～9月の発掘調査によって、予想されたとおり弥生時代前期末～中期前葉の建物の柱穴や土坑・溝が見つかり、高宮八丁遺跡で集落の居住域をはじめて明らかにすることができました。今回の発掘調査の成果は、遺跡の解明の重要な手掛かりとなったと言えます。

この報告書は、高宮八丁遺跡の第2次及び第3次の発掘調査と遺物整理の概要をまとめたものです。本書が郷土の歴史と文化を明らかにする基礎資料となり、文化財に対する理解を深める一助となれば望外のよろこびです。

なお、調査の実施にあたりまして事業主体者として費用負担など多大のご協力を賜わりました丸紅株式会社をはじめ、関係機関・関係各位には厚くお礼申し上げますとともに、調査に携わった方々に深く感謝の意を表します。

寝屋川市教育委員会では、私達の祖先が残し、あるいは伝えてきた埋蔵文化財をはじめとする市内の様々な文化財の保存をはかり、後世の我々の子孫に伝えていく所存ですので、今後とも本市の文化財保護行政にご理解・ご協力賜りますようお願い申し上げます。

平成4年3月

寝屋川市教育委員会  
教育長 今道昭次

## 例　　言

1. 本書は、丸紅株式会社が計画したマンション建設工事に先立って実施した、寝屋川市初町361番地5外所在の高宮八丁遺跡の第2次・第3次発掘調査概要報告書である。
2. 調査は、寝屋川市教育委員会が丸紅株式会社の依頼を受けて実施したものである。
3. 現地発掘調査及び遺物整理に要した費用は、すべて丸紅株式会社が負担した。
4. 第2次調査は、平成2年11月28日から平成3年3月28日まで現地調査を実施し、出土遺物の基礎的整理を主とする遺物整理も現地発掘調査と並行して実施した。第3次調査は、平成3年8月19日から平成3年9月12日まで現地調査を実施した。
5. 本書作成にかかる整理作業等は、平成3年6月1日から平成4年3月31日までの間実施した。
6. 調査全般については、大阪教育大学大学院講師（考古学）瀬川芳則を調査顧問とし、寝屋川市教育委員会社会教育部文化スポーツ室文化振興課濱田延充が担当し、現地調査の調査員として植田正幸、補助員として奥田達治・若林邦彦・深澤敦仁・比佐陽一郎・広瀬陽一があつた。出土遺物整理の調査員として植田、補助員として若林・中原初美・白井美紀子・中司久美子があつた。
7. 本書の全体編集は、寝屋川市教育委員会文化振興課濱田延充が担当し、塙山則之がこれを補佐した。執筆分担は、各担当章・節の末尾にその名を記した。本書に掲載した写真は、遺構を現地調査の調査員及び補助員が、遺物を濱田・塙山が撮影したものである。本書に掲載した図面作成・製図は若林・中原・中司があつた。
8. 遺構図面の方針は、全て座標北を指し、水準はO.Pである。
9. 発掘調査の進行及び報告書作成にあたり、多くの方々にご指導・ご教示を賜った。記して謝意を表します。（五十音順）  
有馬忠雄氏（元香里丘高校教諭）、石黒立人氏（財団法人・愛知県埋蔵文化財調査センター）、伊藤実知子氏、片岡修氏（米国オレゴン大学助手）、菅原太郎氏（武庫川女子大学）、野島稔氏（四条畷市立歴史民俗資料館）、松木武彦氏（岡山大学）、村田幸子氏（滋賀大学）、森本晋氏（奈良国立文化財研究所）
10. 発掘調査・遺物整理の実施にあたっては、丸紅株式会社の全面的な多大なご協力を得るとともに、本町自治会、初町自治会、寝屋川郵便局、地元各位、新日本土木株式会社、池上建設のご協力を得た。記して厚く感謝の意を表します。  
また、今回実施した遺構内土及び遺物包含層の1万数千袋におよぶ土のう袋の洗浄作業に従事していただいた内業スタッフに対して改めて感謝いたします。

## 目 次

### 序

#### 例言

第Ⅰ章 調査に至る経過	1
第Ⅱ章 遺跡の地理的・歴史的環境	2
第Ⅲ章 発掘調査の成果	6
第1節 基本層序	6
第2節 検出された遺構	8
1. 第2次調査	8
(1) 弥生時代	8
(2) 古墳時代	17
2. 第3次調査	20
第3節 出土遺物	21
1. 弥生土器	21
2. 古墳時代の土器	25
3. 石器（弥生時代）	27
4. 玉作り関係遺物	35
5. 木製品	40
(1) 弥生時代	40
(2) 古墳時代	40
6. 鉄器	44
7. 植物質遺存体	44
8. 動物質遺存体	49
第Ⅳ章 まとめ	58

## 挿 図 目 次

第1図 遺跡周辺地形図	2
第2図 北河内の弥生時代前期～中期の遺跡	3
第3図 周辺遺跡位置図	5
第4図 基本層序模式図	6
第5図 第2次調査西壁断面実測図	7
第6図 第2次調査地区割り図	8
第7図 弥生前期の主要遺構配置図	9
第8図 溝103遺物出土状況実測図	10
第9図 溝139遺物出土状況実測図	11
第10図 弥生中期前半の主要遺構配置図	13

第11図	土坑115遺物出土状況実測図	14
第12図	土坑128遺物出土状況実測図	16
第13図	古墳時代遺構配置図	18
第14図	河川001遺物出土状況実測図	19
第15図	河川001土層断面実測図	19
第16図	弥生時代遺構配置図	20
第17図	古墳時代遺構配置図	20
第18図	溝103出土土器実測図	21
第19図	玉作り関係遺物実測図	37
第20図	弥生時代木製品実測図	41
第21図	鉄器実測図	44

### 表 目 次

第1表	第2・3次調査出土石器点数表	28
第2表	出土石器長さ別点数表	28
第3表	出土石器重量別点数表	28
第4表	玉作り関係遺物地区別出土数量表	35
第5表	弥生時代植物質還存体一覧表	45
第6表	炭化米出土遺構別法量平均値一覧表	46
第7表	炭化米分類表	47
第8表	炭化米の類別比率	48
第9表	炭化米法量表	50

### 図 版 目 次

図版1	検出遺構	a. 調査地遠景（南西から） b. 古墳時代遺構面全景（北から）
図版2	検出遺構	a. 河川001須恵器出土状況 b. 河川001木製品出土状況
図版3	検出遺構	a. 河川001建築材出土状況 b. 古墳時代遺構面馬齒出土状況
図版4	検出遺構	a. 弥生時代遺構面全景（東から） b. 同上（南西から）
図版5	検出遺構	a. C-2区弥生時代遺構検出状況（南西から） b. C-3区弥生時代柱穴等検出状況（北から）
図版6	検出遺構	a. 溝101土層堆積状況 b. 溝103遺物出土状況

- 図版7 検出遺構 a. 溝139遺物出土状況  
b. 同上
- 図版8 検出遺構 a. 土坑112遺物出土状況  
b. 土坑115遺物出土状況
- 図版9 検出遺構 a. 上坑126土層堆積状況  
b. 上坑150土層堆積状況
- 図版10 検出遺構 a. 土坑128完掘状況  
b. 土坑128石庖丁出土状況
- 図版11 検出遺構 a. 土坑128遺物出土状況  
b. 土坑128遺物出土状況
- 図版12 検出遺構 a. P-375柱根検出状況  
b. P-381木製品出土状況
- 図版13 検出遺構 a. 第3次調査古墳時代遺構面全景（北から）  
b. 第3次調査弥生時代遺構面全景（北から）
- 図版14 出土土器（1）弥生時代
- 図版15 出土土器（2）弥生時代
- 図版16 出土土器（3）古墳時代
- 図版17 出土土器（4）古墳時代
- 図版18 出土石器（1）石鎚
- 図版19 出土石器（2）石鎚
- 図版20 出土石器（3）石鎚
- 図版21 出土石器（4）石鎚
- 図版22 出土石器（5）石鎚
- 図版23 出土石器（6）石鎚
- 図版24 出土石器（7）石鎚
- 図版25 出土石器（8）石鎚
- 図版26 出土石器（9）石槍・石劍
- 図版27 出土石器（10）石槍・石劍
- 図版28 出土石器（11）石庖丁
- 図版29 出土石器（12）石庖丁
- 図版30 出土石器（13）石庖丁・大型石庖丁
- 図版31 出土石器（14）石庖丁
- 図版32 出土石器（15）石庖丁・鉄器・勾玉状石製品
- 図版33 出土石器（16）石錐
- 図版34 出土石器（17）石錐
- 図版35 出土石器（18）石錐
- 図版36 出土石器（19）石斧
- 図版37 出土石器（20）敲石

- 図版38 出土石器（21）敲石・砥石
- 図版39 出土石器（22）砥石
- 図版40 出土石器（23）刃器
- 図版41 出土石器（24）刃器
- 図版42 出土石器（25）刃器
- 図版43 出土石器（26）刃器
- 図版44 出土石器（27）刃器・楔形石器
- 図版45 出土石器（28）用途不明石器
- 図版46 出土石器（29）第3次調査
- 図版47 玉作り関係遺物（1）a. 玉類および碧玉剥片  
b. 紅簾片石
- 図版48 玉作り関係遺物（2）玉錐
- 図版49 玉作り関係遺物（3）石のみ
- 図版50 玉作り関係遺物（4）鉄石英石核
- 図版51 出土木製品（1）
- 図版52 出土木製品（2）
- 図版53 出土木製品（3）
- 図版54 出土木製品（4）
- 図版55 出土木製品（5）
- 図版56 出土木製品（6）
- 図版57 出土木製品（7）
- 図版58 出土種子等
- 図版59 弥生土器実測図（1）
- 図版60 弥生土器実測図（2）
- 図版61 弥生土器実測図（3）
- 図版62 弥生土器実測図（4）
- 図版63 古墳時代土器実測図
- 図版64 出土石器実測図（1）
- 図版65 出土石器実測図（2）
- 図版66 出土石器実測図（3）
- 図版67 出土石器実測図（4）
- 図版68 古墳時代木製品実測図（1）
- 図版69 古墳時代木製品実測図（2）

## 第Ⅰ章 調査に至る経過

高宮八丁遺跡は、寝屋川市初町及び本町一帯に所在している。

1985年（昭和60年）の発掘調査（第1次調査）により、弥生時代前期から中期にかけての大集落であることが判明した。

高宮八丁遺跡は、寝屋川左岸の低湿地に形成され、遺跡からは調査で集落周辺の溝・自然河川・土坑・底にカゴ状の偏物を敷いたドングリの貯蔵穴・木製品の貯木施設等の遺構を検出し、コンテナパット3,000箱以上の弥生時代前期中段階から中期初頭の土器類、600点以上の石鎚や石庖丁等の石器類、集落で工作りが行われていたことを示す碧玉製管玉の製品及び原石と未製品・道具、また日本海地域との交流を伺わせる硬玉製獸形勾玉、両端に水かきのある櫛、鍬や鋤の農具類、さらに原材→粗加工→未製品→完成品という木製品の製作・加工工程を示す遺物など、多種・多様で豊富な土器・石器・木製品等の出土を見、弥生時代前期から中期に至る河内潟北岸の拠点集落であることが明らかになった。

1990年（平成2年）4月、丸紅株式会社より寝屋川市初町361番5他においてマンション建設を計画している旨の事前協議が寝屋川市教育委員会にあった。寝屋川市教育委員会では、当該計画地が高宮八丁遺跡の北に隣接し、先の第1次調査の調査結果から遺跡の広がりが推察されるため、協議の上1990年（平成2年）9月11日に遺跡の範囲確認及び基本層順を把握するための試掘調査をマンション建設予定地（約1,040m<sup>2</sup>）にトレーナー（試掘坑）を掘り実施した。

試掘調査の結果、現地表下約1mまでは盛土で、約3mで地山面に至った。遺物包含層からは、弥生土器及び石器（石錐等）の出土があった。

市教育委員会は、試掘調査の結果をふまえて、遺跡の保存について協議を重ねた。その結果、マンション建設工事によって遺構の破壊が予想される部分（約370m<sup>2</sup>）について本調査を実施することに決定した。

現地での発掘調査は、高宮八丁遺跡第2次調査として1990年（平成2年）11月28日から1991年（平成3年）3月28日まで実施した。また、並行して出土遺物の洗浄等の一次的遺物整理作業を実施し、さらに現地調査終了後の1991年（平成3年）6月1日から1992年（平成4年）3月31日までの間本格的な遺物整理を実施した。その間、一部マンション建設計画の変更に伴い追加現地調査（第3次調査）（約84m<sup>2</sup>）を1991年（平成3年）8月19日から9月12日まで実施した。

（塙山則之）

## 第Ⅱ章 遺跡の地理的・歴史的環境



第1図 遺跡周辺地形図 (S=1:20000)

高宮八丁遺跡は、寝屋川市域のほぼ中央部に位置する。この地は、市域の東半部を占める香里・太秦・高宮の丘陵部から下りた平坦地である。

明治21年作成の仮製地図(第1図)によると、丘陵西側の秦村～平池村あたりで等高線は西に大きく張り出していることに気付く。これは、寝屋川が東部丘陵地から平野部に流れ出た所に、運搬した大量の土砂を堆積して形成した扇状地状の地形である。寝屋川は現在この扇状地の北西方向に流れているが、以前は流路も固定していなかったと推測される。また、この扇状地の南側にも等高線の小さな突出部が認められ、

寝屋川が扇頂部で数本の分流を形成していたと推測される。高宮八丁遺跡で検出されている小河川もこうしたものとして理解される。高宮八丁遺跡は、この扇状地の南側の扇端部に位置し、周囲の低湿地より若干高い部分に集落を営んでいたことがわかる。

梶山彦太郎・市原実尚氏によって復元される河内潟は、遺跡の西南に広がっていたと推測される。<sup>11)</sup>以上のことから、高宮八丁遺跡に居住した人々は周辺より高い扇状地で、さらに寝屋川本流が流れ洪水の危険の高い扇状地中央部を避け、南側部分に集落を選択したと推測される。彼らは、遺跡の西南に広がる河内潟周辺の低湿地を開発して水田としていたのであろう。

次に、高宮八丁遺跡の所在する北河内地域平野部の同時期の遺跡について、その動態の検討を行いたい。<sup>12)</sup>この時期は播種農耕の開始期であり、当地域は旧大和川水系の中河内地域と同様に畿内地域における弥生文化の成立を考えるうえで重要な地域である。

この地域は、寝屋川流域～生駒西麓地域と古川以西の淀川下流及び河内潟北岸の地域に大きく分けることができる。この2つの地域は、前者が生駒山地から流れ出る中小の河川が形成した扇状地・小規模な三角州であるのに対し、後者は淀川及びその分流が形成した大規模な三角州が広がっているよう地形的に大きく異なっている。また、後述するように、遺跡についても異なった様相が認められ

る。ここでは前者を生駒西麓地域、後者を淀川左岸地域と呼称する。

両者のうち、突堤文土器を出土する遺跡は、寝屋川市高宮八丁遺跡（滋賀里Ⅳ～長原式）、同長保寺（讃良郡条里）遺跡（滋賀里Ⅳ式）、四條畷市雁屋遺跡（長原式）、大東市北新町遺跡（船橋式）、同中垣内遺跡（長原式）で、いずれも生駒西麓地域の遺跡である。特に、長保寺遺跡の滋賀里Ⅳ式共伴の直口深鉢で発見された物は、伊丹市口酒井遺跡出土資料等と並んで畿内地域最古の稻作関連資料として注目される。ただし、この土器をふくめて、北河内地域における突堤文土器の様式的編年は行われておらず、時間的な位置付けは今後の検討を要する。

弥生前期前葉に集落が出現するのも、この生駒西麓地域の高宮八丁・雁屋の2遺跡である。この両遺跡は、それぞれ中期前葉及び後期まで継続して集落が営まれる。また、前期中葉には、同地域の大東市中垣内遺跡が出現していると考えられ、同遺跡も中期以降の集落の存続が認められる。

淀川左岸地域では、門真市普賢寺遺跡・大阪市茨田安田遺跡・守口市西橋波西之町遺跡で前期の土器の出土が知られるが、いずれも小量でその後の時期の遺物の出土も知られていない。中期初頭には、大阪市森小路遺跡・守口市八雲遺跡・大東市西諸福遺跡で集落が出現し、守口市長池町遺跡でも土器の出土が知られる。このうち集落の継続が認められるのは森小路遺跡だけで、ほかの集落はいずれも短期間で集落が廃絶するようである。

こうして両地域の弥生集落を比較すると、生駒西麓地域は集落の成立が早く、中期以降も継続する拠点集落となるのに対し、淀川左岸地域では集落の成立も一步遅れ、その後も継続して営まれる集落が少ないことが認められる。これは、前者の集落が早く安定した地盤となる扇状地上に立地するのに對し、後者の集落が淀川あるいはその分流の形成する自然堤防状を立地し、洪水に対して不安定な要素を持っていたためと考えられる。

なお、生駒西麓地域の集落がほぼ3kmの間隔で存在することは、集落のもつ領域等を考えるうえで興味深い。<sup>③</sup>

(濱田延光)

## 註

1. 梶山彦太郎・市原実『大阪平野のおいたち』青木書店 1986
2. 河内潟周辺の前期弥生集落の様相については、すでに三好孝一氏の詳細な検討がある。このなかで、三好氏は筆者の淀川左岸地域をI群、生駒西麓地域をII群としている。

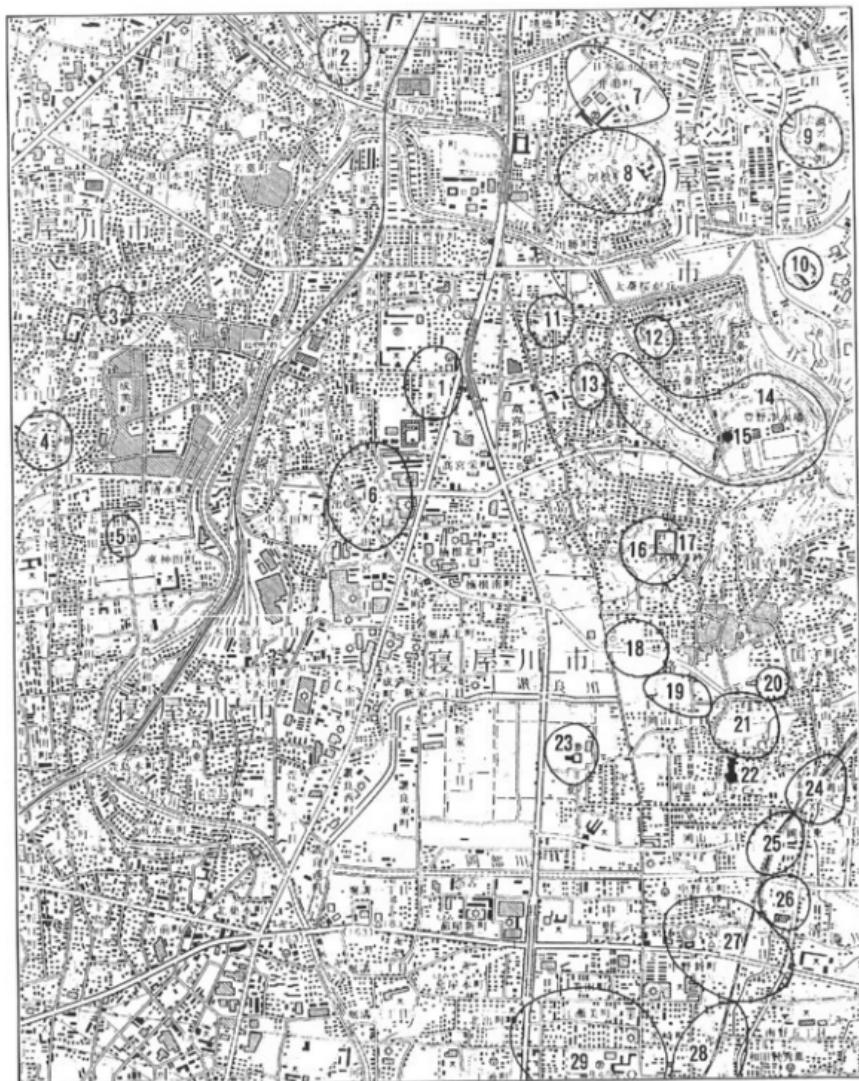
三好孝一「河内潟東辺部の弥生集落」『考古学論集』第2集 1988

「北遺跡群周辺の歴史的・地理的環境」『河内平野遺跡群の動態』II (財) 大阪文化財センター

1991

3. 酒井龍一 「畿内大社会の理論的様相」『亀井遺跡』（財）大阪文化財センター 1982  
「弥生時代中期・畿内社会の構造とセツルメントシステム」『奈良大学文化財学報』3 1984

なお、市域及びその周辺の各時代の遺跡についての説明は、今回割愛した。第1次調査の概報（『高宮八丁』遺跡－寝屋川郵便局庁舎建設に伴う発掘調査概要報告書－』 1987 寝屋川市教育委員会）等を参照いただきたい。

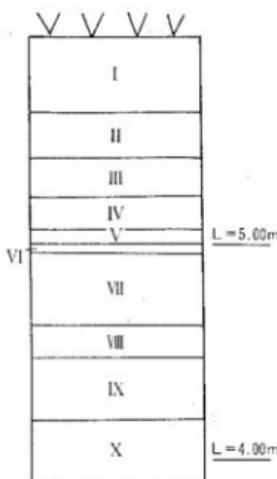


第3図 周辺遺跡位置図 (S=1:25000)

- |            |           |            |             |           |
|------------|-----------|------------|-------------|-----------|
| 1. 高宮八丁遺跡  | 2. 桶遺跡    | 3. 高柳廻寺跡   | 4. 高柳遺跡     | 5. 神田東後遺跡 |
| 6. 長保寺遺跡   | 7. 三井南遺跡  | 8. 泰山遺跡    | 9. 池の湖遺跡    | 10. 太秦北古墳 |
| 11. 神宮寺跡   | 12. 太秦廻寺跡 | 13. 太秦元町遺跡 | 14. 太秦遺跡    | 15. 高塚古墳  |
| 16. 高宮遺跡   | 17. 高宮廻寺跡 | 18. 小路遺跡   | 19. 講良川遺跡   | 20. 三味頭遺跡 |
| 21. 更良岡山遺跡 | 22. 忍岡古墳  | 23. 砂遺跡    | 24. 忍ヶ丘駅前遺跡 | 25. 奈良井遺跡 |
| 26. 南山下遺跡  | 27. 中野道跡  | 28. 南野木崎遺跡 | 29. 雁屋遺跡    |           |

## 第Ⅲ章 発掘調査の成果

### 第1節 基本層序



第4図 基本層序模式図

- I. 宅地盛土
- II. 構上
- III. 褐灰色砂質土(鉄分含む)
- IV. 黄灰色砂質土
- V. 黄褐色砂質土(鐵分含む)
- VI. 灰黄色粗砂
- VII. 黄灰色砂質土
- VIII. 暗青灰色粘質土
- IX. 黒色粘質土
- X. 青灰色シルト

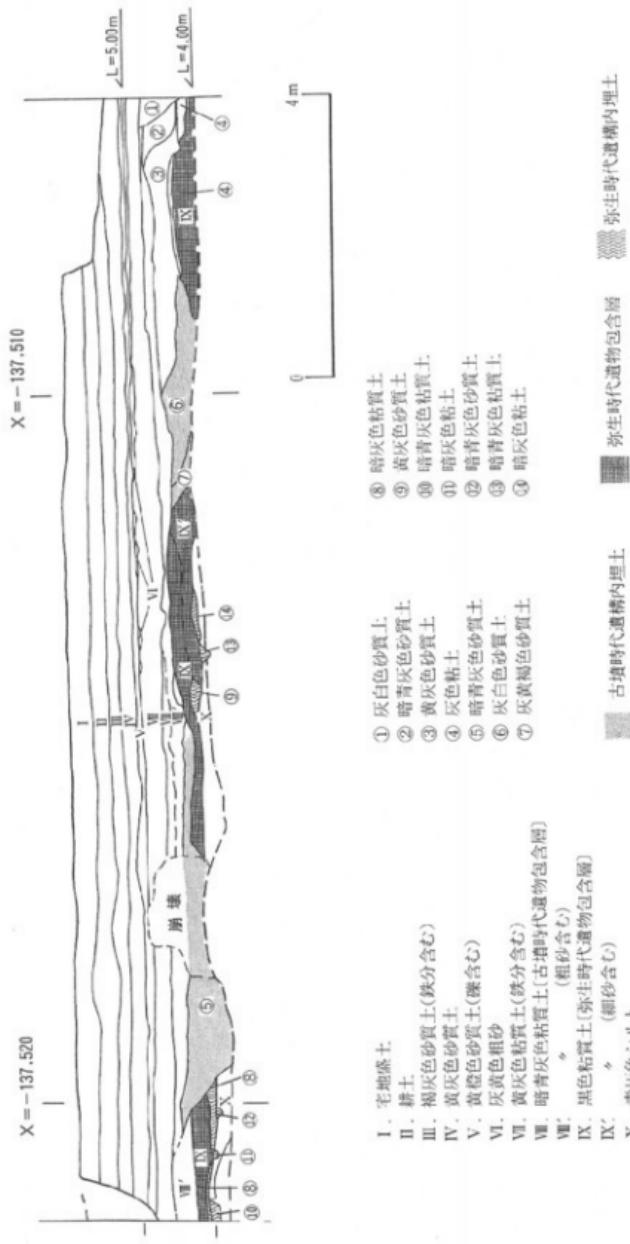
第4図に示したのが第2・3次調査の基本層序の模式図である。ただし、今回の調査区はいずれの時期にも河川や洪水層などが、幾重にも横走しており安定的な地盤形成がなされていない。第4図に示した基本層序は、そのなかでも弥生時代以後に比較的安定的に層位堆積が進行した様相を示す第2次調査区の西壁断面の状況(第5図)に基づいている。

I・II層は、近代以後に形成されたと考えられる。  
III層は褐灰色砂質土で粗砂

を比較的多く含み、鉄分の固まりが散見される。IV層は黄褐色砂質土、V層は黄褐色砂質土と粗砂を多く含む堆積が進行している。VI層は灰黄色粗砂で構成され、薄い堆積ではあるが調査区全面にみられ、広範囲にわたる洪水層と考えたい。III～V層までは自然堤防としての堆積と考えられる。時期は近世を中心としていると考えられる。

VII層は黄褐色粘質土で比較的安定した地盤が形成される。この層からは、調査区北部で瓦器碗の細片が出土しており、中世以後の堆積であろう。VIII層は暗青灰色粘質土で、少量ながらも古墳時代の須恵器・土師器を含んでいる。調査区全体にはみられず、西側周辺のみで検出できる層である。安定的な集落は営まれなかったもののその時期の堆積と考えられる。IX層は、黒色粘質土である。多量の弥生土器・石器を前～中期を中心として、また木片などの植物遺体なども含んでいる。この層の上面を古墳時代後期造構の検出面として調査を行った。X層は青灰色シルトの堆積で、遺物を全く含まない。この層の上面を、弥生時代の遺構検出面として調査を進めた。

(若林邦彦)

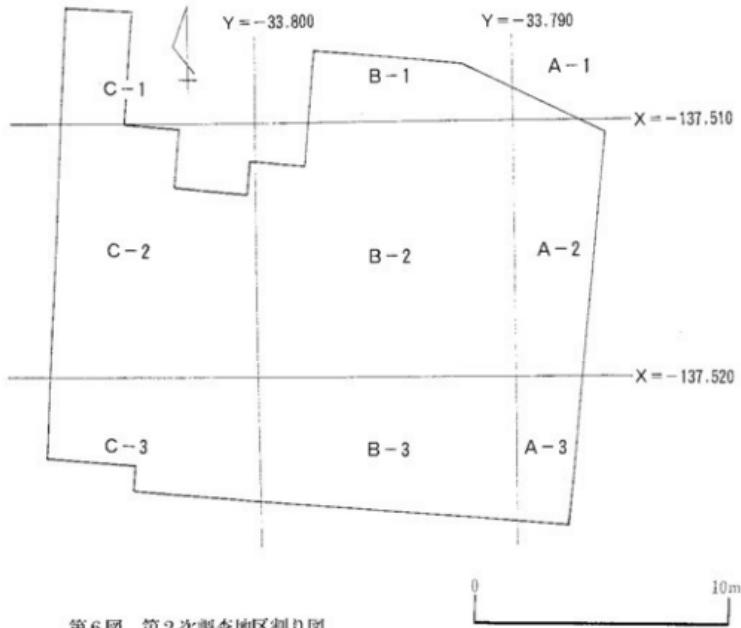


第5圖 第2次調査西壁断面図 (S=1:80)

## 第2節 検出された遺構

### 1. 第2次調査

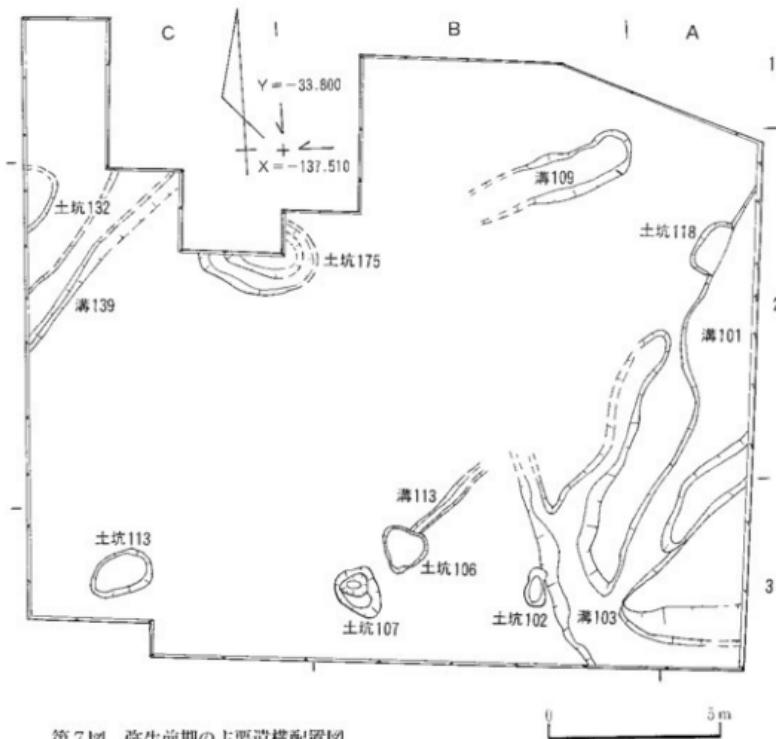
今回の調査では、国土座標における東西・南北方向それぞれのラインを基準として、東西をA～C区、南北を1～3区に地区割りして遺構の検出や遺物の取り上げを行った。第6図に示すように、調査区中央や北寄りの国土座標X = -137,510、Y = -33,800の地点を基準として、東西には基準点より東をA区、基準点より10m西までをB区、10m以上西をC区とした。また、南北では基準点より北を1区、基準点より10m南までを2区、10m以上を3区として区分した。その名称に従い、それぞれの区画をA-1～3区、B-1～3区、C-1～3区といった方法で記述を進めていく。



第6図 第2次調査地区割り図

#### (1) 弥生時代

この調査では、弥生時代前期～中期にかけての溝・土坑などの遺構が、数多く検出された。しかし、その中には、形態そのものが不明瞭であったり、出土遺物の量少さから時期決定の不可能な遺構も存



第7図 弥生前期の主要遺構配置図

在する。そこで、概要報告という本書の性格を考慮して、明確に検出され、時期決定の可能な主要遺構にしほって説明を行うこととする。検出された遺構は、主に前期中葉～中期前半を中心としている。特に、中期前半には多くの遺構が検出されている。本稿では、今回の調査地区における遺跡消長を知るためにも、これらを前期と中期前半に大別した上で、主要遺構の説明を行いたい。

#### 弥生時代前期（第7図）

この時期には、まだ余り多くの遺構は見られない。特に、土坑は少なく、溝が検出遺構の大半を占めている。溝・土坑の順に述べる。

##### A) 溝状遺構

###### 溝101

A-1・2区にわたって、北北東～南南西の方向に走る溝状の遺構である。断面形態は、西側の肩部がテラス状を呈し、その部分が調査区東端部では大きく開いている。最底面は緩やかなU字形となる。幅は220cm、深さは30cm程度である。性格は不分明であるが、肩部が緩やかに広がっていることから自然流路の可能性が考えられる。出土土器は、すべて畿内第I様式後葉に位置づけられるもの

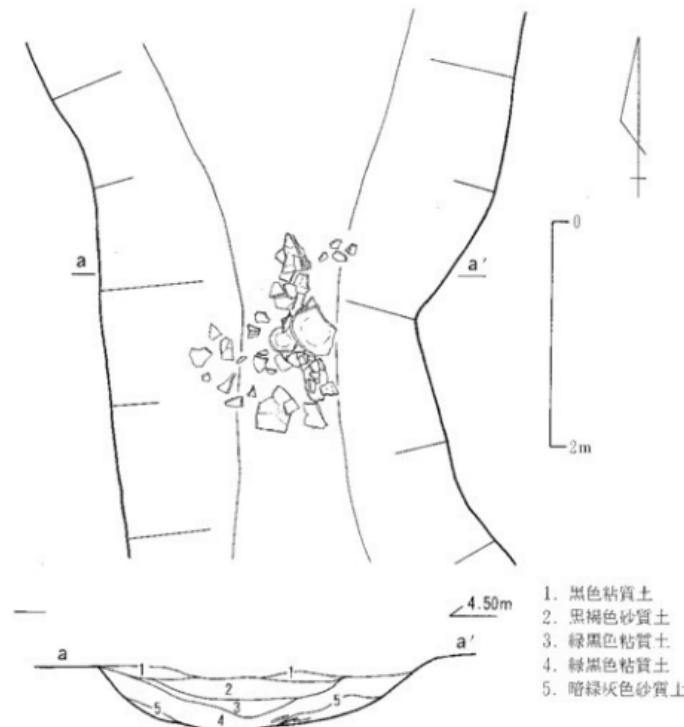
であった。植物遺体なども埋土中に含まれている。

#### 溝103

A-2・3、B-3区にわたって検出した。二又に分れているが、西側は古墳時代河川によって削平されて検出不可能であった。平面形態は不定形であるが、底面にも凹凸が著しいことから人工の遺構とは考えられず、自然流路と思われる。北側では幅約1m、深さ35cmだが南側では深さ50cm前後とレベル差が明瞭で、北から南への流れであったと考えられる。しかし、埋土は黒色粘質土であり流れは緩やかであった事が想像される。第8図のように、溝の底面に貼り付いた状態で甕が一個体出土している。この上器の年代から、本遺構は前期中葉と考えられる。

#### 溝109

B-2区に位置して、東西方向の溝状遺構であるが、これも古墳時代遺構によって削平を受けている。幅約130cm、深さ約15cmと浅いもので、断面形態はU字形を呈する。埋土の中には粗砂がかなり



第8図 溝103 遺物出土状況実測図 (S=1:50)

含まれることから、水流のある状態が想定できる。所属時期は、出土土器から前期中～後葉と考えられる。木片などの植物遺体も多く出土している。

#### 溝113

B-3区で検出した、幅約28cm、深さ約8cm程度の小さな溝状遺構である。北東～南西方向に走るが、南東部は上坑106により、北東部は古墳時代の河川001によって削平されている。所属時期は前期中葉と考えられる。

#### 溝139

C-2区で検出した、北東～南西方向の溝状遺構である。幅約2m、深さ約15cm、断面形態は浅いU字形を呈する。北西側の肩部は溝112によって削平されている。第9図に示す様に、内部から多量の土器の破片が集積した状態で出土している。これらの土器片は、その出土量の割には完形に近い接合復元はできず、また器面の風化の度合いも著しいことから、破碎された土器片が溝に投棄されたものと考えられる。所属時期は、この出土土器から考えて、前期中葉に比定できる。

#### B) 土坑

##### 土坑102

B-3区で溝103の西肩の一部を切るような状態で検出された。平面形態は、不整椭円形で長軸約115cm、短軸約60cm。断面形態はU字形で、深さ約15cmである。出土土器から前期中～後葉に属する遺構と考えられる。

##### 土坑106

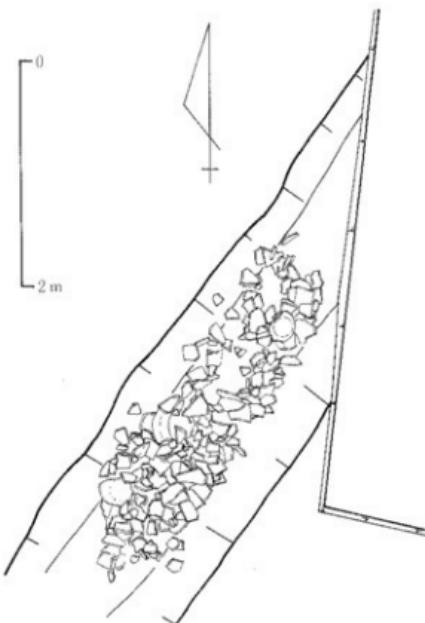
B-3区で溝113を削平する不整円形の浅い落ち込み状の遺構である。径は約135cm、深さは約8cmで、断面形態は逆台形を呈する。埋土からは前期後葉の土器が出土している。

##### 土坑107

B-3区で検出された。平面形態は不整方形で、長軸約145cm、短軸約100cmの規模である。断面形態は、南東方向の立ち上がりの途中にテラスを有して不整円形の落ち込みをもつなど二段になっていて、最底面はU字形を呈する。深さ約40cm程度である。前期後葉の土器を出土している。

##### 土坑113

C-3区に位置する浅い落ち込み状の遺構である。平面形態は不整形な椭円形で、長軸約180cm、短軸約110cmの規模である。断面形態は逆台形で、深さ約10cm程度である。出土土器は前期中葉に属



第9図 溝139 遺物出土状況実測図 (S=1:50)

する。

#### 土坑118

A-2区で溝101に削平される梢円形の浅い落ち込み状の遺構である。長軸約165cm、短軸約135cm、深さ約10cmの規模である。断面形態は逆台形を呈している。出土土器は前期後葉に位置付けられる。

#### 土坑132

半分以上が古墳時代の溝010に削平されている状態で、C-2区で検出された遺構である。おそらく、平面状態は梢円形になると考えられる。深さ約15cmと深い落ち込み状で、断面形態は明瞭な段をもたないレンズ状となっている。出土土器には若干中期のものも混在しているが、大半は前期後葉の範囲でとらえられる。

#### 土坑175

C-2区に位置している。東半部は中期前半の土坑128に削平され、北半部は調査区外で検出できなかったが不整形の大型土坑である。深さは30cmで、断面形態は立ち上がりの途中にテラスをもって二段になっている。埋土中からは土器片と共に、木片等の植物遺体も多く出土している。前期後葉に位置付けられる。

#### 弥生時代中期前半（第10回）

中期に入ると、遺構の数が極端に増え始める。前期同様に溝、土坑の順に述べる。

##### A) 溝状遺溝

###### 溝102

A-1～3区を南北方向に走る細い溝状遺構である。幅約44cm、深さ約10cmと浅く、断面形態はU字形となっている。上層は黄褐色粗砂、下層は暗灰色粗砂と粗砂質の埋土のみによって堆積が進行している。これは、その他の遺構埋土の大半が粘質土を中心とした堆積であるのに比べて特徴的である。・時期の水流の作用か、あるいは人工的に埋められた事によってこれらの堆積が形成された可能性を考える必要がある。出土土器は第Ⅱ様式に位置付けられる。土坑123、溝108などの遺構を削平している。

###### 溝104

B-3区に検出された溝102の西側に平行する南北方向の溝状遺構である。北側は河川001により削平されている。幅約35cm、深さ約10cmと規模の上でも溝102よりやや小規模程度である。土坑104より削平を受けている。出土土器は、少數ながらも第Ⅲ様式に位置付けられるものが主体である。

###### 溝106

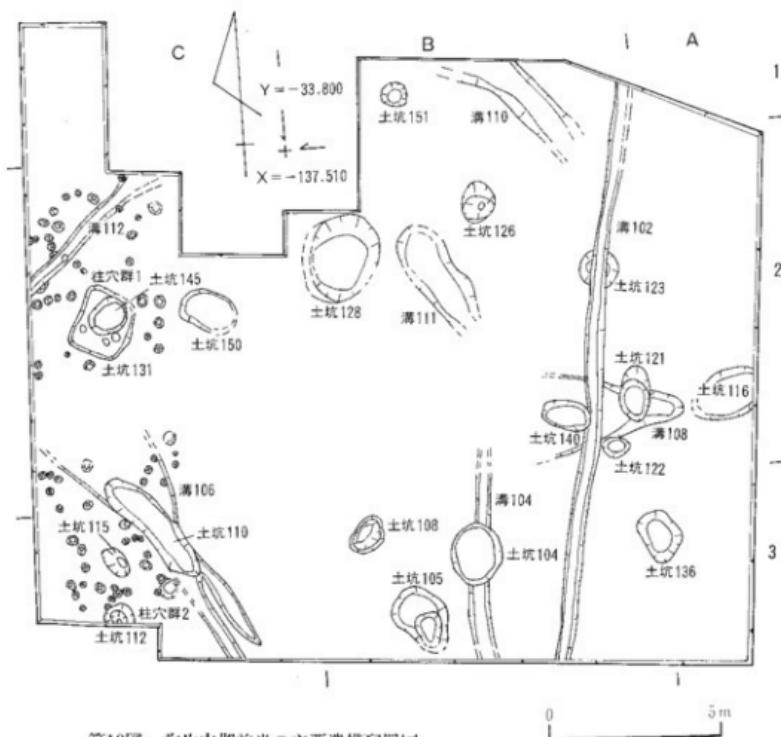
C-3区で検出した幅広の溝状遺構。幅約90cm、深さ約35cmで断面形態はU字形を呈する。土器、植物遺体を出土するが、それらは第Ⅲ様式古相に位置付けられる。

###### 溝108

A-2区で検出された。古墳時代の河川001や溝102などに削平される。幅約150cm、深さ8cmで断面形態はU字形である。出土土器は、前期末のヘラ描直線文の多条化したものと、中期の第Ⅱ様式新規の個体が混在した状態となっている。

###### 溝110

B-1区で検出された溝状遺構で、前期の溝109に削平されている。幅約115cm、深さ約15cmで、断面形態はU字形となっている。出土土器は、第Ⅱ様式に位置付けられるものを主体とし、若干第Ⅲ様



第10図 弥生中期前半の主要遺構配置図

式と考えられる資料が混在している。

#### 溝111

B - 2区に位置し、大半は古墳時代の河川001によって削平されている。幅は約120cm、深さ約24cmで、断面形態はU字形を呈する。溝底面に、多数の柱穴が検出されていることが注目される。出土上器は第Ⅱ様式の新相を中心としている。

#### 溝112

C - 2区で検出した北東～南西方向の溝状遺構である。幅約44cm、深さ約8cmと溝102ときわめて似た規模をもつ。遺構内の堆積についても、黄褐色粗砂と溝102の上層と全く同質の埋土である。洪水などによる同時の埋没を想定することができ、両遺構は同時存在の可能性を考えられる。出土上器は第Ⅱ様式新相である。

#### B) 土坑

##### 土坑104

B-3区において溝104を削平する状況で検出されている。平面形態は橢円形で長軸約190cm、短軸約150cmである。断面形態は、逆台形で、深さ約15cmとなっている。粗砂を多く含む埋土が内部に堆積している。出土土器は第Ⅱ様式に位置付けられる。

#### 土坑105

B-3区で検出された不整橢円形の土坑である。長軸約200cm、短軸約150cm、深さ約35cmの規模となっている。断面形態は北側の立ち上がりにテラスをもつていて、最底面は平坦な面を形成している。出土遺物はあまり多くなく、土器は第Ⅱ様式に属する。

#### 土坑108

B-3区で土坑107の北西に検出された。平面形態は不整橢円形で長軸約125cm、短軸約85cm。底面が平坦で立ち上がりに段を有する断面形態をとる。深さは約20cmである。多くの土器や植物遺体が出士したが、出土土器は、多条化したヘラ描直線文を有するものから第Ⅱ様式新相まで幅広く混在している状態である。

#### 土坑110

C-3区で、溝106に上面を削平される状況で検出された。平面形態は橢円形で長軸約150cm、短軸約80cm、断面形態はU字形で深さ約10cmとなっている。埋土は基盤層の暗青灰色シルトをブロック状に多量に含んでおり、意図的に埋め戻されたことが想定できる。出土土器は第Ⅲ様式古相に位置付けられる。

#### 土坑112

C-3区で検出された小型の土坑で、南端部は調査区外で検出できなかった。平面形態はほぼ円形で直径約90cm、断面形態はU字形で深さ約20cmの規模である。底面に貼り付く状態で、中型の壺形土器一個体がほぼ完形で出土している。また、この遺構も埋土に基盤層の暗青灰色シルトをブロック状に含んでおり、壺形土器を埋置した直後の意図的な埋め戻しを想定できる。小児棺の可能性も考えられる。所属時期は、第Ⅱ様式である。

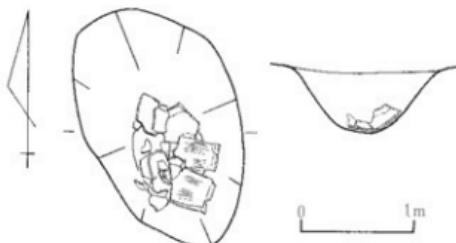
#### 土坑115

C-3区で、土坑112の北に検出された橢円形の土坑。長軸が約95cm、短軸が約60cm、断面形態はU字形で深さ30cm程度である。埋土には炭化物が多く含まれていた。ここでも、ほぼ完形の壺形土器2個体が土坑底面に貼り付いた状態で出土している。(第11図)  
所属時期は第Ⅲ様式古相に相当する。

#### 土坑116

A-2区で検出された。平面形態は橢円形で、長軸約200cm、短軸約150cmとなっている。断面形態はU字形で、深さ約30cm程度である。埋土中には土器、木片、サスカイト剥片などの遺物が非常に多く含まれていた。所属時期は第Ⅱ様式新相に位置付けられる。

#### 土坑121



第11図 土坑115 遺物出土状況実測図 (S=1:50)

A-2区で溝108を削平する状態で検出された。平面形態は楕円形で長軸約165cm、短軸約80cmで、断面形態は北側にテラスを有して底面はU字形を呈している。深さ約22cmである。出土遺物は少ないが、多条化したヘラ描直線文を施す土器片と櫛描文を施すものが共存している。中期初頭つまり第Ⅱ様式の最古相に位置付けられる土器群と考えられる。

#### 土坑122

A-2区で、溝108の南に隣接して検出されている。平面形態は楕円形で長軸約170cm、短軸約100cm、断面形態は逆台形で深さ約10cmと浅いものである。壺形土器が3個体重った状態で出土していた。所属時期は、第Ⅱ様式新相に位置付けられる。

#### 土坑123

A-2区に位置し、溝102に削平された土坑。平面形態は円形で直径130cm程度、断面形態はU字形で深さ約25cmであった。出土遺物は少ないが、土器は第Ⅱ様式古相と考えられよう。

#### 土坑126

B-2区で溝111の北に検出された。平面形態は不整円形で直径は約110cm、断面形態はU字形で深さ約25cmであった。埋土は底面近くで、植物遺体を多く含んだ黒色粘土となっており、直径10cm程度の柱根が、ほぼ垂直に立った状態で出土している。出土土器は、ごく少数だが第Ⅱ様式に位置付けられる。

#### 土坑128

B-2区で溝111の西に検出された大型土坑。平面形態は不整円形で直径約200cmであり、断面形態は、緩やかな逆台形で深さ60cm程度である。埋土の堆積状況は、7層に細別することが可能だが、上・中・下層に大別して遺物の取り上げを行った。(第12図)いずれの層からも、土器片を中心とした遺物を多量に出土している。上層からの出土品では、完形の縁泥片岩製石窓丁(図版10b)などが目を引く。下層の中央部の細別第5層は、炭化米などの細かな植物遺体と小動物の骨などを多く含んだ黒色粘土である。この層からは、ほぼ完形の状態で壺形土器3個体、斐形土器1個体が集積した状態で出土している。これらは、すべて第Ⅲ様式古相に位置付けられ、良好な当該期の一括資料と言えよう。また、この上器群に伴う状態で木製の刺突具が出土している。湧水層に到達した部位を底面としていることから、井戸としての性格を考えられる。

#### 土坑131

C-2区で検出した方形土坑。長辺約190cm、短辺約160cm。断面形態は逆台形で深さ約5cmと浅い遺構である。底面の四隅に、それぞれ柱穴が検出されていて、何等かの建築物である可能性を考えられる。出土土器は第Ⅱ様式～第Ⅲ様式古相の資料が混在した状況となっている。

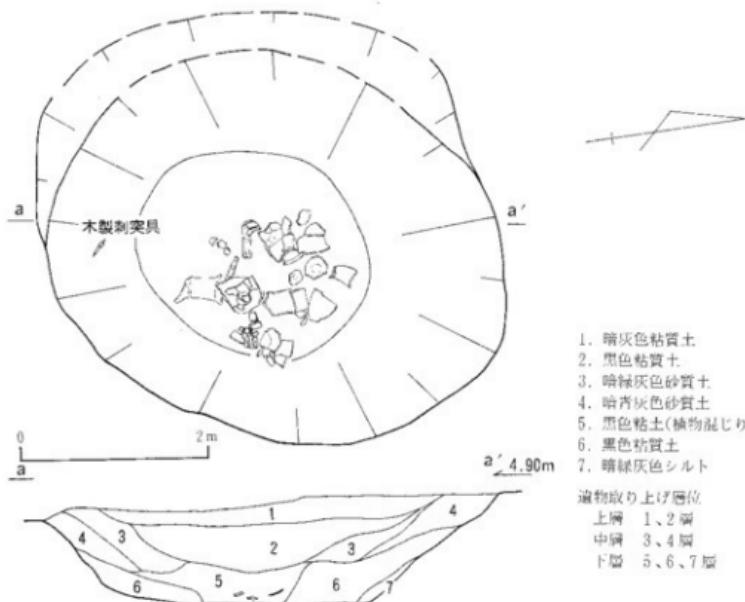
#### 土坑136

A-3区に位置する不整方形の土坑。長辺約160cm、短辺約75cmで断面形態はレンズ状で深さ25cmとなっている。出土土器は第Ⅱ様式新相である。

#### 土坑140

B-2区で溝102を削平する状態で検出された。平面形態は楕円形で、長軸が約140cm、短軸が約100cmの規模である。断面状態はレンズ状で、深さ約25cm程度である。出土土器は少量だが、第Ⅱ様式新相を中心としている。

#### 土坑145



第12図 土坑128 遺物出土状況実測図

C-2区で土坑131に上面を削平された状態で検出された。平面形態は不整楕円形で長軸約130cm、短軸約98cm。断面形態はレンズ状で深さ約30cmである。出土土器は第Ⅱ様式新相である。

#### 土坑150

C-2区で土坑145の東に位置する不整楕円形の土坑で、一部は古墳時代の河川001に削平される。長軸約150cm、短軸約130cmで断面形態は逆台形で深さは約35cmの規模である。出土土器は第Ⅰ様式から第Ⅲ様式までの土器が混在している。

#### 土坑151

B-1区に検出した円形の土坑。直径約70cm、深さ約20cmで断面形態はU字形を呈する。出土土器は第Ⅱ様式に属する。

以上が第二次調査で検出した主要な弥生時代の溝、土坑である。実際にはこれ以外にも細かな遺構が存在する。例えば、遺構面の全面に無数の柱穴が検出された。これらのすべてについて述べることはできないが、何等かの建築物の存在が想定できるようなまとまりをもった柱穴群2ヵ所についてのみ説明したい。

#### 柱穴群1

C-2区で土坑131・145の付近に群集する柱穴群である。数棟の掘立柱建物の存在が想定できるが、あまり明確に建物を構成する柱穴群を特定することはできない。おそらく、總柱建物は存在せず、し

たがって高床建物ではなく平地式の建物が何度か建て替えられたものと考えられる。時期は特定できないが、周囲に遺構が増え始める中期前半の建物群の痕跡でないだろうか。

#### 柱穴群2

C-2区で溝106の付近に群集する柱穴群である。建物を明確に特定することはできず、柱穴群1に状況は類似している。しかし、柱穴の密集度は高く、何等かの建築物の立て替えが幾度も行われたと考えられる。時期は特定できないが、中期前半を想定しておきたい。

(若林邦彦)

#### (2) 古墳時代(第13図)

今回の調査では古墳時代の遺構、遺物が検出され当該遺跡に新知見を得た。しかし検出した遺構の中には、まったく遺物等を出土しないものや、自然流路である河川001に削平、もしくは切断されたものが多く、明確に時期決定できなかった遺構もある。

##### 溝001

調査区東で検出した溝状遺構である。長さ約13.5m、幅0.4~1.7m、深さ7cm程度である。調査区南端で溝005に切られる。

##### 溝002

調査区中央北寄りで長さ約2.2mに亘って検出した。最大幅0.5m、深さ約3cmの浅いもので断面形はレンズ状を呈する。

##### 溝005

調査区南端A-3区からB-3区へ北西の流路を示す。B-3区で大きくY字形に分流し北側を溝005A、南側を溝005Bとした。溝AはB-3区中間で立ち上がり東側肩部に明瞭なテラスをもつ2段となる。テラス部、灰白色砂質土層から須恵器杯身、短頸壺、甌等が出土している。長さ約7.0m、幅2.2mで底面形はレンズ状を呈する。B-2区で河川001に切られる。また、溝Bは長さ10.0m、幅約1.6mで断面は浅いU字形を呈する。B-3区で河川001に切られる。

##### 溝007

C-2区で河川001に切られ南西への流路をもつ。C-3区で分流し東側を溝007A、西側を溝007Bとした。溝007Aは長さ3.5m、幅約0.2~0.6m、深さ約7cmで、断面形は浅いU字形を呈する。溝007Bは長さ3.0m、幅約0.6~0.8m、深さ約20cmで、立ち上り両肩がややテラス状を呈し、底面はU字形である。暗青灰色粘質土層から土師器小型壺が出土している。

##### 溝008

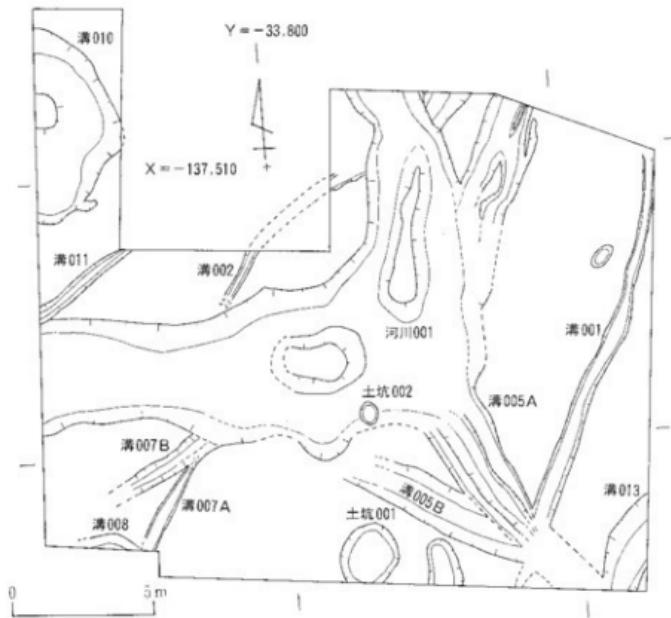
C-3区で彎曲した部分を長さ約2.0m検出した。本体は調査区外へ続いており規模等は不明である。

##### 溝010

調査区北西端C-1区で彎曲した部分を長さ約5.5m検出した。幅約2.0~2.5m、深さ約10~20cmで埋土に大量の植物遺存体を含む細砂との互層をなす。断面形は浅いU字形、もしくはレンズ状を呈する。

##### 溝011

C-2区で長さ約3.7mを検出した。幅約0.4~0.5m、深さ約10cmで、断面形はU字形を呈し、両



第13図 古墳時代遺構配置図

端部は、いずれも調査区外へ続く。

#### 溝013

調査区東南端A - 3区で彎曲部分の長さ約3.7mを検出した。幅約1.6~2.2m、深さ約40cmで断面形はU字形を呈する。東端部は調査区外へ続き、南端部は溝005によって切られる。

#### 土坑001

B - 3区で検出した長軸約2.5m、短軸約2.0m、深さ約0.2mの精円形の遺構である。土坑内の堆積土は下層から灰色粘質土層、黄灰色砂質土層、オリーブ黒色粘質土層となっている。

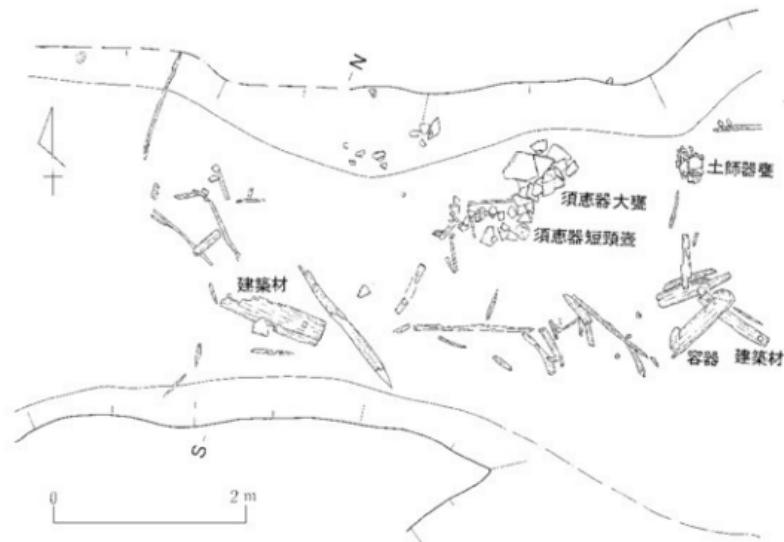
#### 土坑002

B - 2区、河川001内で検出した長軸0.9m、短軸0.7m、深さ約0.4mの精円形の遺構である。遺物等は出土していない。

#### 河川001 (第14・15図)

調査区B - 1区、B - 2区、B - 3区、C - 2区におよぶ。B - 1区を南へ流れ、B - 2区で大きく西へ彎曲する流路を示す。検出した長さ約21m、平面形は不定形で幅約2.5~7.5m、深さ約0.2~0.4mを測る。底面は凸凹が著しく断面形は不定である。遺物は多くの須恵器、土師器、木製品等が暗緑灰色粘土層から出土している。これらの土器から古墳時代後期と考えられる。

(植田正幸)



第14図 河川001 遺物出土状況実測図 ( $S=1:60$ )



第15図 河川001 土壠断面実測図 ( $S=1:30$ )

## 2. 第3次調査

### (1) 弥生時代(第16図)

#### A) 溝状遺構

##### 溝101

調査区の北部に検出した、北東～南西方向の溝状遺構。深さ2～3cmと浅い落ち込み状の遺構である。平面形態と断面形態は、共に不定形であることから、自然流路と考えられる。出土上器は第I～第II様式が混在した状態である。第2次調査の溝101から連続する遺構の可能性が考えられる。

##### 溝102

溝101から北へ伸びる溝状遺構。この遺構も平面形態が不定形で、深さ2～4cm程度の浅い落ち込み状遺構であることから、自然流路と考えられる。第II様式の土器を中心に出土している。

##### 溝103

溝102の東に検出された。東側は近代の搅乱によって、検出が不可能であったので平面形態は不明瞭であった。この遺構も、深さ3～5cm程度と深いものである。出土上器から所属時期は、第II様式期に相当すると考えられる。

#### B) 土坑

##### 土坑101

調査区の南西角で検出された大型土坑。西半部が調査区外であることもあって、平面形態は不明瞭である。深さは30cm程度で、断面形態はU字形である。内部からは、第II様式の土器と板材状の木片が一括出土している。

##### 土坑102

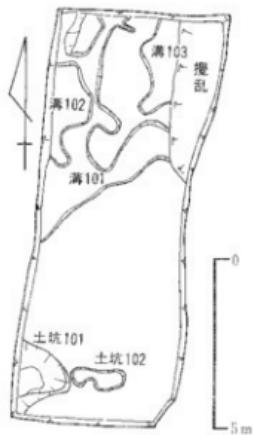
土坑101の東に検出した浅い落ち込み状の遺構。深さ4～5cm程度である。内部からは第II様式の土器が出土している。

### (2) 古墳時代(第17図)

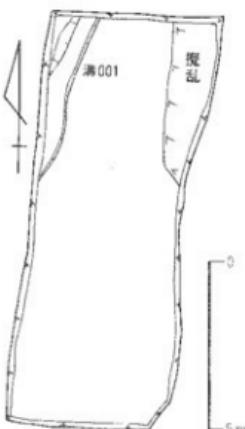
##### 溝001

調査区北西角で検出された北北東～南南西方向の溝状遺構。深さ30cm程度だが、断面形態は、立ち上がりの途中にテラスを有して二段になっている。古墳時代と考えられる土師器を出土するが、弥生中期の土器の混在が見られる。

(若林邦彦)



第16図 弥生時代遺構配置図



第17図 古墳時代遺構配置図

## 第3節 出土した遺物

### 1. 弥生土器

先述のように、第2・3次調査では、前期中葉から中期前半にかけての土器が主として出土している。本稿では、これらを遺構内に時間的同時性の高い状況で出土した一括資料を中心に提示し、説明を加える。

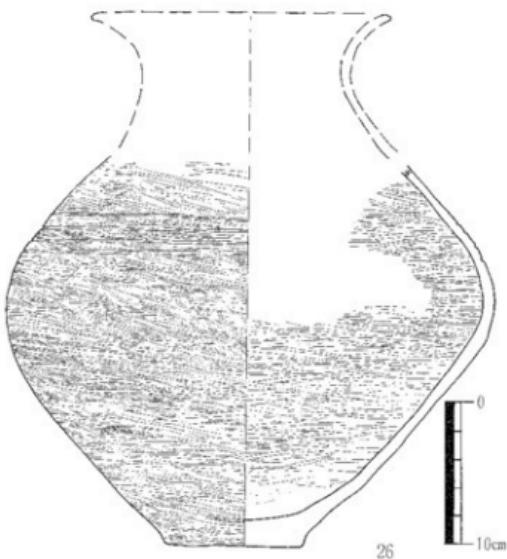
#### A) 前期の土器

##### 溝103出土土器（図版18）

前章でのべたように、本遺構では底面に貼り付く状態で前期の壺形土器が一個体出土している。口頸部は欠損しているが、胴部～底部にかけてはほぼ完存している。胴部上位に4条のヘラ描直線文を施している。外面の器面調整は、条線の細かな斜め方向のハケ調整をおこなった後に横方向のヘラミガキ調整を施している。このヘラミガキ調整は胴部中位では粗くなっていて、ハケ調整が露出している。内面はナデ調整の後に横方向のヘラミガキ調整を密に施している。前期中葉に位置付けられる。

##### 溝139出土土器（図版59）

溝埋土中に、破片の状態で集積されていた。完形に復元できる個体はない。1～5は広口壺である。1は頸部に削り出しによって段を作成している。内外面ともに、ヘラミガキ調整を密に施している。2は頸部に4条のヘラ描直線文を有している。器面の荒れが著しく、調整は不明瞭だが内外面ともにヘラミガキ調整が看取できる。3も同様のタイプだが、口縁部内面に2条のヘラ描直線文がめぐっている点が特徴と言えよう。4は頸部にヘラ描直線文3条を施すと共に、その直下に不明瞭ながらも削り出しによって段を作り出しているようである。口縁部直下に紐孔を焼成前に穿つ。内外面ともにヘラミガキ調整で仕上げているが、外側にはその前のハケ調整が窺われる。1～4までは全体に器面の風化が顕著で、色調は淡赤褐色を呈している。5は器面の遺存状態が極めて良く、明灰褐色を呈している。頸部・胴部上位に5条ずつヘラ描直線文を施す。内外面ともに、単位の細いヘラミガキ調整を密に行っている。内面の胴部中位には、指頭圧痕が並び、その部位の断面には明瞭に粘土帶の剥離痕



第18図 溝103 出土土器実測図 ( $S=1:4$ )

が看取できる。製作時の、成形単位を示すと考えられよう。

6は壺蓋と考えられる。直径14cmと小型品で、つまみの端部に1ヶ所ヘラによる刻みが施される。外面は横方向のヘラミガキ調整、内面はナデ調整によって仕上げられている。色調は淡褐色である。

7・8は壺形土器である。両者共に遺存状態が悪く器面荒れが著しいため、調査手法の判別できなない。7・8ともに、口縁部に刺み目をもち、胴部上位に4条のヘラ描直線文が施される。7は口縁部外面に指頭圧痕が並ぶ。8はヘラ描直線文の下に、横方向のハケ調整が窺われる。7・8ともに淡赤褐色を呈する。前期中葉に位置付けられる一括資料と考えられる。

## B) 中期の土器

### 土坑I15出土土器（図版14・60, 9・10）

2点の壺形土器は、土坑底部に重なるように共併して出土した。9は、口縁部が緩やかに外反して、端部に面をもつ無文の壺形土器である。胴部は、内外面ともにハケ後ナデ調整で仕上げられる。底部は、やや突出して厚くなり、指で押さえることによって、高台状に中央部が凹み氣味となる形態をついている。全体に淡褐色を呈し、外面の胴部中位から上位には煤が付着している。

10は、大和型あるいは近年では浜津型aとも呼ばれる壺と言えよう。口縁部は、緩やかに外反して端部を丸く仕上げた上に、内面にハケ調整を行い、最終の仕上げには、内外面ともに弱いナデ調整を施している。端部には棒状工具による刺突がみられる。胴部外面はハケ調整で下位のみナデ調整が加えられている。胴部内面はハケ後ナデ調整だが、上位にのみハケ調整が明瞭に残存している。色調は淡褐色を呈し、胎土には赤色斑粒の含有が多い。外面胴部上～中位には煤の付着がみられる。第Ⅱ様式に比定できよう。

### 土坑I22出土土器（図版60, 11～14）

4点の壺形土器が、破片の状態で集積して出土した。11は、内外面をヘラミガキ調整によって仕上げている。河内型壺の範疇でとらえ得るが、色調は暗黄褐色で、胎土も所謂生駒西麓産と呼ばれるものではない。底部が高台状に作りあけられている点が特徴的である。中河内地域からの搬入品か否かは特定できない。

12・13は、大和型壺あるいは浜津型a壺に相当しよう。12は口縁部の外反の度合いが比較的強く、13では緩やかである。調整手法では、両者共に胴部外面にハケ調整、内面はナデ調整によって仕上げられている。外面では口縁部までハケ調整が及び、その内面にもヨコハケ調整を行うが、最終調整ではナデ調整によって仕上げられている。12・13ともに淡赤褐色を呈する。

14は、口縁部に面をもち、山形状の隆起を有する大型の近江型壺である。外面は条線の明瞭な原体によるハケ調整が、口縁端面では横方向に、胴部では縦方向に行われる。また口縁端部には、ハケ調整工具による列点が施される。内面では、口縁部にヨコハケ調整、胴部はハケ調整の後ナデ調整が行われ、指頭圧痕の残存が著しい。近江地域からの搬入品と考えられる。11～14は第Ⅱ様式新相に比定できる一括資料と言えよう。

### その他の第Ⅱ様式土器（図版14・61）

上記以外にも、遺構内あるいは包含層内から同化できる資料としては単独で出土した第Ⅱ様式資料がある。そのうち、良好な資料のみここに提示する。

15は、B-2区の溝状の落ち込みから出土した広口長頸壺である。頸部には、竹管状の原体による数条を単位とした直線文が3帯施されている。上・下段は5条、中段は4条とばらつきがみられ、櫛

描文のような固定的な原体による施文ではなく、1本ずつ遊離した植物質の繊維を幾条か手に持った状態で施文がおこなわれたと考えられよう。櫛描文成立期の過渡的状況を示す土器ではないだろうか。口縁部はナデ調整、頸部は外面ともにハケ後ヘラミガキ調整により仕上げられる。色調は暗褐色で、粗砂を多く含んだ粗い胎土によって作られる。17は無文の広口長頸壺で、B-2区の落ち込み状の地形から出土した。口縁部はナデ調整、頸～胴部外面はハケ後ヘラミガキ調整がおこなわれるが、ヘラミガキ調整は粗く縦方向に行った後に横方向に密に施す。内面はハケ後ナデ調整であるが、指頭圧痕と思われる凹凸が顕著である。色調は明褐色を呈する。16は、包含層中から出土した口縁部がやや外反気味の短頸壺である。1帶4条の櫛描直線文を頸～胴上部に施す。外面は器面の荒れが著しく調整は不明である。内面にはヘラミガキ調整が窺われる。色調は暗褐色で、角閃石が多く含まれている生駒西麓産胎土である。中河内地域からの搬入品と考えられる。

18～20は壺形土器である。18は土坑112から単独で出土している。口縁部はナデ調整、胴部内外面とともに板状工具でなでることによって器面調整を行っていると考えられ、ハケ調整のような明瞭な条線は残存していない。底部外面には木葉痕がみられるが、中央部はナデ調整によりそれが消されている。色調は黄褐色を呈し外面に煤、内面には炭化物が付着している。20は小型品で、溝106から出土している。外面と口縁部内面にハケ調整をおこなう大和型壺である。しかし、通有のものとは異なり胴部内面には粗く明瞭なヘラケズリ調整を行っている。その他にも破片の状態で同種の土器が出土しており、当遺跡での特異型式と呼べるかもしれない。明褐色を呈し、外面には煤が付着する。19は土坑116から出土している。外面と口縁部内面にハケ調整を残し、いわゆる大和型壺の範疇に属するが、口縁部の上端、下端双方に刻みを施すなどこの地域通有のものとは少し趣を異にしている。暗灰褐色を呈し、外面には煤が付着する。

#### 土坑128出土土器（図版15・62）

下層において、壺形土器3個体、壺形上器1個体が良好な遺存状態で一括出土している。第Ⅲ様式の古相に位置付けられる。21は無文の広口長頸壺である。外面では、口縁部がヨコナデ調整、頸部縦方向のハケ調整、胴部が縦方向にハケ調整した後、下半部にはヘラミガキ調整を施す。内面は、口縁部はハケ調整をおこなうが、その後に口縁部のみヨコナデ調整によって仕上げられる。22は、口縁部は欠損しているものの、櫛描直線文を7帯かそれ以上施す広口長頸壺と考えられる。黄褐色を呈する。外面では、頸部から胴部にかけては細かな条線を際立たせる原体によるハケ調整が行われ、胴部下半は縦方向のヘラミガキ調整でそれらが消されてしまっている。内面は胴頸部とともにハケ後ナデ調整である。内面に使用されるハケ調整工具は、条線が幅広で外面のそれとは異なっている。色調は淡黄褐色である。

23も広口長頸壺であるが、胴頸部が明瞭な境をもたない形態をとる。櫛描文は極めて密に施され、直線文を中心に1帯だけ波状文を交える構成となっている。施文原体は、太い植物繊維を7～8条束ねたものと考えられ、当該期の畿内通有の櫛描文原体とは全く異なる。口縁部はナデ調整、胴部外面と頸部内面はヘラミガキ調整によって仕上げられる。器面の色調は暗褐色を呈する。形態、文様構成、施文原体ともに当該期の畿内地域には見られないものであり、他地域からの搬入品あるいはその模倣品の可能性が高いと思われる。搬入の源流や模倣の対象地域の候補地としては、北陸地域を考えたい。

24も口縁部が欠損するが、短頸の広口壺と考えられる。外面の器面の剥落が著しく、文様、調整ともに非常に不明瞭である。最下段の櫛描直線文だけが若干窺われるのみで、その他の文様は判別がつ

かない。器面調整は、胴頸部にハケ調整が行われ、胴部下半にはヘラミガキ調整が施されているようである。内面は、胴頸部以下から上へのハケ調整が行われ、底部には指頭圧痕が顕著である。器面の色調は、暗灰褐色を呈する。

25は中型の甕形土器である。口縁部をナゲ調整により明瞭に屈曲させ、端部はやや垂下気味になっている。胴部は、内外面ともにヘラミガキ調整により仕上げられる。所謂河内型甕であり、色調が暗褐色で、角閃石を多く含む生駒西麓産の胎土である。中河内地域からの搬入品と考えられよう。胴部上中位の外面には煤の付着が著しく、内面にも炭化物の付着がみられる。

(若林邦彦)

註

1. 森田克行 「揖津地域」『弥生土器の様式と編年 近畿編Ⅱ』 木耳社 1991

## 2. 古墳時代の土器 (図版16・17・62)

古墳時代の土器は自然河川001を中心にして出土している。

1～4は須恵器杯蓋である。

3は口縁部が下外方に下り端部は丸く、内側に凹線を有する。天井部は、やや低く平らである。調整は天井部外面5分の1に回転ヘラケズリ調整が施され、他は回転ナデ調整が施されている。焼成は、やや不良、胎土は密、暗青灰色を呈する。成形はマキアゲ、ミズビキである。口径15.5cm、器高4.6cmを測る。

2は口縁部が下外方に下り端部は丸い。天井部は、やや高く外面4分の1に回転ヘラケズリ調整が施され、他は回転ナデ調整が施されている。器形は歪みが著しく、口径は長径15.0cm、短径13.8cmを測る。成形はマキアゲ、ミズビキである。焼成はやや不良で瓦質気味、胎土は密で、暗灰色を呈する。器高4.3cmを測る。

1の口縁部は長く垂直に下り端部は丸く鋸い。天井部はやや高く外面3分の1に回転ヘラケズリ調整が施され、他は回転ナデ調整が施されている。天井部外面3分の1に緩やかな歪みをもち口縁部との境に浅い凹線がめぐる。成形はマキアゲ、ミズビキである。焼成は良好、胎土は密、青灰色を呈する。口径14.2cm、器高4.3cmを測る。

4は口縁部が下外方に下り端部は丸く鋸い。天井部はやや低く外面3分の1に回転ヘラケズリ調整が施され、他は回転ナデ調整が施されている。ロクロの回転方向は左回りである。成形はマキアゲ、ミズビキである。焼成はやや不良で瓦質気味、胎土は密、灰色を呈する。口径16.0cm、器高3.8cmを測る。

19は口縁部が下外方に下り、端部は丸く、内側に沈線を有する。天井部はやや高く、外面5分の1に回転ヘラケズリ調整が施され、他は回転ナデ調整が施されている。天井部外面3分の1に緩やかな歪みをもつ。成形はマキアゲ、ミズビキである。焼成はほぼ良好、胎土は密、灰白色を呈する。口径15.3cm、器高4.2cmを測る。

5～7は須恵器杯身である。

5は、たちあがりが短く内傾してのび、端部は丸い。受部はほぼ水平にのびる。調整は体部外面5分の1に回転ヘラケズリ調整が施され、他は回転ナデ調整が施されている。ロクロの回転方向は右回りである。成形はマキアゲ、ミズビキである。焼成は良好、胎土は密、灰白色を呈する。口径12.6cm、器高4.7cm、たちあがり高1.3cm、受部径14.7cmを測る。

6は、たちあがりが短く、内傾したのち直立し、端部は丸い。受部は外上方にのびる。調整は体部外面3分の1に回転ヘラケズリ調整が施され、他は回転ナデ調整が施されている。ロクロの回転方向は右回りである。成形はマキアゲ、ミズビキである。焼成は良好、胎土は密、灰白色を呈する。口径13.0cm、器高3.1cm、たちあがり高0.7cm、受部径14.8cmを測る。

7は、たちあがり短く内傾し端部は丸い。受部は外上方にのびる。調整は体部外面3分の1に回転ヘラケズリ調整が施され、他は回転ナデ調整が施されている。ロクロの回転方向は右回りである。成形はマキアゲ、ミズビキである。焼成はほぼ良好、胎土はほぼ密、灰白色を呈する。口径13.5cm、器高4.0cm、たちあがり高1.1cm、受部径15.3cmを測る。

9は知類壺である。口縁部は短く直立してのび、端部は丸い。肩部は約130°の角度で交差し、下方へ張り出す。体部最大径を2分の1上位に有したのち、緩やかに屈曲して下内方へ下る。底部は丸味

をもち、体部外面3分の2に不明瞭なカキメ調整を施す。口頭部から肩部に2ヶ所「小」状の記号をもつ。内面下位に鉄分の付着が顕著に認められる。成形はマキアゲ、ミズビキである。焼成は良好、胎土は密、青灰色を呈する。

8は提瓶である。頭部は上外方にのび、口縁端部は丸い。体部は扁球状をなし、2分の1に回転ヘラケズリの後カキメを施す。肩部に断面カギ状をなす把手をもつ。ロクロの回転方向は左回りである。焼成良好、胎土は密、青灰色を呈する。

11～12は須恵器甌である。

12は口縁部を欠損している。体部は扁球状で最大径は体部中位に位置し、径1.5cmの円孔を穿つ。底部は平らに近い。体部外面下位は回転ヘラケズリ調整が施されている。他は回転ナデ調整。ロクロの回転方向は左回りである。焼成は良好堅敏で胎土は密、灰色を呈する。成形はマキアゲ、ミズビキである。体部最大径9.2cm、残存器高11.0cmを測る。

11は口頭部を欠損し、体部最大径を体部中位にもつ。体部最大径上位に1.6×1.5cmの円孔を穿ち、底部は丸みを呈する。体部外面の3分の1に回転ヘラケズリ調整を施す。他は回転ナデ調整。ロクロの回転方向は右回りである。焼成はやや不良で胎土は密、灰白色を呈する。成形はマキアゲ、ミズビキである。体部最大径10.5cm、残存器高8.5cmを測る。

17は甌である。口縁部は外縁気味に上外方にのび、端部は肥厚する。口頭部と体部は120°で交差する。肩部は下外方に張り出し、胴部は最大径を中位に有する。体部外面には平行タタキを施した後にカキメ調整を施す。底部は丸味を呈する。内面は同心円文、肩部に自然釉がかかる。焼成は良好、胎土は密、灰色を呈する。体部最大径46.5cm、器高47.0cmを測る。

18は口頭部を欠損する大甌。肩部は下外方に張り出し、胴部は最大径を中位に有する。底部は丸く、体部外面下位に5ヶ所の緩やかなくぼみをもつ。体部外面全体に平行タタキ目を施し、内面は同心円文を施す。焼成良好、胎土は密、青灰色を呈する。体部最大径74.5cm、残存高80.0cmを測る。

13は土師器小型壺である。約2分の1を欠損する。口縁部は緩やかに外彎して上方に立ち上がり、端部は丸い。胴部は最大径を中位に有し、ほぼ球形で底部は平らに近い。調整は口縁部外面はヨコナデ調整、内面は横方向のハケメ調整。肩部から外面全体は縦方向のハケメ調整を施す。焼成は良好、胎土は密、黒褐色を呈する。口径9.3cm、器高11.0cmを測る。

14～15は土師器壺である。14は、口縁部がわずかに内彎し端部は丸い。底部は、ほぼ平坦となる。体部外面に幅2.0～2.5cmの粘土紐接合痕が明瞭に認められる。調整は、荒い縦方向のハケメ調整を施す。焼成は良好、胎土は0.1～0.5cmの砂粒及び小石を含むが、ほぼ密、褐色を呈する。口径14.0cm、器高9.1cmを測る。

15は口縁部が少し内彎気味で端部は丸い。底部は平らで、外面は部分的に乱方向の荒いハケメ調整が施される。焼成は良好、胎土は0.1～0.5cmの砂粒を含むが、ほぼ密。口径14.3cm、器高5.0cmを測る。

16は、土師器長胴甌である。口縁部は「く」の字形を呈し、最大径を胴部中位に有する。胴部外面に2.0～3.0cmの粘土紐接合痕が明瞭に認められる。調整は口縁部はヨコナデ調整、肩部から胴部外面全体は縦方向のハケメ調整を施す。底部は欠損しているが丸底を呈するであろう。焼成良好、胎土はやや砂粒を含むが密。褐色を呈し、胴部に約26.0×15.0cmの黒斑が認められる。口径19.6cm、残存高41.3cm、胴径25.3cmを測る。

以上の上器は、古墳時代後期（6世紀後半）のものであろう。

（植田正幸）

### 3. 石器（弥生時代）

第2・3次調査では、大量の石器が出土した。これは、玉類の製作工程を示す剥片類をさがすために、第2次調査で包含層土をすべて水洗した事によって検出できたものである。そのため、型式・用途が類推、決定できる製品類は勿論のこと、その製作途中で発生する剥片類や欠損品も多く出土した。本書ではそれらのすべてを紹介することはできないが、形式の認定できる製品類について説明を加えたい。

#### 武器類

##### A) 石鎌（図版18～25・46・64）

出土した石鎌は総計で455点である。そのうち1点は粘板岩製の磨製石鎌であるが、それ以外は大半がサスカイト製の打製石鎌となっている。本書では、これらを基部の形態を中心的要素として凹基無茎式・平基無茎式・円基無茎式・凸基無茎式・凸基有茎式の5分類を基本として報告する。これは、『紫雲出』<sup>①)</sup>・『池上遺跡』第3分冊の2石器編を基本として設定した『高宮八丁遺跡』石器編（第1次調査の報告）での分類を踏襲したものである。上記5分類に属さないものは特殊形態として扱う。また、欠損などにより、分類できないものが63点ある。

##### a) 凹基無茎式（図版18～21・46・63, 1～190）

凹基無茎式の石鎌は190点出土している。石鎌全体の約42%であり、最大量を占める。肉眼による判断では、二上山周辺に産するサスカイトを石材とするものが大半をしめる。しかし、ごく僅かではあるが他地域特に金山産と思われるサスカイトを用いたものが散見される。肉眼による判断では、18点（6・8・12・15・23・59・66・91・95・113・127・128・140・164・171・172・177・190）ほどがその候補として挙げられる。いずれも、白く風化した色調で石材自身に細かい層状の節理が目立ち、そのために縁辺部の細部調整には階段状剥離が著しいという特徴をもっている。

平面形態は多様である。基辺と側辺の長さがほぼ等しくなるものから、全体の長さが基辺長の2倍を越えるものまで大きな差が存在する。また、基部の形態も凹みが三角形の深いものから半円形で浅いものまでバラエティがある。断面形態にも多様性は認められるが、長さ3cm程度までの小・中型品では比較的扁平なものが多いのに対し、それ以上の長さのものでは中央部に膨らみを有する菱形やレンズ状を呈することが多い。これは、小・中型品においては中央部に大きく主要剥離面を残したまま、縁辺のみに細かな剥離調整を行なう手法をとるからである。大型品では、両側縁からの押圧剥離が、中央部近くまで及ぶ事が多く、錐状の稜線を作り出すものもある。それに呼応するように、前者に比べて後者の方が素材剥片に厚手のものを利用する傾向がうかがわれる。

法量では、長さ0.5～4.0cmの範囲に納まるが、その中でも特に1.5～2.5cmまでのものが70%以上を占める。重量でも0～4.5gの幅をもつものの、特に0.5～1.5gに70%程度の個体が集中している。（第2・3表）長さ2cm前後、重量1g前後が凹基無茎式石鎌の典型的な在り方と言えよう。

##### b) 平基無茎式（図版21・22・46・64, 191～247）

総数57点を数え、石鎌全体量の約12%を占める。石材は二上山産サスカイトが大半を占めると考えられるが、前記のように肉眼で他地域産（金山産？）と類推できる個体は7点（図版21・22、194・197

第1表 第2・3次調査出土石器点数表

石鎌	石剣	石庖丁	石錐	扁平片	柱状片	大型蛤	その他 の石斧	敲石	砥石	楔形 石器	刃器	用途不明 石器	計
453	18	71	169	3	3	7	1	17	31	24	113	20	930
48.7	1.9	7.6	18.2	0.3	0.3	0.8	0.1	1.8	3.3	2.6	12.2	2.2	100%

第2表 出土石鎌長さ別点数表

	0~0.9	1.0~1.9	2.0~2.9	3.0~3.9	4.0~4.9	5.0~5.9	計						
凹基無茎式	0	4	8	66	73	29	6	4	0	0	0	0	190点
		2.1	4.2	34.7	38.4	15.3	3.2	2.1					100%
平基無茎式	0	1	6	12	20	11	3	2	0	2	0	0	57点
		1.8	10.5	21.1	35.1	19.5	5.3	3.5		3.5			100%
円基無茎式	0	0	0	6	19	25	8	6	2	0	0	0	66点
				9.1	28.8	37.9	12.1	9.1	3.0				100%
凸基無茎式	0	0	1	3	7	11	6	10	5	3	1	0	46点
				2.2	6.5	15.2	23.9	13.0	21.7	10.8	6.5	2.2	100%
凸基有茎式	0	0	0	1	4	6	5	4	0	1	0	0	22点
				4.5	18.2	27.3	22.7	18.2		4.5			100%

第3表 出土石鎌重量別点数表

	0~0.9	1.0~1.9	2.0~2.9	3.0~3.9	4.0~4.9	5.0~5.9	6.0以上	計	
凹基無茎式	14	75	62	21	10	5	2	0	190点
	7.3	39.5	32.6	11.1	5.3	2.6	1.1	0.5	100%
平基無茎式	1	18	11	16	2	1	0	2	57点
	1.8	31.6	19.3	28.1	3.5	1.8	3.5	1.8	100%
円基無茎式	1	13	23	8	10	4	2	1	66点
	1.5	19.7	34.8	12.1	15.2	6.1	3.0	1.5	100%
凸基無茎式	1	9	13	5	5	3	3	4	46点
	2.2	19.5	28.3	10.8	10.8	6.5	6.5	8.7	100%
凸基有茎式	0	1	5	7	3	1	2	1	22点
		4.5	22.7	31.8	13.8	4.5	9.1	4.5	100%

・199・212・233・235・239) である。

平面形態は、側縁が直線的で三角形を呈するタイプと、曲線的に膨らみをもつタイプの2種類がある。長さ2cm以下の小型品では正三角形に近い形態となり、中・大型品では基辺長は余り大きくなり側辺が伸びる二等辺三角形を基調とした形態をとる。

断面形態は基本的に扁平なものが多い。中央部に主要剥離面を残存させる手法が用いられる傾向があるためと考えられる。ただ、本型式においても、長さ3cm以上の大型品に関しては肉厚の剥片を素材として用いて、断面形態も菱形か厚いレンズ状を呈するものが多い。

法量では長さ0.5~5.0cmの範囲で存在するが、1.5~3.0cmの間に70%以上の個体が集中する。凹基無茎式よりは幾分か大型の個体が多い傾向を示していると言えよう。重量では0~5.5gの範囲だが、0.5~2.0gの中に70%以上が集中する。これについても、最高数をしめす範囲が凹基無茎式よりは、少し多めの重量にかたよっている傾向が看取されよう。

c) 円基無茎式 (図版22・23・46・64, 248~310・872~874)

本型式は個体数66点、石錐総数の中で約15%と円基無茎式に次いで多く出土した。二上山産サスカイトが大半を占め、肉眼で他地域産 (金山産?) と類推できるのは5点 (261・273・280・293・308) のみである。

平面形態は両側縁が曲線的にふくらむものが大半を占める。しかし、長さ3cmを越える大型品には大別すれば、基部周辺の規模は小・中型品と変わらずに先端のみが錐状に伸びるもの、幅は変わらずに全体に細長の形態をとるもの、長さ・幅ともに全体的に大型化しているものの3種が存在する。

断面形態は平基無茎式同様に、扁平な傾向をもつ。つまり両面の中央部に大きく主要剥離面を残し、縁辺のみに調整剥離を行う手法をとる個体が多いのである。ただ、ここでも大型品中で、前述の長さ・幅共に小型品と同じ比率で大型化したものは、断面がレンズ状の中央部の厚い形態をとるようである。

法量では長さ1.5~4.5cmのなかで把えることができるが、2.0~3.0cmの個体で全体の70%近くを占める。平基無茎式に比べると、やや大きめの個体が多いと言えよう。重量では0.5~2.5gの個体が大半を占め、これも平基無茎式の最大数分布重量より若干大きな値を示している。

d) 凸基無茎式 (図版23・24・46・64, 311~353・875~877)

本型式は46点と出土石錐の約10%を占める。石材は二上山産サスカイトを主体とし、肉眼では他地域産 (金山産?) サスカイトと類推できる資料は4点 (311・327・328・339) 存在する。

平面形態は、円基無茎式に近く基辺中心がやや突出気味のタイプから全体に細長く柳葉形を呈するタイプまでバラエティに富んでいる。基辺の突出形態にも鋭く尖るものから丸みをもつものまで差が大きい。ごく少数ではあるが、側縁を鋸歯状に仕上げる個体 (318・333・344) が存在している。断面形態は扁平でうすいものが多い。これらは、主要剥離面を大きく残す手法が取られている。前の3型式同様に、厚手の素材剥片はごく一部の大型品のみに用いられる。

法量では長さ1.5~5.5cmの間に収まる。その中では、2.5~4.0cmの範囲が最も数量が多い。これは、円基無茎式よりは法量分布の中心が大きいことを示している。重量では、1.0~2.0gを分布の中心としているようである。これは円基無茎式にほぼ同一の状況であるが、3.0g以上の重量をもつ個体が円基無茎式よりもやや多い傾向が窺われる。

e) 凸基有茎式 (図版24・64, 354~375)

木彫式は22点出土しており、石鎚総数の約5%と占める程度しか出土していない。これは、前期～中期前半という本遺跡の存続時期とも関係するのであろう。石材は二上山産サスカイトが大半を占め、他地域産（金山産？）のサスカイトが4点（354・358・365・368）はじまる。その他に木をひくのがメノウを素材として用いるものが2点（374・375）存在することである。この石材は産地が不明であり、今後近畿地方の他の弥生遺跡での類例の増加を待ちたい。

平面形態では、身部から茎部を明確に作り出すものは1点（360）のみであり、それ以外は緩やかな曲線を描いて茎部が突出する形態を取っている。断面形態は薄いものであってもあまり扁平ではなく、中央部が隆起したレンズ状のものが多く見られる。主要剥離面の残存も前4型式よりは小さくなっている。（367）は五角形の身部に茎部を有する形態で、畿内に通有のものではない。伊勢湾沿岸地域の中間に類例が多くみられることから、彼地からの搬入品の可能性が高い。

法量は、茎部の存在にもかかわらず2.5～4.0cmを中心としており、凸基無茎式とほとんど差が見られない。出土点数の少なさに加えて、身部だけを比べると前4型式よりは小型傾向が伺われる。重量の点でも1.0～2.5gの個体が多く、凸基無茎式とあまり変化はない。ただ、茎部の存在により1.0g以下の軽量品は少なく、3.0g以上の重量品はやや多い傾向をみせる。

#### f) 特殊形態（図版25・64, 439～444）

前の5型式の中へは分類できない形態の石鎚である。（443）は両側縁に凹みを有する形態をとる。基部は凹基無型式と同じである。全体に粗い剥離調整によって作られている。二上山産のサスカイト製と考えられる。（441）は長身で基部は欠損している。両側縁には、細かい剥離調整によって鋸歯状に仕上げられている。二上山産サスカイトを素材とする。

（442・444）は両面に主要剥離面を残したままで、縁辺のみに細かい剥離調整を行って両側縁を整えるものである。（439）は基部近くに張り出しをもつ。いずれも未製品の可能性も考えられる。

#### g) 磨製石鎚（図版24・64, 383）

今回の調査中1点だけ出土した。全体に長身で、緩やかに茎部を突出させる形態をとる。身部の中央には、両面ともに微かに穂を作り出している。全体に表面には研磨痕が顕著である。粘板岩製である。

今回出土の石鎚の概略は以上のようなである。第2・3石鎚表をみるとかぎり、各型式は相互には微妙な法量、重量の差が見られる。凹基、平基、凸基の順にやや大型化、重量化の傾向が窺われている。しかし、その差はそれほど大きいわけではなく、一定の限度をもっている。中期後半以後に比べればずっと小型品が多いのである。このような傾向は、第一次調査の結果とも符合している。前期～中期前半における石鎚の在り方を示す好例と言えよう。

### B) 石剣・石槍（図版26・27・65, 445～461）

石鎚に比べ大型の尖頭器について、石剣あるいは石槍という名称が用いられる。しかし、両者の使用法には各研究者・報告者間で混乱が見られる。ここでは便宜的に長身で手にもつことの可能なものと石剣、短身で何かに着柄しての使用が想定できるものに関しては石槍の名称を用いる事にした。ただ、今回出土した石剣・石槍の大半は欠損品である。残存部が短く形態の類推ができないものに関しては石槍に分類することにした。

#### a) 石剣（図版26・27・65, 449～461）

サスカイト製の打製石剣が13点出土した。すべて欠損品であるために細かな型式分類はできない。

ただ、形態・調整法から2種に大別することは可能である。第1種は、両側縁から中央にむけて規則正しい剥離調整が行われ、断面形態が左右均等なレンズ状を呈するもの（449・451・453・454・457・458・460）である。欠損品のなかには、先端近くの側縁に鋸歯状の剥離調整が施されるものがある。これらは打製石剣と呼ばれるもののなかでは典型的なものといえよう。すべて二上山産サスカイトを素材として用いている。

第2種は、側縁の剥離調整が規模・方向ともに不規則なもの（450・452・455・456・459・461）である。その多くは、平面形態が直線的ではなく不定型な様相を呈している。断面形態についても菱形のものや、幅に比べて極端に中心部が厚く円形に近いものも存在する。第1種に比べるとやや細みの傾向も窺われる。これらの中には、欠損品の場合には右槍との区別が非常に難しいものが多くみられる。（461）は未成品と考えられる。

#### b) 石槍（図版27、445～448）

4点出土したが、すべて打製品でサスカイト製である。これも欠損品が多いが、完形品をみると長さは5～8cmほどである。幅は一定せず、平面形態は全体に不定形である。ただ基部の形態に注目すると、丸く仕上げるもの（445・447・448）とやや尖り気味のもの（446）との大別は可能である。剥離調整の手法では、全体にきわめて粗い剥離を行ったままにしている点で共通している。素材剥片の縁辺をそのまま側縁として利用していたり（447）、自然面を一部に残している（445・446）など、素材剥片の形態を生かして最低限の剥離調整によって尖頭器状の形態を作り出す傾向が窺われる。

#### 収穫具

##### c) 石庖丁（図版28～32、46・64・65、462～528・888～890）

磨製品66点、打製品1点、合計70点が出土している。磨製石庖丁は大半を占めるが、欠損品や破片が多く、型式の決定ができるものが少なくてない。現状で分類可能なものでは、外湾刃杏仁形2点、直線刃半月形8点、直線刃直方形1点、内湾刃半月形2点、大型石庖丁と考えられるもの4点（475～478）でその他は型式不明である。

石材には、流紋岩と思われる白色の石材を用いるもの（463・484・485・490・498・508～517）が散見される。これは、大和地域の前期弥生遺跡から出土する耳成山産の流紋岩と考えてよいと思われる。直線刃半月形・長方形を取るものでは紀ノ川流域産の緑泥片岩を用いるのが10点、丹波帯中に産すると思われる暗灰色の粘板岩を用いるものが32点出土している。これらは、当遺跡の他地域との交流関係を知るうえで重要な事実である。

また、1点だけ出土した打製石庖丁（889）はサスカイト製である。おそらく他地域産（金山産）と考えられる。背部に自然面を残し、その反対側の一側縁に細かな剥離調整をおこなって刃部を作っている。直線刃で両端には抉りなどをもたないために、収穫具ではなくそれ以外の用途に用いられる刃器として考えることも可能である。

#### 工具

##### d) 石錐（図版33～35、46・65、529～694・882～884）

すべてサスカイト製の打製石錐で169点出土している。打製石器としては石錐の次に多量に出土している。大半は二上山産のサスカイトを用いているが、若干他地域産（金山産）らしきもの（540・544・558・581・593・612・624・629・633・652・653・659・668・675・676・690）も混じるようである。『高宮八丁遺跡 石器編』に従ってここではI・II・III類の3分類を用いて説明したい。

I類は、全体の形状が棒状を呈するもので、39点（529～568）出土している。その中でも頭部と錐部の判別が困難なほど全くの棒状形態をとるもの（529・530・532・538・541・546・547・552・556・559）とやや頭部が扁平に広がるもの（531・533～537・539～543・545・548～551・553・554・557・558・560～568）に大別することが可能である。後者には例外的に輪円形に近い形態を取るものもある。頭部では片面には主要剥離面を残していても、その逆の面には細かな調整剥離が縁辺から中央部にかけて施される傾向をもつ。錐部の断面形態は菱形あるいは二角形を呈するものが多い。

II類は幅広の頭部から緩やかに突出させる形態に錐部を形成する形態である。つまり、あまり錐部が明瞭ではない形態であり数も52点（569～621）と多く、大きさ・形態ともにバラエティに富んでいる。小型品は2～3cm程度の長さであるが、大型品になると5cmを越える。平面形態では、頭部から錐部までの形態が逆三角形・台形・菱形・不整円形など様々である。錐部には細かな調整剥離が並び、先端近くの断面形態は三角形や菱形を呈するものが多い。それに比べて頭部では断面形態が扁平で、腹背両面とともに主要剥離面をそのまま残して縁辺の調整剥離を最小限にとどめているものが大半を占める。中には少数ではあるが自然面をそのまま頭部に残存させる個体（591・592）もみられる。

III類は、細長い錐部を頭部から明瞭に作り出す形態で、45点（624～667）出土している。錐部の平面形態はどれも棒状で、断面形態は細かな調整剥離を施すことによって三角形か菱形に仕上げる。しかし、頭部形態はバラエティに富んでいる。一般に大きく広がるものは、頭部形態が不定形で変則的なものが多い。調整剥離も主要剥離面を生かしながら粗い調整を行うに留まっている。頭部の広がりが2cm以内で断面形態が扁平なものでは、頭部平面形態が三角形（633・649・656）、逆三角形（634・650・657・658・663）、不整形（629・635・640・648・665）を呈するものもみられる。それ以外では、全体にY字形を呈するもの（661・664）、T字形を呈するもの（624）がみうけられる。これらは頭部に微細な調整剥離を行うことによって作り出されている。

#### E) 石斧類（図版36・65・66、695～701）

今回の調査では、少數ではあるが石斧が出土している。それらは扁平片刃・柱状片刃・大型蛤刃石斧の3種類を中心としている。順に説明を加える。

##### a) 扁平片刃石斧（図版36・46、165・695・885）

小型のものばかり2点出土している。1点は緑色の泥岩製で幅1.5cm、長さ3.0cm程度の磨製品である。（695）は半分の大きさに縦方向に欠損した後、刃部付近の側面のみを研磨して再利用している。柔らかい石材を用いているためか、全体に線状の研磨痕が著しい。

もう一点（885）はサスカイト製である。刃部とその付近は研磨によって仕上げられているが、基部や側面などは、大まかな調整剥離の痕跡を明瞭に残したものである。局部磨製の扁平片刃石斧とでも呼ぶべきものである。刃部幅1.7cm、長さ2.5cm程度で、石材のサスカイトには二上山産のものが用いられている。

##### b) 柱状片刃石斧（図版36・46・65、696・697・886）

ここでも小型品ばかり3点出土している。（696）は刃部幅1.0cm、長さ3.4cmで断面がほぼ正方形を呈し、頁岩製である。最も特徴的なのは小型品にもかかわらず、明瞭に、断面半円形の抉りが作り出されている点である。また、抉りのある面の基部付近には2カ所に打ち欠きが廻り残されており、抉り同様に着柄の際の紐掛けとして利用されたかもしれない。

（697）は砂岩系の石材で作られている。幅0.8cm、長さ4.0cmと縱長の形態で、ほぼ完形品である。

側面は刃部付近のみ磨かれている。ただ、刃部が使用によって摩滅し、断面形態では先端がやや円みを帯びている。(886) も砂岩製で、幅1.0cm、長さ5.3cmである。軟質の石材をもちいているため、研磨痕が著しい。また、刃部の摩滅も顯著である。

**c) 太型蛤刃石斧** (図版33・66, 699~702)

6点出土しているがすべて欠損品である。(699) は刃部と基部の欠損が著しい。泥岩製である。(701) は唯一刃部の残存するものである。素材には砂岩系の石材を用いている。刃部の幅は4.7cmであり、断面形態は橢円形となっている。(700) は基部のみの残存品で砂岩製。断面形態は、橢円形である。敲打痕の見られることから敲石に転用されたと考えられる。(702) は脇部のみの残存品で砂岩製、断面形態は梢円形となっている。

**d) その他の石斧**

一点だけ既存の分類に属さない石斧がある。(698) がそれである。刃部の幅3.7cm、長さ6.7cmと中型で、サスカイト製である。刃部先端のみは密に、そのほかはごく一部だけを研磨している。刃部は片刃にしあげられ、扁平片刃石斧に近い形態を呈する。(885) 同様に、二上山産サスカイトの局部磨製による石斧として注目される。

**F) 敲石** (図版37・38・46, 703~717・891・892)

17点出土している。チャート質の石材が9点(704・705・710~714・716・717)で、拳大の人きさのものが多い。サスカイト製のものが3点(707・709・715)あり、剥片を採取した後の石核に敲打痕を多く残すものである。例外なく、自然面を一端に残している。そのほかには、砂岩系の石材が1点(706)、輝緑岩が2点(703・708)出土している。

**G) 砥石** (図版38・39, 718~741)

31点出土しているが、大半は砂岩製である。すべて欠損品であるが、大きさにはばらつきが見られる。研磨を行う面が平坦になるもの(718~739)と、全体に丸みをもった原石の形態をそのまま残したもの(740~741)の2種類がある。

**H) 横形石器** (図版44・46, 850~871・893~897)

剥片の縁辺に調整剥離を行い、相対する二側縁に微細な階段状剥離がみられるものである。22点出土している。いずれも二上山産と考えられるサスカイトを素材として用いている。相対する階段状剥離の部分の多くには刃潰れのような使用痕がみられるものが殆どであり、なかには二対つまり4側縁にそういうたたき痕がみられるものも散見される。形態は不整円形・不整方形を中心としており、定型化はしていない。

**h) 刃器類** (図版40~44, 742~849)

その他には、既存の分類名では把握できないような、サスカイト剥片を利用した刃器類が多数出土している。所謂「不定形石器」と呼ばれる一群である。総数113点出土しているが大きく2種に分けることができる。

一つは大形の剥片石器類である。これは幅あるいは長さが5cmを超える大型の剥片の一ないしは複数の側縁に細かな調整剥離おこなって刃部を作り出すものである。これらのなかには、刃部が直線的なものや曲線的など変化に富み、平面形態も素材剥片の形状に左右されて多種多様である。

もう一つは小・中型の剥片石器類である。これらは、剥片素材自身の縁辺をそのまま刃部として利用したり、粗い調整剥離によって刃部を作りだすものなどがある。細かな調整などは行わないものが

多い。平面形態もバラエティに富む。中には小型の素材剥片を剥離したあとの石核ではないかと考えられるものがある。

### 1) 用途不明石製品（図版45・67、898～917）

上記の石器以外にも、型式・用途の特定ができない石製品が数多く存在する。ここでは、その一部を紹介する。

(901～905・911)は、一側縁に大まかな階段状調整剥離によって刃部を作りだす石器の破片である。表面に白色の風化の著しい安山岩質（ハリ質安山岩か？）の石材を素材としている。金山産のサヌカイトの可能性も考えられるが肉眼では断定することができない。破面が非常に平坦でなめらかになることが特徴である。

(898)は粘板岩製の磨製石器の未成品である。断面形態が長方形で、全体には方柱状の形態をとる。研磨した面には、粗い線状の研磨痕が明瞭に残るが、磨き残している部分もまだ多く残っている。両端が欠損しているのでいかなる石器の未成品であるのかは特定できない。しかし、欠損した一端の付近には、明瞭な稜線を有する状態で傾斜した面が形成されており、製作者の意図する形態を類推する糸口とできるかもしれない。

(906)は粘板岩製の大型剥片の一部を研磨したものである。一端辺は研磨により刃部を作り出し、その片側の側縁のみは研磨によって主要剥離面と垂直方向の面を形成している。扁平片刃石斧に類似した形態をとる。

（若林 邦彦）

#### 註

1. 小林行雄・佐原真『紫雲出』 託問町文化財保護委員会 1964
2. 石神幸子ほか『池上遺跡』 第3分冊の2 石器編 （財）大阪文化財センター 1979
3. 塩山則之『高宮八丁遺跡 石器編』 寝屋川市教育委員会 1988

#### 4. 玉作り関係遺物 (第19図、図版46~49)

本遺跡は前回調査時（1985年）に硬玉製獸形勾玉・碧玉製管玉・管玉未製品・玉砸石・紅麻片岩等が出土しており玉類製作遺構の存在が推測されている。<sup>(1)</sup>そこで今回の調査にあたっては、玉類の出土が十分予想されるものの現場での検出は困難であるため、遺構内埋土、包含層の土壤の水洗い選別作業を実施し、微小な遺物の検出にあたる事になった。

水洗作業にあたっては各地区ごとの遺構埋土、包含層の土を土のう袋につめて搬出する事となり、その総重量は約128,000kg（土のう袋9,000袋）以上に達した。作業は2mmメッシュの「ふるい」を用いて水洗作業を行った。

第4表 玉作り関係遺物地区別出土数量表

	玉									
	鉄石英(赤玉)	鉄石英(黄玉)	鉄石英(緑玉)	鉄石英(茶玉)	紅 麻 片 石	碧玉	個数	重量(g)	個数	重量(g)
A-1 玉錐	1	0.14								
大剥片 (1g以上)			2	2.5	1	2				
小計	1	0.14	2	2.5	1	2				
A-2 玉錐	1	0.2								
石ノミ	5	1.02								
特大剥片 (4g以上)	1	4.6								
大剥片 (1g以上)			1	1						
剥片	35	3	16	5.3			3	0.6	7	7
管工										
小計	42	8.82	17	6.3			3	0.6	7	7
A-3 石ノミ	1	0.2								
剥片	10	1.9	5	1.8					4	19
小計	11	2.1	5	1.8					4	19
B-1 石ノミ	2	0.53								
大剥片 (1g以上)	1	2								
剥片	19	4.6	4	1.4			2	0.65	4	19
小計	22	7.13	4	1.4			2	0.65	4	19
B-2 玉錐	1	0.15								
特大剥片 (4g以上)	1	8.8					1	6.55		
大剥片 (1g以上)	2	5.8								
剥片	66	7.8	16	6.1	4	0.8	9	1.6	26	46.9
管玉										
小計	70	22.55	16	6.1	4	0.8	10	8.15	26	46.9
B-3 玉錐	1	0.08								
石ノミ	3	1.3								
剥片	40	8.5	9	1.8	2	0.8	12	2.9	4	2.3
									7	1.04

	鉄石英(赤玉)	鉄石英(黄玉)	鉄石英(緑玉)	鉄石英(茶玉)	紅 翠	片 石	碧 玉	
	個数	重録(g)	個数	重録(g)	個数	重録(g)	個数	重録(g)
小計	44	9.88	9	1.8	2	0.8	12	2.9
C-1 石ノミ	1	0.25				1	0.25	
大剥片 (1g以上)	3	8.6						
剥片	30	6.9	10	2.3	4	0.8	8	2.3
小計	34	15.75	10	2.3	4	0.8	9	2.55
C-2 玉 錐	25	2.74	4	1.08			1	0.3
石ノミ	20	5.26	7	1.56	2	0.59	3	0.46
大剥片 (4g以上)	9	77.35	1	17.8			2	22.7
大剥片 (1g以上)	11	29.7						
剥片			25	10.15	17	3.8	40	13.4
小計	65	115.05	37	30.59	19	4.39	46	36.86
C-3 玉 錐	2	1.07						
大剥片 (1g以上)	3	3.75						
剥片	325	56.1	25	10.15	17	3.8	40	13.4
管玉								
小計	330	60.87	25	10.15	17	3.8	40	13.4
側溝玉錐	1	0.08						
石ノミ			1	0.4			1	0.25
剥片	36	8.9	7	1.1	4	1.3	4	0.8
小計	37	8.17	8	1.5	4	1.3	5	1.05
合計	656	250.46	133	64.44	51	13.89	127	66.16
							94	199.1
							31	5.96

#### A) 勾玉 (第19図1, 国版32c)

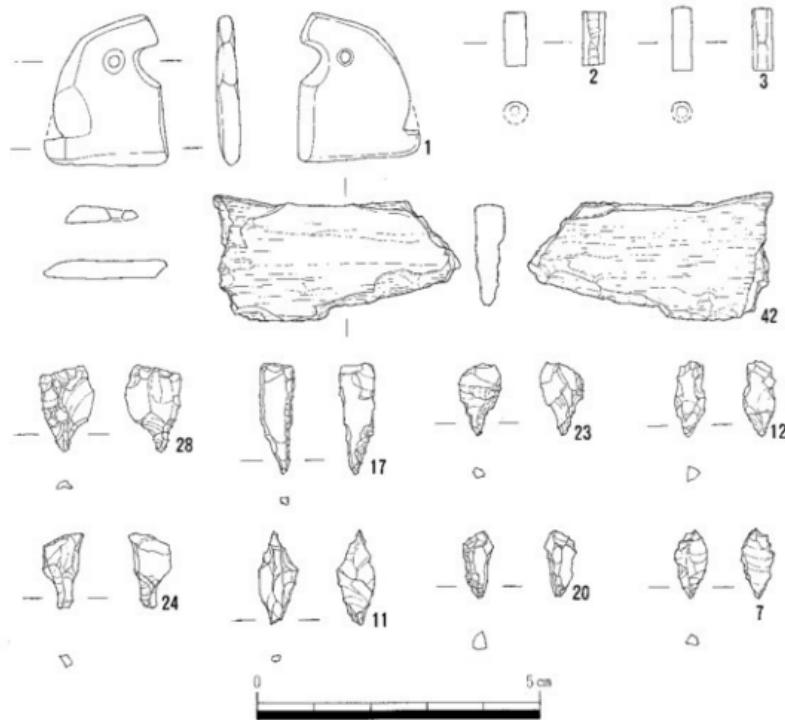
勾玉は1点出土している。

長さ3.65cm、幅2.2cm、厚さ0.4cm、重さ2.8gを測り、扁平、板状を呈する。材質は不明であるが軟質で吸水性をもち、表面は風化によって白色で細かい亀裂を生じる。形態的には所謂半块状勾玉と類似するが要件を満たすものではなく、D字形下位を切断したような極めて異形である。<sup>(2)</sup>

以下一般的な勾玉の部位呼称に準じて補足的な説明を行う。頭部は小さな方頭状であり端部断面に未磨研部をもつ。細孔は両面穿孔で、くびれ(弦部)は頭部直下に小さな半円状を呈し断面は稜を有する。腹部は直線的で研磨による片刃状となり尾部と、ほぼ直角に交わる。背部は、ゆるやかな弧状を呈するが頭部付近でやや屈曲する部位をもち、直線的な尾部に至る。

以下若干の観察を行った結果、本例は

1. 弥生勾玉製作に伴う宝的意義が石材選択の指向性に反映されていない事<sup>(3)</sup>
2. くびれ部の断面形が両面穿孔石窓巻の断面形と同一形状を呈する事
3. 頭端部断面が折損面と認められる事



第19図 玉作り関係遺物実測図 (S=1:1)

4. 腹部の片刃状研磨部は折損部の二次加工と考えられる事  
などから石庖丁の欠損品を転用した垂飾品と考えたい。

**B) 管玉 (第19図 2・3, 図版46a)**

碧玉製のものが4点出土している。

2は長さ9.5mm、直徑4.0mm、孔径1.2~2.0mm、重さ0.1gを測り、緑灰色を呈する。外面は若干風化しており軟らかい質感をもつ。内面は両端からの穿孔で一方から約6.5mm、他方から約3.5mm穿っている。

3は、長さ11.0mm、直徑3.5mm、孔径2.0mm、重さ0.1gを測り暗緑灰色を呈する。外面は風化しており軟質である。2と同様に両端からの穿孔で一方から約6.2mm、他方から約4.8mm穿っており、穿孔部接点が段となって残存する。

4は、現存長4.0mmを測り極めて硬質緻密なものである。体部は光沢をもち孔壁は平滑である。暗緑灰色を呈する。

5は、現存長4.8mmを測る。やや軟質粗惡なもので暗緑灰色を呈する。外面は鉄分の付着が顯著に認められる。

碧玉の剥片（図版46a）は、合計21点出土しているが、いずれも小さな剥片ばかりで最大のものでも0.45gである。そのなかに石鋸による擦切施溝痕が認められる剥片が3点含まれている。剥片は、すべて硬質なもので緑灰色の緻密なものが多く認められる。

#### C) 鉄石英製石器（図版47・48）

今回の調査では鉄石英製石器が86点出土している。詳細については不分明であるが暫定的に玉錐、石ノミという名称を用いて区別した。

##### a) 玉錐（図版47）

合計33点出土している。形態的には一定しないが錐部先端や側縁に明瞭に磨滅痕が認められるものがあり、「ドリル」として使用されている事は明らかである。平均の長さ0.95cm、幅0.56cm、厚さ0.26cm、重さ0.24gとなる。

##### b) 石ノミ（図版48）

合計52点出土している。やはり玉錐同様、形態的にまとまりを欠く一群である。平面形は橢円形・三角形・菱形等であるが、いずれも短く尖った先端部をつくり出している。横断面形も不定形で三角形・長方形・多角形等を呈する。

この中には先端部が欠損し基部に打撃痕をもつものが約23点確認できる。これは、基部に受けた力を尖端部に伝える道具として使用されたものであろうと考えている。

平均の長さ1.05cm、幅0.55cm、厚さ0.30cm、重さ0.25gとなる。

##### c) 鉄石英石核・剥片（図版49）

鉄石英の製品を除く全出土量は367.8gになり、最大のものは1個で17.8gを測る。赤、黄、緑、茶、橙、オリーブ、赤と黄がモザイク状になるものなどが存在し、比率は赤70.3%、茶15.2%、黄11.2%、緑3.3%である。石核・剥片と製品の重量的な割合は94.2%と5.8%になる。

#### D) 紅簾片岩玉鋸（図版46b）

42は、明瞭に使用痕をもつものである。長辺側が折損したものと考えられる。刃部は磨滅が著しく子細に観察すると、紅簾石の部分が刃部両上面へめぐれあがったようになっており、石英質が丸味をもって残存している。残存長4.4cm、幅2.2cm、厚さ0.5cmを測る。

このほか、玉鋸に利用されたと考えられる紅簾片岩の小片が多数出土している。

鉄石英製石器は守口市八雲遺跡で検出された弥生時代中期初頭の玉作り工房等で出土したものと極めて類似しており、時期的にもその関係が興味深いものである。<sup>(4)</sup>しかし、八雲遺跡で大量に出土している「細石刃」といわれているものについては未検出であり組成が若干異なるようである。もし調査者が指摘されているような管玉紐穴穿孔用具とすれば、当遺跡では材質的に異なる錐による穿孔の可能性があるのかも知れない。

玉作り関連遺物は全調査区から出土したが、Cグリットに集中する傾向がある。特に鉄石英製石ノミ・玉錐等の工具類は全出土量の69.8%を占め、碧玉剥片は66.7%が出土している。また、他の玉作

り関係遺物に関しても同様の値を示す。これはC-2・C-3区で検出したpit群が玉作りに係わる何らかの施設の存在を示唆するものと考えている。

碧玉製管工4点の内3点までが軟質である。しかし出土した剥片についてみれば硬質であり製品の3点に合致しない材質である。また、1次調査で出土した原石についても同様の指摘ができる。

(植田正幸)

注

1. 寝屋川市教育委員会 「高宮八丁遺跡」石器編 1988
2. 森貞次郎 「弥生勾玉考」『鏡山猿先生古稀記念古文化論叢』 1980
3. 寺村光晴 「石工（玉工）」『新版考古学講座』9特論（中） 雄山閣 1971  
この中で、玉類は主として身体装飾に使用されるものであるが、特に勾玉の石材は硬質で稀少性を有し、かつ美麗であるという共通性を有すると指摘されている。
4. 大阪府教育委員会 「八雲遺跡発掘調査概要 I」 1987

## 5. 木製品

### A) 弥生時代（第20図）

#### 木製刺突具（1）

上坑128から第Ⅲ様式古相の土器群と共に出土している。長さ7.8cm、幅0.7cm程度の小型品である。身部は長さ5.5cm程度で、4方向に緩やかではあるが面取りが行われている。先端は摩滅して丸くなっている。その直下にも使用痕と思われる摩滅がみられる。基部は粗く削り出したままで、長軸方向に前面が明瞭に残っている。

#### 建築部材（2）

B-2区内の柱穴から出土している。柱の礎板に転用されていた可能性が高い。破片の状態で出土していて、残存長約8.0cm、幅約6.0cm、厚さ約2.0cm程度の大きさである。柱材を用いて、方孔が穿たれて「コ」の字状の形態になっていることから、穴のある柱状の建築材の欠損品と考えることができよう。

#### 縦（3）

着柄式の縦が包含層中から出土している。先端は欠損しているものの、先端がやや広がり気味の平面が方形の広縦である。着柄部が緩やかながらも舟形状に隆起している。その舟形隆起の周辺には刃先痕がみられ、加工の痕跡をとどめている。裏面には周辺近くに加工痕を明瞭に残している。孔の形態は円形である。

（若林邦彦）

### B) 古墳時代（図版50～56、67・68）

古墳時代の木製品は、全て河川001から出土している。

#### a) 容器

10は、短辺側の木口に、一辺は欠損するが縄かけ状の突起を有する。長辺は、やや膨らんで舟形状の曲線をもって仕上げられている。内側は底部を欠くが逆台形状を呈する。残存長95.5cm、残存幅20.0cm、突起長7.1cmを測る。厚さは、短辺側体部厚6.2cm、長辺側体部厚2.3cmとなり、その厚みの差が顕著である。

9は、小型の容器である。残存長46.2cm、残存幅7.8cm、器高6.0cmを測る。2ヶ所で折損し、遺存状態不良であるが、体外面は底部と体部が150°の角度で仕上げられている。

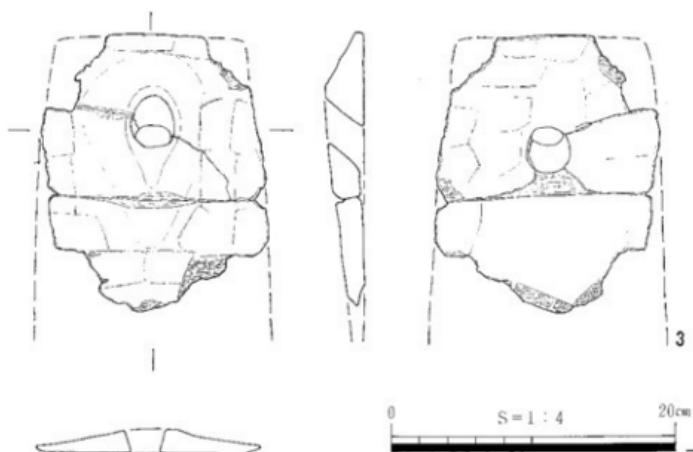
#### b) 弓

11は、丸木弓で、弓彌は端部弓背側を斜めに削り落としたものである。側面は若干の加工痕が認められる。残存長43.0cm、径1.6cmを測る。

#### c) 建築部材

12は、納穴のある組合せ式の建築材と考えられるもので、現存長92.5cm、幅13.0cm、厚さ5.0cmを測る。上下両端は部分的に斜めに加工された面をもち、いずれも浅い抉り込みがある。両平面は手斧の加工痕が残るが、両側面は打ち割ったままの面である。

15は、断面カマボコ形を呈する板材で表面は不規則な面取りがなされている。裏面は平滑に仕上げられているが、一部炭化している。長辺部に方形のくり込みをもつ。残存長19.6cm、幅10.1cm、厚さ



第20図 弥生時代木製品尖洞圖

4.8cmを測る。

14は、残存長28.1cm、幅15.4cm、厚さ6.5cmを測る。側面は欠損する。端部に90°で交差する切り込みをもつ。

16は、両端部に切断痕が認められる不整な角材である。残存長49.0cm、幅6.0cm、厚さ3.6cmを測る。

#### d) 用材

13は、幅広く1mを超す大型品である。上端部に縦長方形の枘穴があるが欠損しており、下面部には方形の枘穴をもつ。両平面とも平らに加工されている。残存長108.0cm、幅27.0cm、厚さ4.8cmを測る。

17は、上面部に最大幅をもち徐々に幅狭く、遺存状態不良で加工痕は認められない。矢板になる可能性もある。残存長57.5cm、幅14.8cm、厚さ3.0cmを測る。

8は、残存長11.2cm、幅2.4cm、厚さ0.8cmを測る。片端は焼けて欠損しているが、もう一方は側縁を浅く削り端部をT字型に仕上げている。全体に丁寧な加工痕が認められる。機械具の可能性もある。

19は、残存長45.0cm、幅8.2cm、厚さ2.1cmを測り、平面長方形の板状を呈する他は未調査である。

29は、不整な板材で、矢板の可能性もある。端部表面に若干加工痕が認められる。残存長53.5cm、幅9.1cm、厚さ2.1cmを測る。

20は、残存長27.5cm、幅9.8cm、厚さ2.8cmを測る板材である。両短辺部と表面は平滑に仕上げられている。

#### e) 杣

本数にして21本出土しており、大別すると丸杭18本、板状（矢板）杭3本、角杭1本になる。

丸杭は自然木の下端部を削っただけのもので部分的に樹皮を残すものがある。また上端部の切断痕が認められるものは1点のみで他は全て欠損している。

28は、残存長79.5cm、径13.0cmを測る。下端部は遺存状態不良であるが、上端部は4方向からの切断痕が認められる。

32は、部分的に樹皮の残存する下端部は2方向からの加工痕が認められる。残存長23.8cm、径3.2cmを測る。

29は、2つに折損するが完形品である。遺存状態は良好で、下端部に鋭利な工具によるものと思われる9面からなる加工痕が明瞭に認められる。下端部から上へ45~75cmの間に極端に腐食した部分がある。上端部から下へ約30.0cmの部分で枝幹を切断し、端部は平滑に削る。上端部は一方向からの切断痕が認められる。残存長147.0cmの長大なもので径8.7cmを測る。部分的に樹皮が残存する。

42は、下端部のみの残存で、残存長14.5cm、径5.2cmを測る。加工痕は棱が不整な4面からなる。

39は、残存長26.6cm、径3.4cmを測る。下端部は大きな面取りの加工によって尖らせている。約1/2に樹皮が残存する。

26は、2つに折損する。下端部は2方向からの加工痕が認められる。残存長83.0cm、径3.7cmを測る。

31は、自然木の枝幹部分に不整、不規則で鈍い下端部を削りだす。残存長46.0cm、径4.2cmを測る。木取りは芯持材を用いる。

32は、中央部に枝木を削った面をもつ芯持材で表面には樹皮が残存する。内端部を欠損している。残存長42.0cm、径5.2cmを測る。

44は、下端部に斜めに切り込みをいたれた面に110°で交差する平面を削り出すもので意識的な加工と考えられる。残存長22.9cm、径4.5cmを測る芯持材を用いる。

41は、下端部のみの残存である。加工痕は穂が明瞭で平滑に削られている。芯持材を用いる。残存長12.7cm、径4.1cmを測る。

30は、小さな枝幹の筋が7ヶ所に認められる芯持材である。下端部の加工は長いが鈍く、穂は不整で不規則である。残存長54.0cm、径5.7cmを測る。

37は、ほぼ全面に樹皮が残存する芯持材である。残存長30.0cm、径4.4cmを測る。下端部を鈍く加工し、裏面は丸味をもつ。

35は、遺存状態良好で下端部は長く鋭い。加工痕は極めて鋭利な工具になるものである。残存長30.0cm、径4.8cmを測る。芯持材を用いる。

33は、中央部で彎曲する芯持材を用いる。下端部は加工痕が不整、不規則で鈍く、樹皮が部分的に残る。残存長36.5cm、径5.6cmを測る。

34は、遺存状態不良である。下端部は2方向からの不整な鈍い加工痕が認められる。木取りは芯持材を用いる。残存長35.7cm、径4.7cmを測る。

38は、残存長26.9cm、径6.4cmを測り、2ヶ所で折損する。下端部の加工痕は比較的規則性のある穂をもつ。部分的に樹皮が残存し、芯持材を用いる。

43は、残存長21.0cm、径5.2cmを測る。下端部の加工痕は鈍い。芯持材を用いる。

25は、下端部に短く鋭い加工痕をもつ。残存長70.0cm、径4.4cmを測る。樹皮が部分的に残存する。芯持材を用いる。

23は、平面長方形を呈し、残存長36.1cm、幅4.5cm、厚さ1.8cmを測る。木取りは柾目材を用いる。加工痕が若干認められる。

22は、2つに折損する。下端部は平面と側面からの加工痕をもつ。残存長55.4cm、幅6.2cm、厚さ2.4cmを測る。柾目材を用いる。

21は、遺存状態不良である。下端部は鋭く仕上げられているが、加工痕は明瞭ではない。残存長61.3cm、幅9.2cm、厚さ3.7cmを測る。木取りは柾目材を用いる。

24は、残存長64.7cm、幅7.2cm、厚さ6.2cmを測る不定形な角材である。

#### f) 棒状木製品

36は、残存長30.2cm、径2.4cmを測る。下端部はV字型に仕上げられている。

45は、残存長23.5cm、径3.7cmを測る。下端部は鋭く仕上げられている。部分的に樹皮が残存する。

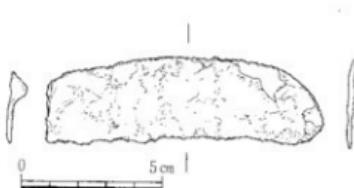
27は、2つに折損する。残存長67.5cm、径3.0cmを測る。下端部に加工痕が認められる。

(植田正幸)

## 6. 鉄器（第21図、図版32 b）

鎌と考えられる鉄器である。残存長9.7cm、幅2.8cm、厚さ0.18cm、重さ16.4gを測る。体部は両面とも扁平で背部が外彎し、刃部はゆるやかに内彎する。

(植田正幸)



第21図 鉄器実測図 (S=1:2)

## 7. 植物質遺存体

### (1) 資料の採取方法

玉類検出作業に伴い搬出した各地区ごとの遺構埋土・包含層の土は水洗選別作業によって同時に種子類の検出を行った。使用した「ふるい」は2mmメッシュのものである。このため微小種子については検出できなかった可能性がある。

### (2) 資料の処理と時期決定について

本稿では基本的に当該弥生集落域における植物質食料の様相を明らかにする事に主眼をおいて、検討をくわえたものである。よって植物質遺存体は下記のように取り扱った。

- 1) 遺存率の問題などから植物質遺存体は種子に限定した。
- 2) 所属時期が決定できなかった遺構や包含層から検出したものは、その他として処理した。
- 3) 古墳時代植物質遺存体については所属時期が明確ではなく、その検出状況が自然的要因に係わる古植生の反映と認められたのでこれを除外した。
- 4) 混入の可能性等、不確定要素を伴う資料は、これを一切除外した。

### (3) 分析方法

植物質食料については無毒なものは原則的に食べる事が可能であるが、それらをすべて食用植物としていたか迷うところが多い。また種子の生産量や遺存率からいっても、これらを一元的に処理する事には問題があるが今回はこれらの諸問題には言及し得なかった。

本稿では資料を以下のように取り扱う。

- a) イネは炭化米、粉を区別した。
- b) ウリ類はマクワウリである可能性が強い。
- c) モモは核果に大小のバラツキが認められるがモモで総称する。
- d) 菓穂はヒシ、オニビシ、ヒメビシ、シリブトビシを包括する。
- e) ブドウはブドウ属ヤマブドウとノブドウ属ノブドウとに区別する。
- f) 堅果類はアラカシ（常緑樹）、コナラ（落葉広葉樹）を包括する。
- g) オナモミ、カナムグラは栽培作物に伴って渡來した史前帰化植物と理解されており、これを植物質食料として採用した。
- h) イネの分類区分については佐藤敏也氏の詳しい研究があり、本報告においては佐藤氏の分類方法に従い、粒形がどのように相關するのか整理を試みた。

また種子の同定・性質等、植物質遺存体全般にわたり元香里ヶ丘高校教諭有馬忠雄先生にご指導を賜わった。

### (4) 検出された植物質食料

所属時期が明確である遺構からは現在までに13種類が同定され、それらはまとめて第5表に示した。以下出土状況等を記す。

第5表 弥生時代植物質遺存体一覧表

遺構 名 (炭化米)	土坑137	溝103	溝139	土坑175	溝105	土坑117	土坑131	土坑128	その他	計
イネ	73	31	99	161	207	102	960	335	1,968	
モモミ								2		2
ウリ類							140	48	188	
ヒョウタン類							71	74	145	
モモ		1						12	1	14
ササゲ					121			3		124
小型ウメ類							9	5	14	
ヒシ属							1	1	2	
ノブドウ属							5			5
ブドウ属							36	8	44	
堅果類	49	97		19	5	15	18	20	170	393
エゴノキ	1	1				6		24	13	45
カナムグラ		1	3				27	11	42	
オナモミ							3			3

#### a) イネ

穂は2粒検出しただけで他は全て炭化米である。粒形に差異が認められたので別機で計測による検討をくわえた。

#### b) ウリ類

土坑128から集中して検出している。種子は、粒形が不ぞろいでバラツキが認められ長さ4.9~9.0mm、幅2.8~4.0mmを計る。

#### c) ヒョウタン

やはり土坑128に集中して検出している。果皮も出土しており食用の他、用器としての利用を考えられる。種子は長さ9.5~14.0mm、幅5.0~6.9mmを計る。

#### d) モモ

核果は小型のものからやや大型のもののが存在する。11個のうち7個までが半分にわれており、仁を摘出した可能性がある。また3個についてはネズミ類にかじられて孔をあけられている。

#### e) ササゲ

いずれもほぼ均一に炭化しており土坑117に集中する。今回の調査によって検出された唯一のマメ類である。<sup>(6)</sup>

#### f) 小型ウメ類

種名の同定には至っていない小型梅類である。

#### g) ヒシ属

炭化したものを土坑128から検出している。

#### h) ノブドウ属

土坑128から3粒検出されているが本種は液果を食さないとされている。

#### i) ブドウ属

この種は液果の生食が可能であり、酒を醸造する事が知られる。土坑128にまとまって検出している。

#### j) 堅果類

今回検出した堅果類はコナラ（落葉広葉樹）とアラカシ（常緑樹）である。渡辺誠氏の研究によれば摂取までに事前の処理としてそれぞれB類（水さらしと加熱に灰汁使用）とC類（水さらし）とに分類されるものである。全期間を通してほぼコンスタントな出土状況を示す。

#### k) エゴノキ

エゴノキはその果皮にサボニン（エゴサボニン）を含み、石けんの代用品とされたり漁撈用の魚毒としての可能性が指摘されるものである。<sup>(8)</sup>

#### l) カナムグラ

栽培植物に付って渡米した史前帰化植物とされるものであり、その出自がきわめて重要な問題をもつことは十分認識されなければならない。前期中葉においてすでにその種子が検出された事は興味深い。

#### m) オナモミ

やはり渡来栽培植物との関連が指摘されているものである。本例はいずれも炭化しているが現生種に比して小型である事が判明している。

#### (5) イネ

当遺跡においては第1次調査でもイネ栽培種 (*Oryza sativa L.*) の検出が報告されている。今回検出したものは2粒の外は全て所謂炭化米として遺存しており現状では外殻は認められず玄米状を呈する。水洗選別に際して殻の脱落した可能性も考慮されなければならないが2000粒にちかいものが、全てそのようになったとは考えにくく当初から脱殻されていた“コメ”の可能性が強い。<sup>(9)</sup>

資料は選別作業後にノギスによって長さ、幅の計測をおこない遺構ごとに分類した。(第6・9表)これによれば当遺跡では全体として粒長3.7~5.3mm未満、粒幅2.1~2.8mm未満のものが卓越する事が看取されるのである。従って佐藤氏の分類では、第1群B類という事になり、さらに池上遺跡での出土例からもこれが九州から伊勢湾に到る地域で弥生時代につくられた米粒が一般にもつ傾向に合致するのである。<sup>(10)</sup>また粒形の時期による変化は中期以降にわずかながら第2群の存在を認めるようになる。

しかし土坑117暗緑灰色砂質上層から検出した第1群A類の存在は、その分布圏が他地域（九州、北陸、東北地方）に求められているだけに、今後更に検討を要する問題である。(第7、8表)

第6表 炭化米出土遺構別法量平均値一覧表

遺構名	層位	長さ(mm)	幅(mm)
溝103	黒色粘質土層	3.69	2.33
溝139	黒色粘質土層	3.77	2.39
土坑175	暗灰色粘質土層	3.76	2.29
溝103	暗褐色粘質土層	3.91	2.31
土坑117	黒色粘質土層	3.89	2.24
〃	暗緑灰色砂質土層	4.13	2.85
土坑131	暗青灰色砂質土層	3.78	2.15
土坑128	暗灰色粘質土層	3.88	2.30
〃	黒色粘質土層	3.77	2.26
〃	暗緑灰色砂質土層	3.61	2.18
〃	暗青灰色砂質土層	3.59	2.19
〃	黒色粘土層(植物混り)	4.21	2.63
出土	米粒全平均値	3.83	2.35

### (6) 種子の炭化、未炭化について

種子類の炭化原因についてはその状況からの判断によらざるを得ないのが現状であり、具体的に炭化に至るプロセスは必ずしも明らかにされていない。基本的には種子類が焼ける事によって炭化する事と理解しうるのであるが本例のごとく、きわめて均一な炭化が単純に焼ける事によっておこり得るのがどうか甚だ疑問である。<sup>註</sup> あたかも意図的に炭化させたようなその状態は煮沸以前のものである事が明瞭である。また、その形状についても炭化よりむしろ焼化と形容すべきものと考えられるが、現段階では炭化現象についての具体的な検討はなし得ていない。しかし同一遺構内に種類によって炭化したものと、そうでないものが混在する事実は重要であり、それがいかに分類されるものか土坑128から検出した種子についてそのグループを類別して列記する。

第7表 炭化米分類表

遺構名	層位	時期	出土粒数	計測可能粒数	計測率			第1群 A類	第1群 B類	第1群 C類	第2群	分類	その他	破損粒数
溝103	黒色粘質土層	I中～後	73	28	38.4	0	14	1	0	IBac	13	45		
溝139	黒色粘質土層	I中～後	31	19	61.3	1	11	2	0	IBac	5	12		
土坑175	暗灰色粘質土層	I後	99	54	54.5	5	26	2	0	IBaa	21	45		
溝105	暗褐色砂質土層	I後～Ⅱ初	161	121	75.2	23	53	17	0	IBaa	28	40		
土坑117	黒色粘質土層	Ⅱ	17	14	82.4	2	9	1	0	IBaa	2	3		
	暗緑灰色砂質土層	Ⅱ	190	128	67.4	105	15	2	0	IAab	6	62		
土坑131	暗青灰色砂質土層	Ⅲ後～Ⅳ	102	60	58.8	3	22	7	1	IBac	27	42		
土坑128	暗灰色粘質土層	Ⅲ初	165	129	78.2	16	57	9	4	IBaa	43	36		
	黒色粘質土層	Ⅲ初	192	126	65.6	14	53	12	0	IBaa	47	66		
	暗緑灰色砂質土層	Ⅲ初	36	28	77.8	1	8	2	0	IBac	17	8		
	暗青灰色砂質土層	Ⅲ初	81	54	66.7	2	18	5	0	IBac	29	27		
黒色粘土層(植物混入)		Ⅲ初	486	294	60.5	125	134	8	1	IBaa	26	192		

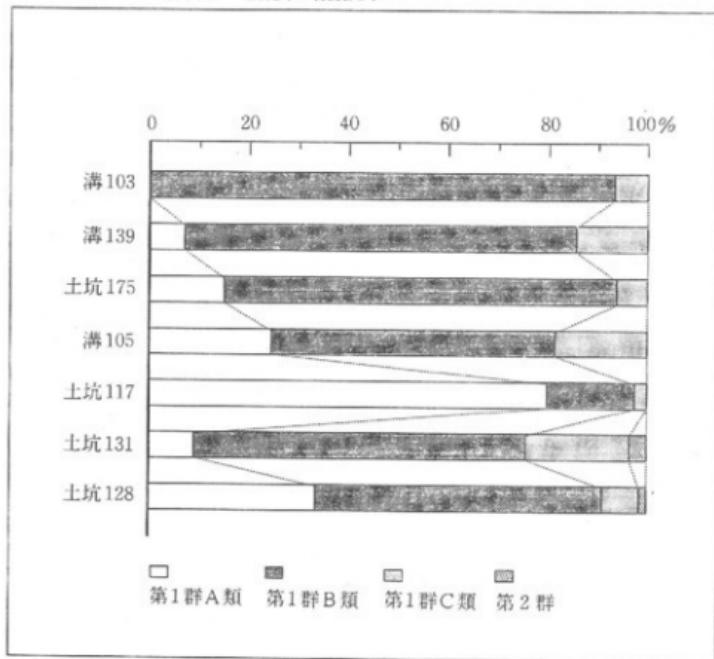
mm	第1群A類	第1群B類	第1群C類	第2群
粒の長さ	3.7～5.3未満	3.7～5.3未満	3.7～5.3未満	5.3以上
粒の幅	2.8～3.7未満	2.1～2.8未満	～2.1未満	2.8～3.7未満

※ 佐藤敏也『日本の古代米』出土粒分類表による)

※ その他とは粒長3.7mm未満のもので、分類にあたっては除外した。

※ 計測可能粒数とは破損粒数を除くすべての粒数。

第8表 炭化米の類別比率



## A類 炭化種子

イネ(コメ)、ササゲ、菱属、堅果類、エゴノキ、オナモミ。

## B類、未炭化種子

初、ウリ類、ヒョウタン、モモ、小型梅類、ノブドウ、ヤマブドウ、カナムグラ。

以上のような類別が可能であり、この状況は他の遺構で検出した全種子類についても共通の要素である。

こうしてみるとA類にはオナモミ、エゴノキといった摂取要素が不分明なものを含むが、何らかの加熱処理が必要とした食料ということができる。B類にはウリ状果、核果、液状果といった生食可能なものが包括され非熱処理グループとでもいうべき様相を呈する。従って本例においての炭化種子は加熱処理過程における何らかの現象と考えざるを得ないが、その煮沸以前の均一な炭化についてこれが摂取要素を伴うものか否かは明らかにし得なかった。

## (7) まとめ

本稿では種子類について植物質食料の検討をおこなった結果以下のようなことが判明した。

1. 土坑117にみられる第1群A類の米粒の存在は重要であり資料の増加をまって今後十分な検討が必要である。
2. イネと堅果類については、植物質食料の中核をなすものであるが、その関係はⅢ期には数字の上

でイネが逆転する。

3. 今回検出した堅果類はアラカシ、コナラであるが、第1次調査ではコンテナパット10箱分ものクスギが出土している。これは堅果類の採集、保存の企画にあたって消費順位が設定されていた可能性を伺わせるものである。

4. 前期には、北部九州、防長地域に限定されたマメ類が、中期には、瀬戸内沿岸に及ぶ結果としてササゲの検出がある。枚方市田口山遺跡出土のエンドウ種子も含めて、当地域においても中期以降にマメ類の栽培が開始されたとみて大過ないだろう。

5. 上坑128にみられるような栽培作物の増加は中期以降に顕著であり当地における初期農耕のエポックメイキングと位置づけられるものである。

以上、今回の調査では検出例の少ない当地域における弥生時代植物質食料の様相の解明にあつたものである。エゴノキ、オナモミ、カナムグラ等は植物質食料としての共通の認識には至っておらず本稿では俎上に載せはしたが、本質的な分析には至らなかった。

(植田正幸)

#### 註

1. 粉川昭平 「穀物以外の植物食」『弥生文化の研究』2 生業 雄山閣 1968
2. 粉川昭平 「種子類について」『池上・四ツ池遺跡』自然遺物編 (財) 大阪文化財センター 1980
3. 寺沢薰・寺沢知子 「弥生時代植物質食料の基礎的研究」『考古学論叢』5 檜原考古学研究所 1981
4. 佐藤敏也 「日本の古代米」雄山閣 1971
5. 佐藤敏也 「池上遺跡出土の種子類」『池上・四ツ池遺跡』自然遺物編 (財) 大阪文化財センター 1980
6. マメ類は米果であり、その種子は無胚乳で火をうけて木炭化した場合のみ残りうる。
7. 渡辺誠 「縄文時代の植物食」雄山閣 1975
8. 粉川昭平 「田能遺跡出土の植物遺物」『田能遺跡発掘調査報告書』尼崎市教育委員会 1982
9. 那須孝悌 「植物遺体」『龜井・城山』(財) 大阪文化財センター 1980
10. 寝屋川市教育委員会 「高宮八丁遺跡一寝屋川郵便局庁舎建設に伴う発掘調査概要報告書」 1987
11. —
12. イネが炭化したものについては全て炭化米とされている。しかし、本資料のような均一な炭化が、これまで報告されたように、ただ焼かれることによって炭化したのではないと考えられる。そこで、初で炭化実験を行った。資料は取扱されて未脱殻の粉を各50粒用いた。炭化条件として設定したのは、(1)焚火の中、(2)焚火の周辺(約10~20cm離して)、(3)焰燃による焙炒、(4)糠火焼成時の稻穀内への挿入である。その結果、一切人為的な媒介なく均一な炭化がおこったのは(4)であった。
13. 前掲註 9 文獻
14. 前掲註 3 文獻
15. 枚方市教育委員会・田口山遺跡発掘調査団 『田口山弥生時代遺跡発掘調査概要報告』 1970

## 8. 動物質遺存体（骨類）

大別すると弥生時代と古墳時代のものになる。古墳時代の骨類は馬骨のみで弥生時代遺物包含層を切り込む河川001堆積土付近で集中して検出した。

弥生時代の骨類については小動物が多く、魚骨が若干含まれているようであるが種の同定には至っていない。まとまって検出したのは土坑128であり、これは食料残滓と考えている。今後十分な検討を行っていきたい。

(植田正幸)

第9表 炭化米法値表

資料番号	長さ(mm)	幅(mm)	資料番号	長さ(mm)	幅(mm)	資料番号	長さ(mm)	幅(mm)	資料番号	長さ(mm)	幅(mm)
満105暗褐色砂質土層			37	4.0	2.2	74	4.0	2.5	111	3.8	2.4
1	4.8	2.9	38	3.2	1.7	75	4.2	3.0	112	3.8	2.0
2	4.6	3.0	39	2.8	1.8	76	4.0	2.0	113	4.0	2.1
3	5.0	2.7	40	2.2	1.6	77	4.0	2.9	114	4.1	2.4
4	4.4	3.0	41	3.2	2.0	78	4.4	2.0	115	3.8	2.0
5	4.8	2.8	42	3.2	2.0	79	4.1	2.4	116	4.0	3.1
6	4.9	3.3	43	3.1	2.1	80	4.0	2.7	117	4.0	2.9
7	4.7	2.6	44	2.9	1.7	81	4.0	2.0	118	3.6	2.4
8	4.8	2.8	45	3.6	2.0	82	3.8	2.5	119	3.5	2.8
9	5.0	2.9	46	3.5	2.1	83	4.0	2.4	120	3.5	2.5
10	4.5	2.6	47	3.5	2.2	84	4.0	2.3	121	3.5	2.1
11	5.0	2.8	48	3.0	2.6	85	3.7	2.6	満103黒色粘質土層		
12	4.1	2.6	49	3.6	2.1	86	4.0	2.0	1	3.8	2.5
13	4.3	2.9	50	3.5	2.1	87	4.2	2.9	2	4.0	2.5
14	4.1	2.5	51	3.3	1.6	88	4.0	2.0	3	3.9	2.5
15	4.4	2.1	52	3.0	2.1	89	4.5	2.5	4	3.9	2.6
16	4.0	2.1	53	3.7	1.8	90	4.0	2.2	5	4.0	2.3
17	3.9	2.0	54	3.4	2.4	91	4.1	2.3	6	3.9	2.4
18	4.2	2.7	55	3.7	2.1	92	4.0	3.1	7	3.9	2.6
19	4.1	2.1	56	2.5	1.7	93	4.0	2.8	8	4.0	2.1
20	3.9	1.9	57	3.3	1.6	94	3.9	2.2	9	3.8	2.2
21	3.9	2.2	58	3.0	2.0	95	4.2	2.5	10	3.8	2.7
22	4.0	2.0	59	3.0	2.0	96	4.2	2.0	11	4.8	2.7
23	4.2	2.1	60	3.5	2.0	97	4.3	2.1	12	4.0	2.7
24	4.0	2.7	61	3.4	2.5	98	3.9	2.1	13	3.7	2.0
25	4.0	2.4	62	3.1	2.3	99	4.2	2.0	14	3.6	2.3
26	4.2	2.0	63	3.6	2.5	100	3.9	2.2	15	3.6	2.2
27	4.2	2.5	64	4.1	2.4	101	4.0	2.4	16	3.5	2.4
28	4.1	2.6	65	4.0	2.9	102	4.1	2.1	17	3.6	2.4
29	4.2	3.0	66	4.0	2.1	103	3.9	2.4	18	3.5	2.2
30	4.0	2.6	67	3.8	1.9	104	3.8	2.7	19	3.5	2.1
31	4.0	2.1	68	4.0	2.2	105	3.8	2.5	20	3.6	2.0
32	4.0	2.1	69	4.2	2.8	106	4.2	2.2	21	3.5	2.4
33	4.2	2.9	70	3.8	1.6	107	3.9	2.9	22	3.7	2.4
34	4.3	3.0	71	4.0	2.2	108	4.3	2.3	23	3.7	2.5
35	3.9	2.8	72	4.0	2.1	109	3.9	2.3	24	3.1	2.1
36	4.0	2.0	73	4.3	2.5	110	3.9	2.1	25	3.0	1.7

資料番号	長さ(mm)	幅(mm)	資料番号	長さ(mm)	幅(mm)	資料番号	長さ(mm)	幅(mm)	資料番号	長さ(mm)	幅(mm)
26	3.2	2.2	14	4.3	2.7	36	4.0	3.1	73	4.5	3.0
27	3.2	2.2	土坑117暗緑色砂質土層			37	4.0	3.0	74	4.2	2.9
28	3.4	2.3	1	4.2	2.6	38	4.5	3.2	75	4.0	2.6
溝139黒色粘質土層			2	4.5	3.0	39	4.0	3.1	76	4.0	3.0
1	4.4	2.6	3	4.8	2.9	40	4.0	2.8	77	4.0	3.0
2	4.5	3.0	4	4.9	3.0	41	4.1	3.1	78	4.2	2.9
3	4.1	2.7	5	4.9	3.1	42	4.1	2.8	79	4.0	2.8
4	3.5	2.7	6	4.9	3.0	43	4.0	3.0	80	4.0	3.1
5	4.0	2.4	7	4.2	2.9	44	4.0	3.0	81	4.0	2.8
6	3.7	2.0	8	4.5	3.0	45	4.0	3.2	82	4.8	3.0
7	3.8	2.4	9	4.1	3.1	46	4.2	2.9	83	4.0	3.0
8	4.0	2.3	10	4.9	2.9	47	4.1	3.0	84	4.9	3.0
9	3.9	2.5	11	4.9	3.1	48	3.9	3.0	85	4.5	3.1
10	3.7	2.4	12	4.0	3.0	49	4.0	2.9	86	4.0	3.0
11	4.0	2.0	13	4.2	3.1	50	4.0	3.0	87	4.0	2.6
12	3.6	2.2	14	4.9	3.1	51	4.5	3.0	88	4.0	2.8
13	4.0	2.6	15	4.2	3.0	52	4.0	2.8	89	3.8	2.2
14	4.0	2.6	16	4.8	3.0	53	4.2	3.1	90	4.1	2.8
15	3.8	2.5	17	5.0	3.0	54	4.0	3.0	91	4.0	3.0
16	3.2	2.1	18	4.5	3.1	55	4.0	3.0	92	4.0	2.2
17	3.4	2.1	19	4.5	3.0	56	4.1	2.8	93	4.0	3.0
18	3.1	2.1	20	4.1	3.0	57	4.8	3.0	94	4.0	2.6
19	3.0	2.2	21	4.0	2.9	58	4.9	2.9	95	4.0	2.9
土坑117黒色粘質土層			22	4.2	3.0	59	4.1	3.1	96	4.0	2.8
1	4.1	2.1	23	4.2	3.1	60	4.0	2.9	97	4.0	3.0
2	4.5	2.3	24	4.9	2.9	61	4.2	3.0	98	4.0	2.0
3	4.2	3.0	25	4.5	2.9	62	4.0	3.0	99	3.8	2.0
4	4.3	2.6	26	4.9	3.1	63	4.1	3.0	100	4.0	2.8
5	4.0	2.2	27	4.6	3.1	64	4.0	3.0	101	3.9	2.8
6	3.8	2.5	28	4.0	3.0	65	4.2	2.9	102	3.8	2.9
7	3.8	2.1	29	5.1	2.2	66	4.2	2.9	103	3.9	2.8
8	3.8	2.5	30	4.1	3.0	67	4.0	3.0	104	4.0	2.8
9	3.9	2.2	31	4.1	3.0	68	4.0	3.0	105	4.0	2.8
10	3.8	1.8	32	4.8	2.9	69	4.2	3.0	106	3.8	2.8
11	3.9	2.3	33	4.0	3.2	70	4.0	2.8	107	4.0	2.6
12	3.0	1.3	34	4.0	3.0	71	4.0	3.0	108	4.0	2.8
13	3.0	1.8	35	4.1	3.1	72	4.0	3.0	109	3.8	2.8

資料番号	長さ(mm)	幅(mm)	資料番号	長さ(mm)	幅(mm)	資料番号	長さ(mm)	幅(mm)	資料番号	長さ(mm)	幅(mm)
110	3.5	2.1	18	4.6	3.1	55	5.0	2.5	92	4.5	3.0
111	3.9	2.8	19	4.5	2.9	56	4.5	2.9	93	4.7	2.9
112	3.5	2.9	20	4.2	2.9	57	4.5	2.9	94	5.0	3.0
113	4.0	2.8	21	4.1	3.0	58	4.7	3.0	95	5.0	2.5
114	3.9	2.9	22	4.5	3.1	59	4.5	2.7	96	4.8	3.1
115	3.2	2.0	23	4.6	3.0	60	4.9	3.1	97	4.0	2.5
116	3.5	2.1	24	4.0	3.0	61	4.8	2.7	98	3.9	2.8
117	3.8	2.1	25	4.4	3.1	62	4.8	3.8	99	4.1	3.0
118	4.0	2.8	26	5.0	2.9	63	4.5	3.0	100	4.2	2.3
119	4.0	3.0	27	4.4	3.0	64	4.7	2.9	101	4.0	3.0
120	3.2	2.0	28	4.5	2.8	65	4.9	2.9	102	4.1	2.8
121	3.5	2.9	29	4.7	3.3	66	4.8	3.0	103	4.6	2.5
122	4.0	2.1	30	5.1	3.3	67	4.5	3.1	104	3.8	2.9
123	4.0	2.0	31	4.8	3.0	68	4.7	3.0	105	4.0	2.9
124	3.5	2.6	32	5.0	3.2	69	4.5	3.1	106	4.3	2.9
125	4.1	2.6	33	5.0	3.0	70	4.6	2.9	107	4.3	2.5
126	4.1	2.2	34	4.2	3.0	71	5.0	3.0	108	4.1	2.9
127	4.0	2.2	35	4.8	3.0	72	4.7	2.9	109	4.1	2.4
128	4.0	2.8	36	5.0	2.5	73	4.9	3.0	110	4.6	2.5
土坑128黒色粘土層(植物混り)			37	4.2	3.0	74	4.9	3.0	111	4.2	2.6
1	5.0	3.2	38	4.4	2.9	75	4.9	3.0	112	4.1	2.6
2	5.3	2.6	39	4.5	3.2	76	5.1	2.9	113	4.1	3.0
3	5.0	3.0	40	4.3	3.3	77	4.5	2.9	114	4.2	2.8
4	4.5	3.0	41	4.8	3.0	78	4.9	2.8	115	4.1	2.3
5	4.9	3.0	42	4.5	3.0	79	4.6	3.0	116	4.3	2.8
6	4.8	3.0	43	4.4	3.0	80	4.8	3.0	117	4.0	2.5
7	4.8	3.0	44	4.5	2.7	81	5.0	2.9	118	4.1	2.5
8	5.1	2.7	45	5.0	3.0	82	4.3	3.1	119	4.3	2.3
9	5.0	2.9	46	4.8	2.9	83	4.7	3.0	120	4.5	2.3
10	5.0	2.9	47	4.2	3.0	84	4.3	3.1	121	3.9	2.5
11	5.1	3.1	48	4.7	2.7	85	4.9	3.0	122	4.5	2.3
12	4.7	3.1	49	4.1	3.1	86	4.7	3.0	123	3.9	2.9
13	4.8	3.0	50	4.9	3.0	87	4.7	2.8	124	4.1	2.9
14	4.3	3.0	51	4.6	2.8	88	4.8	2.9	125	3.9	2.7
15	4.5	3.0	52	4.8	2.9	89	4.6	3.1	126	4.0	2.7
16	4.5	3.1	53	4.8	3.0	90	4.8	3.5	127	4.0	3.0
17	4.4	3.0	54	4.3	3.2	91	4.5	3.0	128	3.8	2.5

資料番号	長さ(mm)	幅(mm)									
129	3.9	2.7	166	4.0	2.4	203	4.5	2.5	240	3.9	2.2
130	3.9	2.7	167	4.2	2.1	204	4.1	2.7	241	3.9	2.0
131	4.0	2.9	168	4.2	2.6	205	4.1	2.8	242	4.0	2.1
132	4.0	3.0	169	4.1	2.5	206	4.1	2.9	243	3.1	2.0
133	4.0	2.5	170	4.0	2.8	207	4.2	2.6	244	3.5	2.4
134	4.0	2.4	171	4.3	2.5	208	3.8	2.7	245	3.5	2.4
135	4.0	2.7	172	4.1	2.0	209	3.9	2.4	246	3.6	2.1
136	4.0	2.6	173	4.0	2.6	210	4.0	2.4	247	3.3	2.0
137	3.8	3.0	174	4.0	2.5	211	4.1	2.4	248	3.8	2.5
138	4.0	2.8	175	4.3	2.8	212	4.0	2.4	249	4.0	2.4
139	3.9	2.9	176	4.5	2.6	213	4.1	3.0	250	3.9	2.2
140	4.1	2.5	177	4.3	2.3	214	4.0	2.4	251	3.6	2.2
141	3.6	2.8	178	3.9	2.7	215	4.0	2.4	252	3.8	2.4
142	4.5	2.5	179	4.2	2.9	216	4.0	2.3	253	3.6	2.5
143	4.0	2.6	180	3.9	2.5	217	3.9	2.8	254	3.3	2.3
144	4.1	2.5	181	4.0	2.5	218	4.4	3.9	255	4.0	2.1
145	4.1	2.6	182	4.4	2.5	219	3.9	3.0	256	4.0	2.1
146	4.5	2.2	183	4.0	2.5	220	4.5	2.5	257	4.0	2.1
147	4.1	2.7	184	4.0	2.6	221	4.3	2.5	258	3.5	2.3
148	4.0	2.8	185	4.0	2.7	222	4.1	2.6	259	4.0	2.0
149	4.0	2.7	186	4.0	2.4	223	4.0	2.5	260	3.6	2.2
150	4.1	2.9	187	3.8	2.8	224	4.0	2.3	261	3.5	2.1
151	4.1	2.5	188	3.9	2.5	225	4.3	2.8	262	3.5	2.0
152	4.5	2.9	189	4.9	2.5	226	3.7	2.3	263	3.3	2.1
153	3.9	2.4	190	4.0	2.8	227	4.1	2.6	264	3.6	2.2
154	4.0	2.5	191	4.6	2.4	228	4.3	2.3	265	3.3	2.0
155	4.0	2.3	192	4.0	2.6	229	4.3	2.5	266	3.5	2.0
156	4.5	2.7	193	4.0	2.9	230	3.9	2.7	267	3.5	2.5
157	3.9	2.8	194	4.9	2.3	231	3.9	2.6	268	4.0	2.4
158	4.1	2.4	195	4.0	2.8	232	3.9	2.9	269	3.8	2.1
159	4.4	2.6	196	3.9	2.4	233	4.1	2.3	270	3.8	2.2
160	4.2	2.3	197	4.0	2.9	234	4.2	2.6	271	3.5	2.4
161	3.9	2.3	198	4.0	2.5	235	4.1	2.2	272	3.5	2.1
162	4.3	2.3	199	4.0	2.5	236	3.5	2.1	273	3.5	2.4
163	4.2	2.5	200	4.1	2.6	237	3.9	2.1	274	3.8	2.4
164	4.2	2.6	201	3.9	2.5	238	4.0	1.9	275	3.9	2.2
165	4.3	2.7	202	3.8	2.5	239	3.6	2.5	276	3.8	2.1

資料番号	長さ(mm)	幅(mm)	資料番号	長さ(mm)	幅(mm)	資料番号	長さ(mm)	幅(mm)	資料番号	長さ(mm)	幅(mm)
277	3.8	2.2	19	4.3	3.0	56	3.3	2.3	93	3.0	2.5
278	3.7	2.2	20	4.3	3.0	57	2.8	1.8	94	3.6	2.5
279	3.7	2.0	21	4.3	2.4	58	3.4	1.6	95	3.5	2.0
280	4.0	2.0	22	4.3	2.6	59	3.1	2.0	96	3.7	2.3
281	3.7	2.2	23	4.5	2.6	60	3.7	2.2	97	3.7	2.2
282	3.7	2.1	24	4.7	2.6	61	3.5	2.0	98	3.5	2.2
283	4.0	2.1	25	4.3	2.5	62	3.4	1.8	99	4.1	2.6
284	4.0	2.2	26	4.3	2.9	63	2.8	2.0	100	4.2	2.5
285	3.9	2.4	27	4.2	2.3	64	3.2	2.0	101	3.8	2.0
286	3.6	2.1	28	4.3	2.3	65	3.3	2.0	102	3.8	2.6
287	3.8	2.1	29	4.1	2.2	66	2.9	1.6	103	4.1	2.1
288	3.2	2.2	30	4.1	2.2	67	2.7	1.3	104	4.0	2.2
289	3.7	2.5	31	4.0	1.7	68	3.2	2.5	105	3.8	2.4
290	3.7	2.0	32	4.2	2.4	69	3.3	2.0	106	3.8	2.0
291	3.9	2.4	33	4.0	2.2	70	3.7	2.3	107	4.0	1.9
292	3.6	2.5	34	4.2	2.2	71	3.3	2.3	108	4.0	2.2
293	3.7	2.0	35	3.8	2.8	72	3.2	2.2	109	4.2	2.7
294	3.8	2.6	36	3.8	2.2	73	3.5	2.0	110	4.2	2.0
上坑128暗灰色粘質土層			37	3.8	2.6	74	3.0	1.5	111	4.1	2.5
1	5.3	2.7	38	3.9	2.1	75	3.6	1.9	112	4.0	3.0
2	5.5	3.0	39	4.1	2.4	76	3.1	2.0	113	4.2	2.2
3	5.0	2.8	40	4.2	2.4	77	3.0	2.0	114	3.9	3.0
4	4.5	2.8	41	4.1	2.5	78	2.3	1.9	115	3.8	2.1
5	4.6	3.0	42	4.2	2.7	79	3.1	1.9	116	4.0	2.7
6	4.3	2.8	43	4.2	2.3	80	2.9	2.1	117	4.0	1.8
7	5.0	2.2	44	4.2	2.2	81	3.6	2.3	118	3.8	2.1
8	4.5	3.3	45	3.9	2.7	82	3.5	2.0	119	4.2	2.8
9	4.7	2.5	46	3.9	2.1	83	3.0	1.9	120	4.2	2.6
10	4.5	2.7	47	4.2	2.7	84	3.1	1.9	121	4.0	2.5
11	5.2	3.0	48	3.8	2.5	85	3.2	2.2	122	4.0	1.8
12	5.1	2.6	49	3.9	2.1	86	3.6	2.1	123	4.2	2.5
13	4.6	2.7	50	4.1	2.6	87	3.5	2.5	124	4.0	2.5
14	4.3	2.9	51	4.0	2.8	88	3.5	2.1	125	3.8	2.0
15	5.3	2.2	52	3.6	2.5	89	3.5	2.3	126	4.0	1.7
16	4.3	2.5	53	3.3	2.0	90	3.6	2.6	127	4.0	2.5
17	4.5	2.5	54	3.2	2.4	91	3.6	1.9	128	4.1	2.7
18	4.3	2.5	55	3.4	1.9	92	3.1	2.5	129	4.0	2.8

資料番号	長さ(mm)	幅(mm)	資料番号	長さ(mm)	幅(mm)	資料番号	長さ(mm)	幅(mm)	資料番号	長さ(mm)	幅(mm)
土坑128階灰色砂質上層			37	3.9	3.0	74	3.3	2.2	111	4.0	2.4
1	4.2	2.2	38	3.6	2.5	75	3.2	2.0	112	3.4	2.1
2	4.3	2.2	39	3.5	2.3	76	3.1	1.7	113	3.8	1.9
3	4.2	3.0	40	4.0	2.6	77	3.0	2.0	114	3.9	2.2
4	4.4	3.0	41	3.5	2.2	78	3.1	2.1	115	4.0	1.8
5	4.6	2.2	42	3.9	1.9	79	4.0	2.0	116	4.0	2.2
6	4.1	3.0	43	4.0	2.3	80	3.6	2.1	117	4.0	2.9
7	4.4	2.9	44	4.0	2.3	81	3.7	2.6	118	3.5	2.3
8	4.3	2.8	45	4.0	2.6	82	4.0	3.1	119	3.5	2.0
9	4.6	2.5	46	3.5	2.3	83	4.0	2.6	120	3.5	1.5
10	4.8	2.5	47	3.6	1.9	84	3.5	2.2	121	4.2	3.0
11	4.5	2.7	48	3.8	2.4	85	3.7	2.2	122	4.1	3.6
12	4.2	2.6	49	3.8	2.5	86	3.6	2.6	123	4.3	1.5
13	4.3	2.7	50	4.0	2.6	87	4.0	2.0	124	4.1	2.5
14	4.2	2.1	51	3.7	2.3	88	3.5	2.1	125	4.2	2.7
15	4.4	2.2	52	4.0	2.8	89	4.0	2.3	126	3.6	2.1
16	4.5	2.5	53	3.3	1.9	90	3.9	2.3	上坑128階青灰色砂質上層		
17	4.7	2.3	54	3.0	1.5	91	4.0	2.3	1	4.0	2.4
18	4.2	3.0	55	3.2	1.9	92	3.5	2.0	2	4.3	2.7
19	4.5	2.0	56	3.1	2.2	93	3.9	2.5	3	4.2	2.6
20	4.3	2.0	57	3.2	2.3	94	3.6	2.3	4	4.0	2.0
21	4.1	2.1	58	3.3	2.2	95	4.0	2.5	5	4.2	2.1
22	4.2	2.5	59	3.2	1.8	96	4.0	3.6	6	4.1	2.1
23	4.5	2.0	60	3.1	2.0	97	3.5	2.2	7	4.0	3.8
24	4.1	2.5	61	3.0	2.4	98	3.6	2.5	8	4.0	3.5
25	4.2	2.2	62	3.0	1.8	99	3.5	2.3	9	4.0	2.5
26	4.1	2.5	63	3.3	2.5	100	4.0	2.6	10	4.2	2.4
27	4.0	2.3	64	3.0	1.8	101	4.0	2.1	11	4.0	2.4
28	3.4	3.0	65	3.0	1.5	102	3.8	2.3	12	4.1	2.5
29	3.5	2.4	66	1.2	1.4	103	4.0	2.3	13	4.0	2.6
30	4.0	2.5	67	2.8	1.8	104	3.8	2.2	14	4.0	2.3
31	3.7	2.1	68	3.1	1.6	105	3.8	2.0	15	3.6	2.7
32	4.0	2.2	69	3.2	2.0	106	3.8	2.1	16	3.7	2.0
33	4.0	2.2	70	3.0	1.7	107	3.8	2.0	17	3.7	2.0
34	4.0	2.5	71	2.9	1.9	108	4.0	2.5	18	3.9	2.4
35	3.6	3.0	72	3.1	2.1	109	3.6	2.2	19	3.8	2.2
36	4.0	2.2	73	3.3	2.8	110	4.0	1.7	20	3.8	2.5

資料番号	長さ(mm)	幅(mm)	資料番号	長さ(mm)	幅(mm)	資料番号	長さ(mm)	幅(mm)	資料番号	長さ(mm)	幅(mm)
21	3.6	2.0	3	3.9	2.1	11	3.9	2.2	48	3.1	1.5
22	3.7	2.1	4	4.4	2.2	12	4.0	2.0	49	2.8	1.5
23	3.7	2.0	5	4.1	1.8	13	4.1	2.4	50	2.5	1.5
24	3.8	1.9	6	4.1	2.2	14	4.0	2.8	51	2.8	1.6
25	3.7	2.3	7	4.1	2.6	15	4.3	2.3	52	2.8	2.0
26	3.8	2.6	8	4.1	2.8	16	4.3	2.2	53	3.1	1.5
27	3.6	2.2	9	4.0	2.0	17	4.0	2.4	54	4.6	1.6
28	3.6	2.6	10	3.9	2.2	18	4.0	2.5	55	3.4	2.0
29	3.5	2.2	11	3.3	2.1	19	4.1	2.3	56	3.1	1.7
30	3.3	1.8	12	3.6	2.5	20	4.0	2.3	57	2.5	1.7
31	3.5	2.0	13	3.4	2.0	21	4.0	2.8	58	3.1	2.0
32	3.5	1.8	14	3.5	2.0	22	3.8	2.0	59	3.2	2.5
33	3.0	2.0	15	3.6	2.1	23	3.8	2.5	60	3.2	2.0
34	3.1	1.9	16	3.3	2.1	24	3.8	2.5	上坑175暗灰色粘質土層		
35	3.0	1.8	17	3.5	2.6	25	3.8	1.5	1	4.3	2.9
36	3.1	1.7	18	3.5	2.7	26	3.7	2.0	2	4.1	2.6
37	2.9	1.8	19	3.8	2.5	27	3.5	2.3	3	4.2	2.6
38	3.5	1.8	20	3.6	2.1	28	3.6	2.3	4	4.0	2.7
39	2.9	1.6	21	3.3	1.9	29	3.5	2.1	5	4.0	2.9
40	3.1	2.1	22	3.6	2.3	30	3.7	2.0	6	4.4	2.8
41	3.2	2.0	23	3.0	1.8	31	3.6	1.5	7	4.0	2.7
42	3.5	2.2	24	2.9	1.5	32	3.7	2.0	8	4.0	2.4
43	3.0	1.6	25	3.0	1.9	33	3.8	2.1	9	4.0	2.5
44	3.5	1.6	26	3.2	2.0	34	3.6	2.4	10	4.2	2.6
45	3.0	2.1	27	3.2	2.1	35	3.8	2.5	11	4.2	2.9
46	2.8	2.5	28	3.2	2.0	36	3.7	2.0	12	4.4	2.6
47	3.2	2.2	上坑131暗青灰色砂質土層			37	3.9	2.1	13	4.1	2.5
48	3.3	2.0	1	5.4	2.7	38	3.8	1.6	14	4.5	2.9
49	3.5	2.2	2	4.4	3.1	39	3.7	2.1	15	4.0	2.1
50	3.5	2.5	3	4.3	2.8	40	3.5	2.5	16	4.1	2.0
51	3.5	1.8	4	4.3	2.3	41	3.6	2.1	17	4.0	2.5
52	3.5	1.9	5	4.3	2.6	42	3.5	2.1	18	4.0	2.5
53	3.2	2.0	6	4.2	2.4	43	3.5	2.1	19	4.4	2.2
54	3.5	1.6	7	4.5	2.5	44	3.6	2.1	20	4.0	2.2
土坑128暗綠灰色砂質土層			8	4.5	2.6	45	3.4	1.9	21	4.0	2.3
1	3.9	2.3	9	4.2	2.3	46	3.1	1.9	22	4.0	2.3
2	4.2	2.7	10	4.0	2.0	47	3.2	2.0	23	4.1	2.1

資料番号	長さ(mm)	幅(mm)
24	4.0	2.1
25	3.5	2.0
26	3.5	2.4
27	3.7	2.1
28	3.5	2.1
29	3.6	2.5
30	3.8	2.7
31	3.6	2.2
32	3.8	2.4
33	3.9	2.0
34	3.5	1.8
35	3.5	2.1
36	3.5	2.1
37	3.5	2.5
38	3.5	2.2
39	3.5	1.7
40	3.8	2.3
41	3.5	2.0
42	3.7	2.1
43	3.7	2.1
44	3.6	2.5
45	3.7	2.1
46	3.7	2.3
47	3.1	1.5
48	3.1	1.6
49	3.0	1.6
50	3.0	2.0
51	3.1	2.6
52	3.2	2.1
53	3.1	2.0
54	3.1	2.1

## 第Ⅳ章　まとめ

今回の高宮八丁遺跡の第2・3次調査では、これまで述べてきたように弥生時代と古墳時代の遺構・遺物が検出されている。それらの主要な成果について、弥生時代と古墳時代それぞれにまとめる以下のようなになる。

### 1. 弥生時代

#### 存続時期

今回の調査区は、第1次調査区の北隣にあたる。検出された遺構・遺物は、大半は弥生前期中葉～中期前半に属しており、第1次調査での出土状況とまったく一致している。つまり、高宮八丁遺跡が弥生時代前期～中期前半を主要な存続時期とする遺跡であると、合計3回の調査で確認されたことがまず第一の成果としてあげられよう。

#### 遺構の消長

しかし、第2・3次調査では、その主要な存続期間のなかにも遺跡の盛衰のあることも確認された。前期の遺構には溝状の遺構が多く、しかも第2次調査の溝101・103・109といった主要なものについては自然流路の可能性が高い。それに比べて生活遺構と考えられる土坑は非常に少数である。つまり、前期の段階では今回の調査区は湿地帯に近い状態で、主要な生活の場ではなかったと考えられる。そのような自然流路が埋没して中期に入ると、人為的に掘削されたと考えられる溝・土坑が激増する。沖積作用によって地盤が安定化し、そのためこの地が生活の場として利用され始めたと考えることができよう。特に、C-1～3区といった調査区の西部では遺構の密度が高い。柱穴は一応調査区全面に認められるが、主要な密集域はこの地域である。井戸としての機能が想定できる土坑128もB-2～C-2区にわたる位置に所在している。遺跡自体の広がりや中心地を、第2次調査区西半から調査区よりやや西に寄った地域と推測することが可能である。

#### 土器

こうした遺構の消長に加えて、遺物についても有益な成果が幾つか得られた。まず土器については、第I様式～Ⅲ様式前半にかけての良好な資料が得られている。溝139は細片の状態ながらも極めて同時性の高い堆積状況を示す前期中葉の一括資料である。前期の良好な一括性を示す出土例は河内潟北岸地域にはこれまで乏しかった。貴重な成果といえる。

また第Ⅱ様式の土器が多量に出土したことでも重要である。その中でも目を引くのが菱形上器における多様性である。口縁部内面と体部外面全体に粗いハケメを残す典型的な大和型甕、それに類似するが口縁部にナデ調整を加えたタイプ、前期遠賀川式の伝統を引き型式の三種を中心とした組成であるが、近江地城・中河内地域からの搬入品もみられる。淀川水系を通じての地域交流や河内潟の北岸平野部といった立地条件から、旧来指摘してきた各地域の独自型式とのかかわりの中でかなり交錯した土器地域性を示すのが高宮八丁遺跡の特徴である。同様の傾向は守口市八幡遺跡でもうかがわれ、淀川左岸下流域の弥生集落域に一般的な状況と考えることも可能である。当該期の地域交流の実態を知るうえで重要な知見が得られたと言えよう。

また、第Ⅲ様式前半の資料として土坑128出土の一括資料があげられる。これは、口縁部や底部など一部を欠損させた状態で5個体の土器が一括投棄されていたもので、この大型遺構が井戸である可

能性が高いことから、井戸祭祀の一種として考えることができる。畿内南部では中期以後このような井戸祭祀が散見されているが、北河内では明確なものは初出であろう。今後この地域でも類例の増加を待ちたい。

#### 石器

石器については、調査区内包含層土壤すべてについて水洗を行ったために、製作に伴う剥片類もふくめて、非常に多量に確認することができた。石鏃・石剣・石槍・石庖丁・石錐・石斧など弥生時代に通有の形式が多数を占めることから、当遺跡においても、基本的にはその他の低地の弥生遺跡と大差ない生業が営まれていたと考えられる。ただし、小型品の多い石鏃に関しては土壤水洗の結果、総計455点も出土し、出土石器総数の五割近くを占めている。整理作業員の努力によって、石器検出に多大な労力を費やした結果ともいえるが、当該期の弥生遺跡においてこれだけの比率で石鏃が出土することは希である。第1次調査の際にも石鏃出土数の多かったこと、サスカイト剥片の出土数が膨大なことから、当遺跡の日常活動における石鏃製作あるいは消費の比重の高さを指摘することができる。生業やこの遺跡をめぐる社会状況を考える上で重要な特徴といえよう。また一方で、この結果は石器組成を論じる際の調査精度について、今回のような徹底した方法を用いるか否かによって結果に異同のある可能性を今後十分に考慮する必要のあることを示唆している。

#### 玉作り関係遺物

もう一つ、石製品については重要な知見が得られている。第1次調査では、ヒスイ製の勾玉や碧玉製の管玉に加えて、碧玉原石・玉砥石など玉作りに関係する遺物が出土していた。第2次調査では、これを裏付けるように、碧玉の剥片類や鉄石英製の穿孔具、それに玉縫に利用されたと考えられる紅簾片岩剥片などが出土している。これらは当遺跡で碧玉製品を中心とした玉作りが行われていたことを示すものである。大阪湾沿岸地域では、同様な遺物について守口市八雲遺跡すでに報告されている。近畿地方のその他の地域では、近江・山城地域で玉作りを行った遺跡が多く確認されており、琵琶湖から淀川木系での弥生中期における碧工製玉類製作の活発さを物語っている。当遺跡での玉作り関連遺物の出土もこの文脈のなかで把えることのできる現象であろう。また、玉類や製作工具の素材となる石材の科学的分析を用いた原産地同定と流通経路の特定が、今後の課題として残されている。

### 2. 古墳時代

#### 遺構

南北から伸びた古墳時代後期の自然流路が、第2次調査区中央で合流し、河川001という大きな流れとなって西の方向へと流れている。埋土の粗砂の粒子が粗いことから、かなり流れが急激であったことが考えられる。また、第3次調査でも溝001という同時期の遺構が確認されているが、これも自然流路と考えられる。その他には、第2次調査区南部に若干の上坑が散見されるが生活遺構と考えられるものはほとんど検出されなかった。当該期の主要な生活域は、今回の調査区外の近隣地域に求められよう。

#### 遺物

河川001などの自然流路からは、須恵器・土師器が出土しているが、それらはおおむね6世紀後半に相当する時期のなかでとらえられるものである。共伴する木器や動物遺体も出土状況から、所属時期に差異はないものと考えられる。河川001からは、内部に大甕一点が据えられ、その周りには頭部のみが破損した須恵器の短頸壺、建築部材・枕状の柱や大形容器などの木製品が集積されていた。お

そらく一括投棄されたものであろう。水辺における何等かの祭祀行為の可能性も想定できる。また、それとは離れた位置でウマの上顎骨が一点出土している。生駒西麓の諸遺跡では、古墳時代中期以後このようなウマの遺存体の出土が多くみられ、馬飼い集団の存在が指摘されている。今回のウマの上顎骨の出土も、そのような地域集団の生業基盤と関連性の中で考えることができよう。

(若林・植田・塩山・濱田)

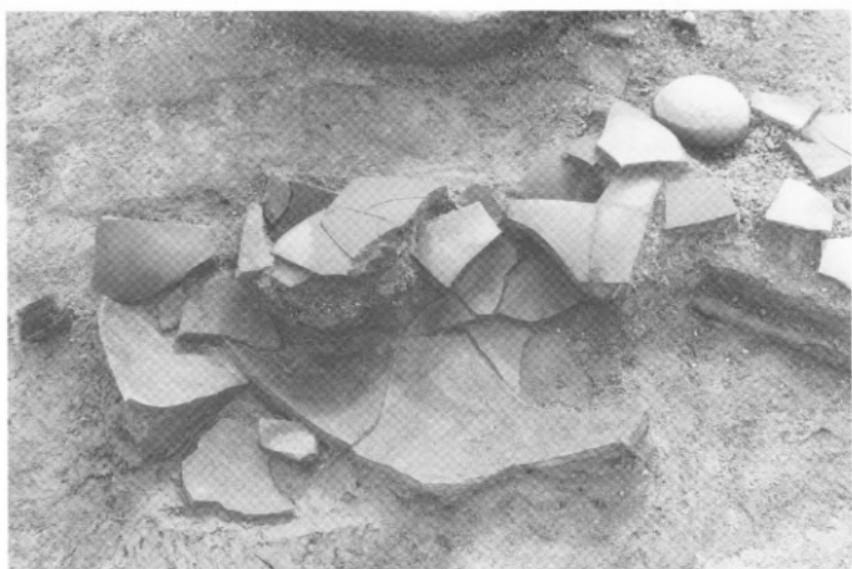
# 図 版



a. 調査地遠景(南西から)



b. 古墳時代遺構面全景(東から)



a. 河川001 須恵器出土狀況



b. 河川001 木製品出土狀況



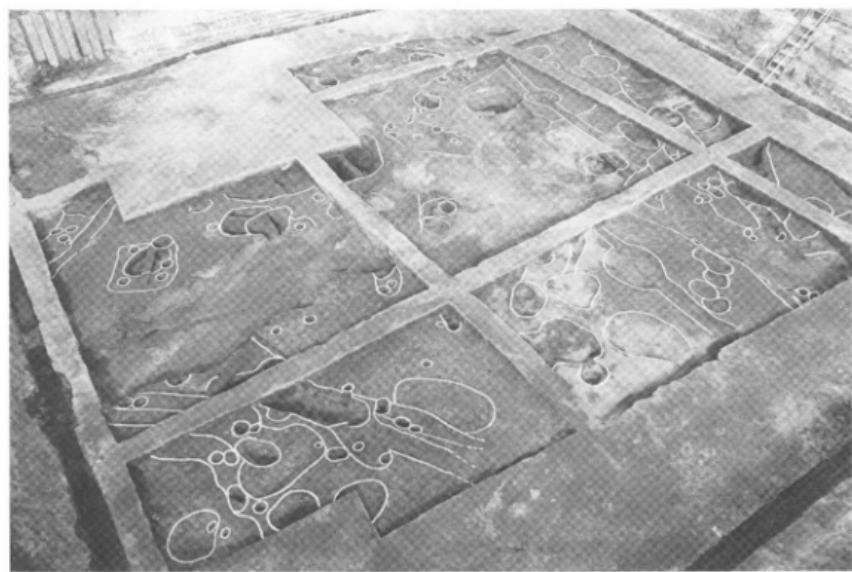
a. 河川001 建築材出土状況



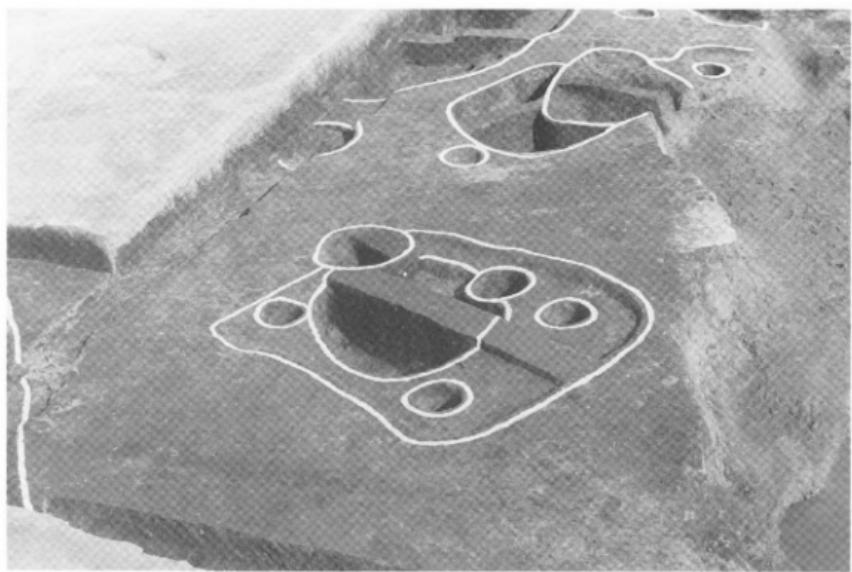
b. 古墳時代道構面馬龜出土状況



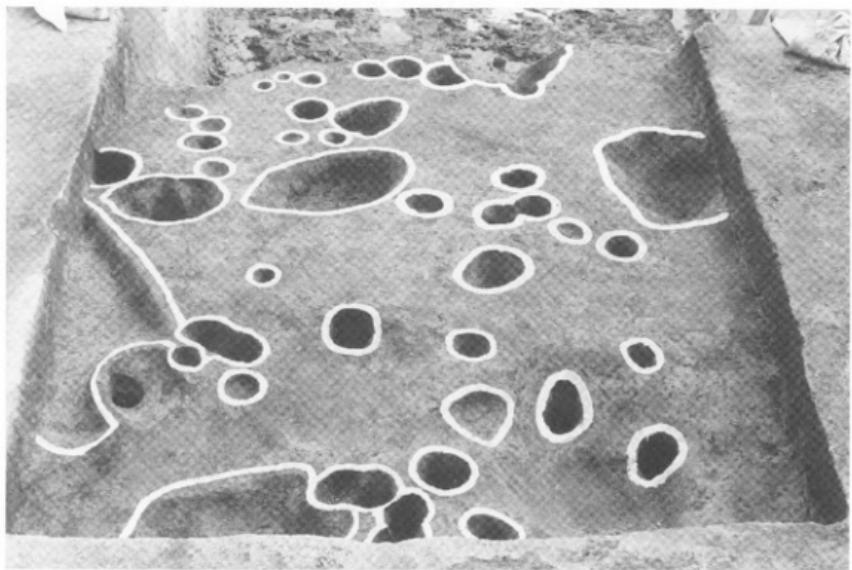
a. 弥生時代造構面全景(北から)



b. 同上(南西から)



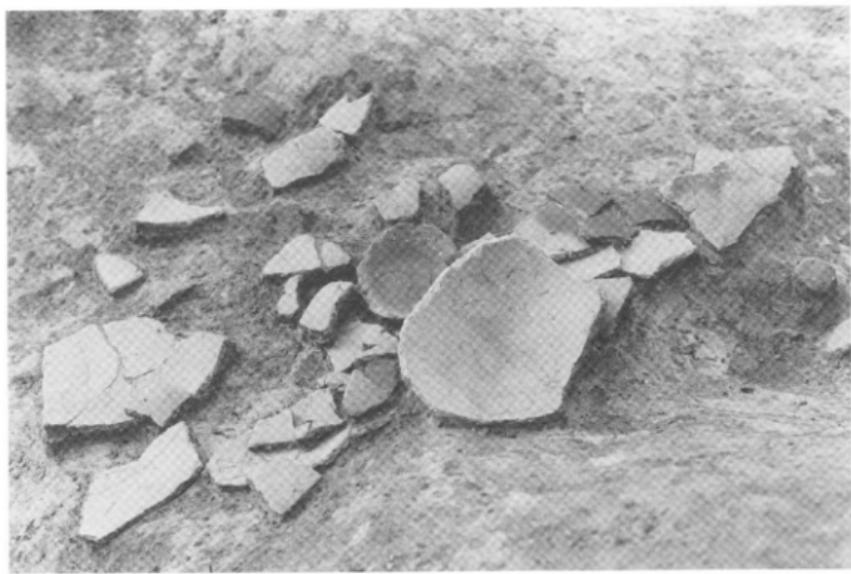
a. C-2区 弥生時代遺構検出状況(南西から)



b. C-3区 弥生時代柱穴等検出状況(北から)



a. 溝101 土層堆積狀況



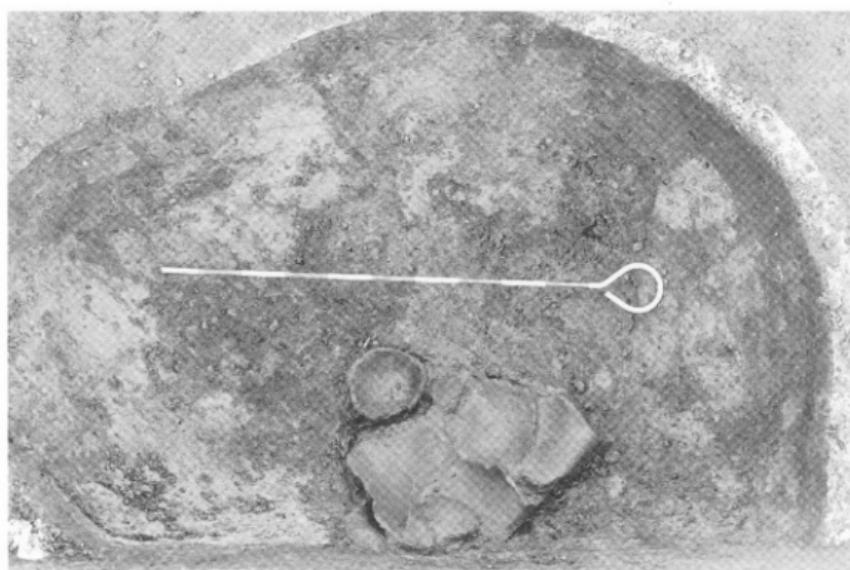
b. 溝103 遺物出土狀況



a. 溝139 遺物出土狀況



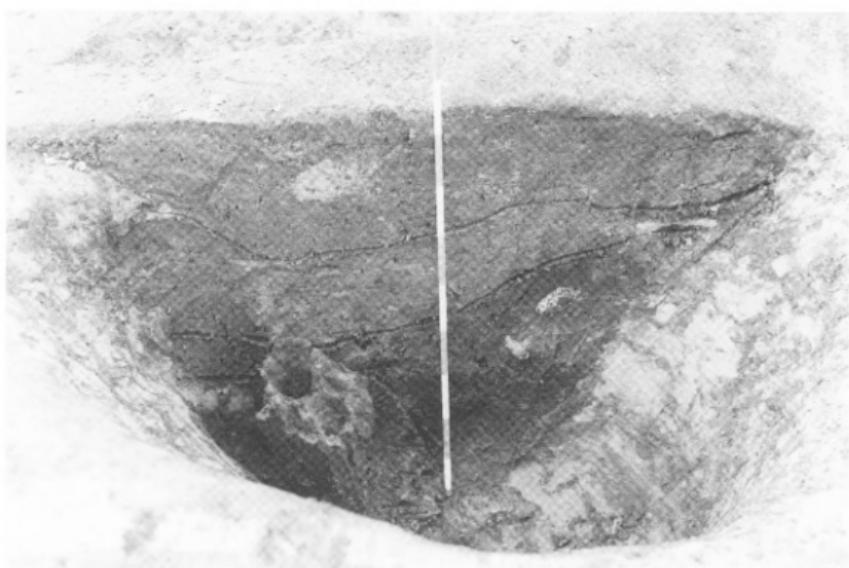
b. 同上



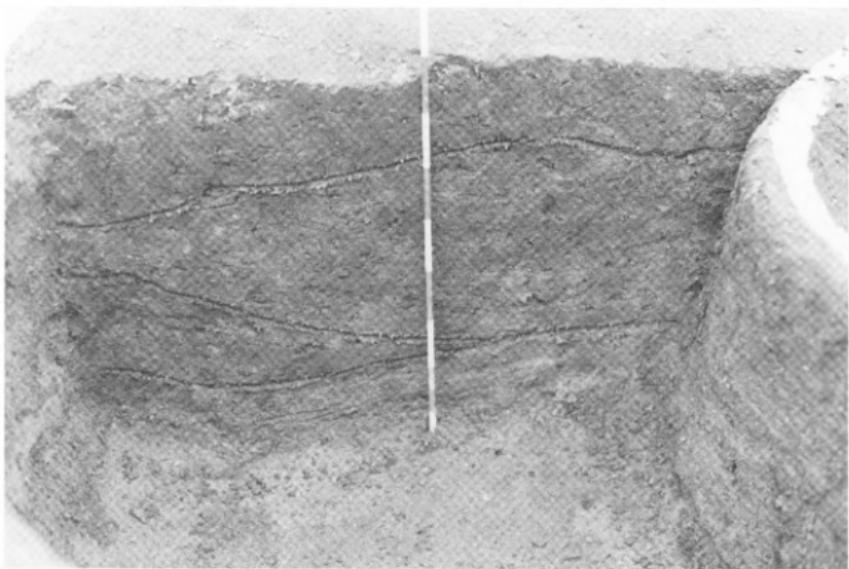
a. 土坑112 遺物出土狀況



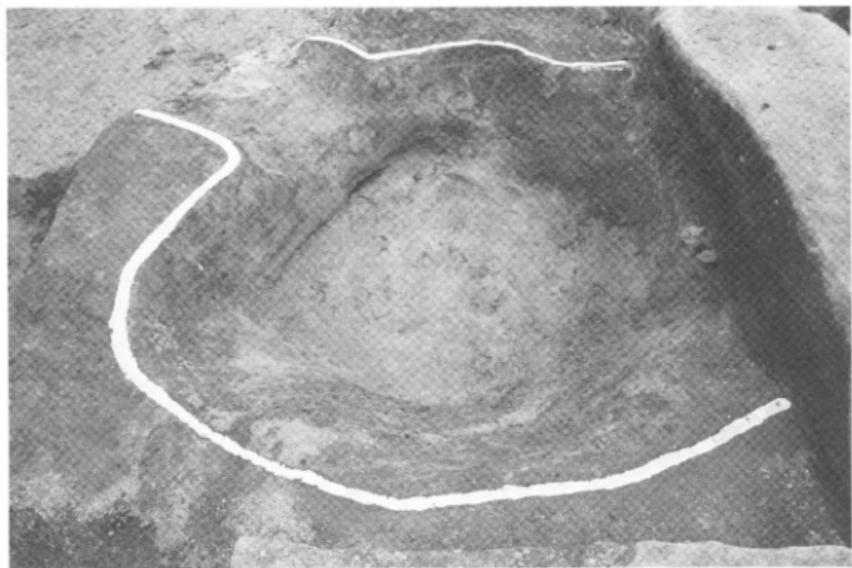
b. 土坑115 遺物出土狀況



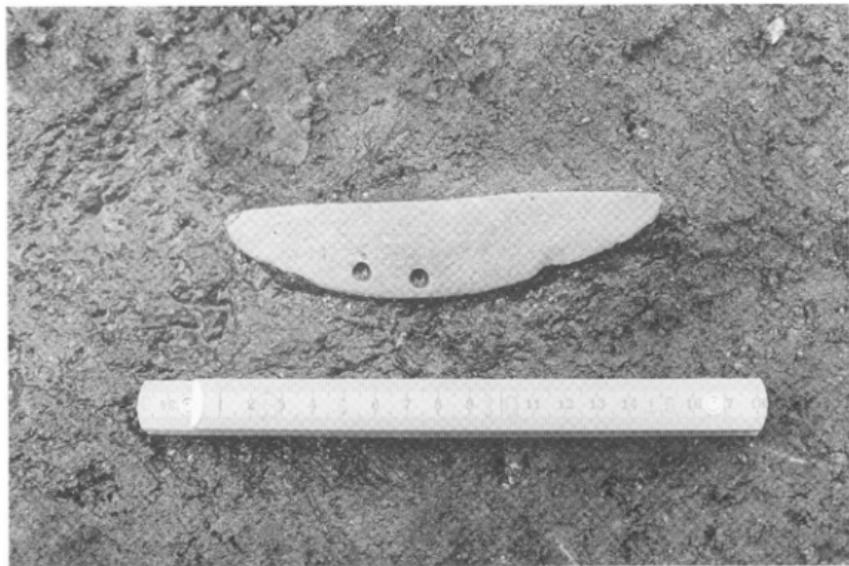
a. 土坑126 土層堆積狀況



b. 土坑150 土層堆積狀況



a. 土坑128 完掘状況(東から)



b. 土坑128 石庖丁出土状況



a. 土坑128 遺物出土狀況



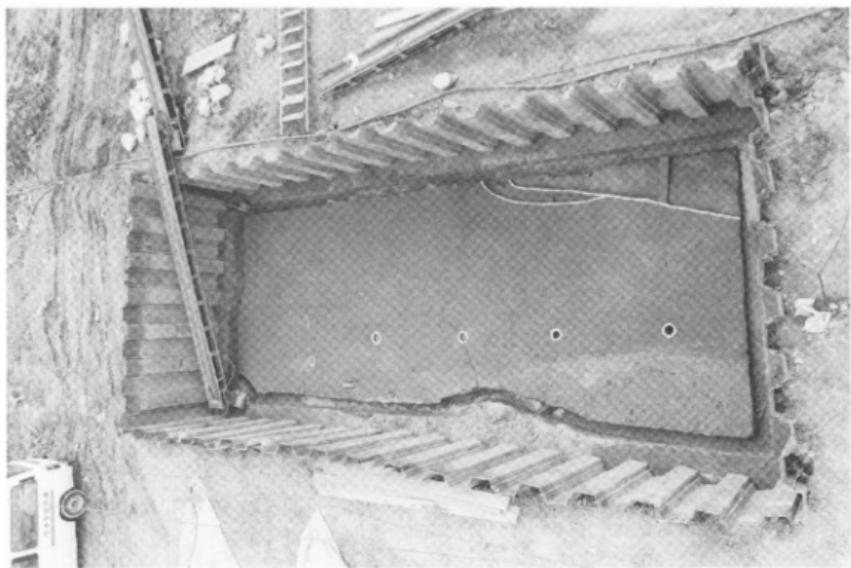
b. 同上



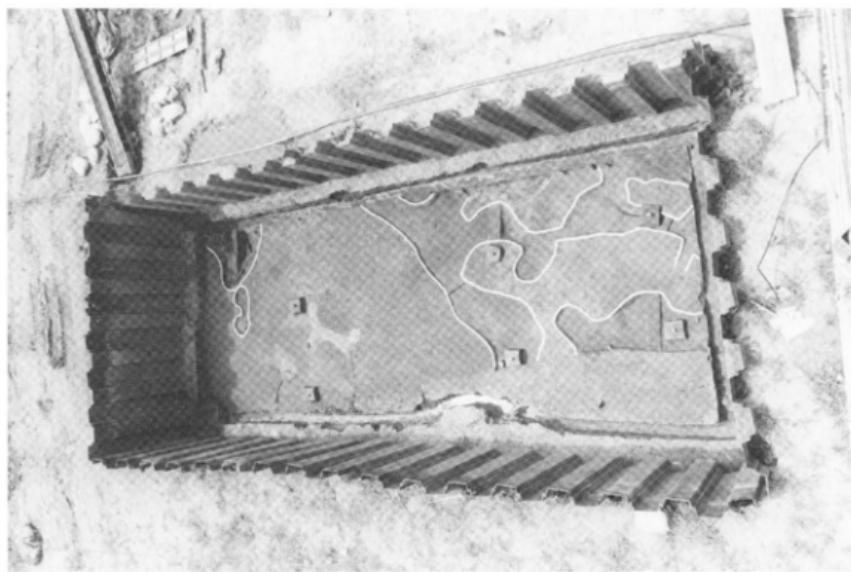
a. P-375 柱根検出状況



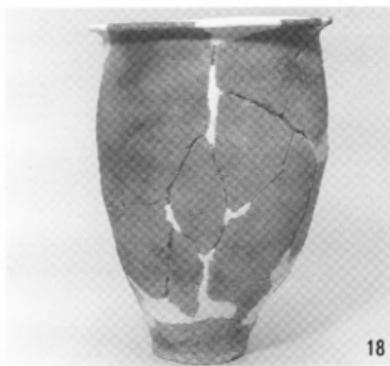
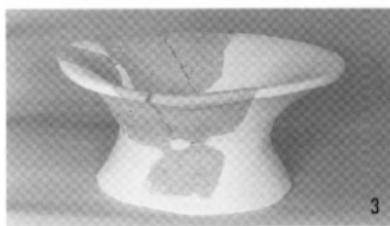
b. P-381 木製品出土状況

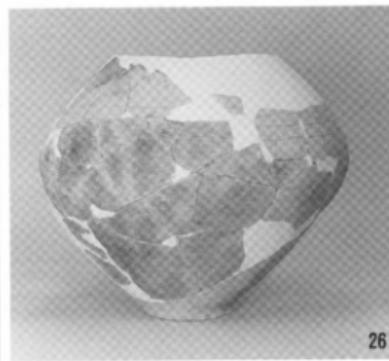


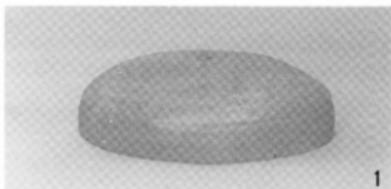
a. 第3次調査 古墳時代遺構面全景(北から)



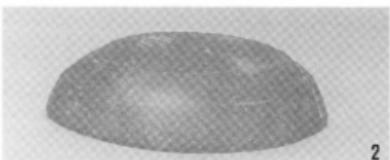
b. 第3次調査 弥生時代遺構面全景(北から)



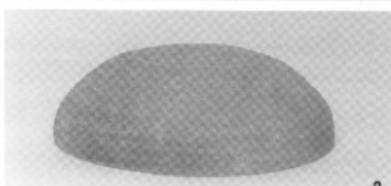




1



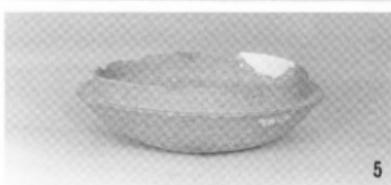
2



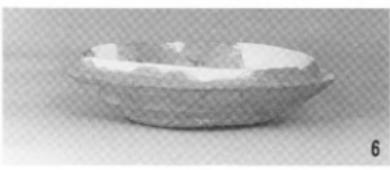
3



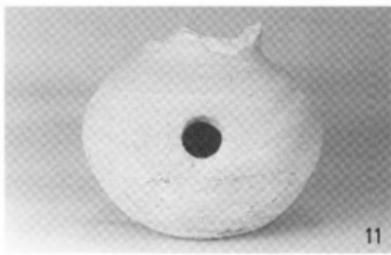
19



5



6



11



9



12



17



13



14



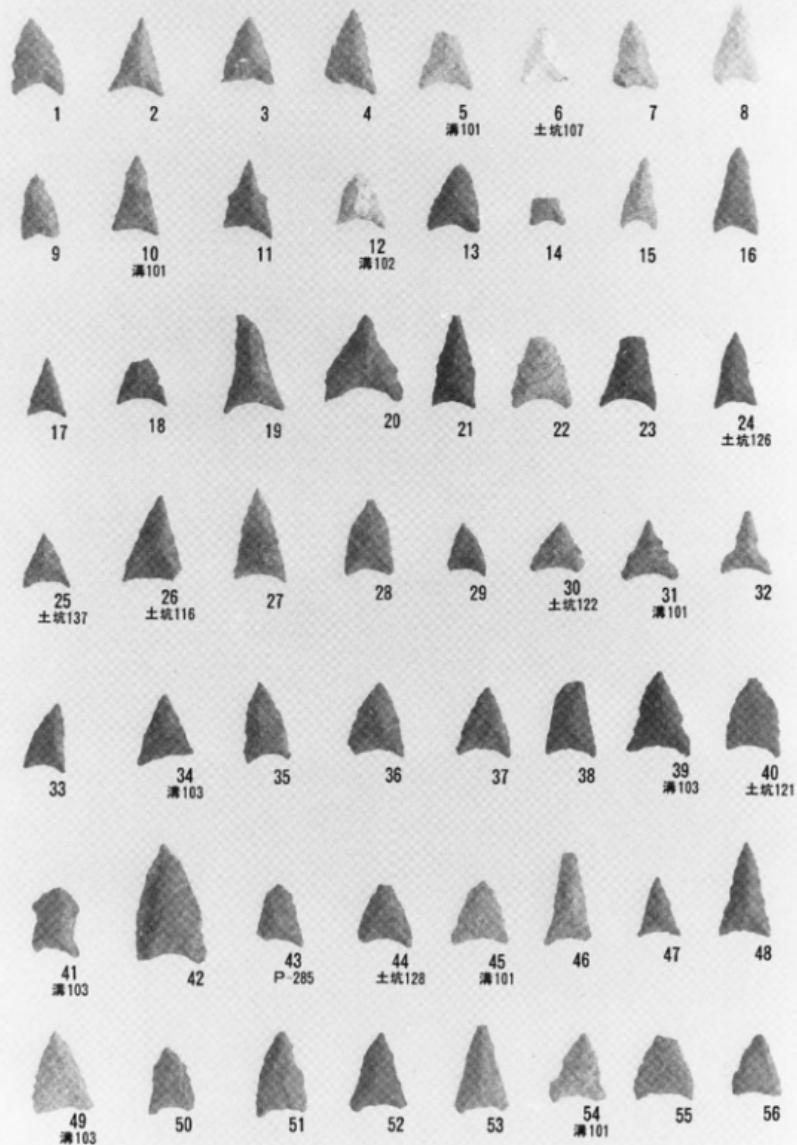
15

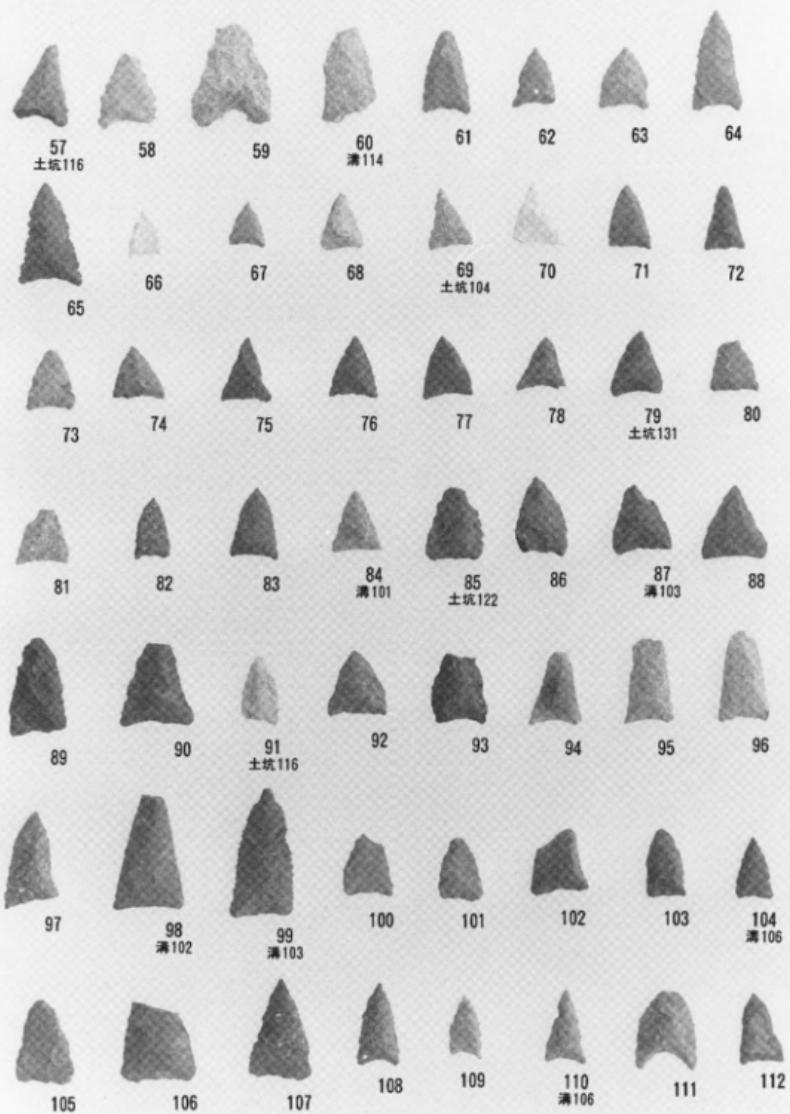


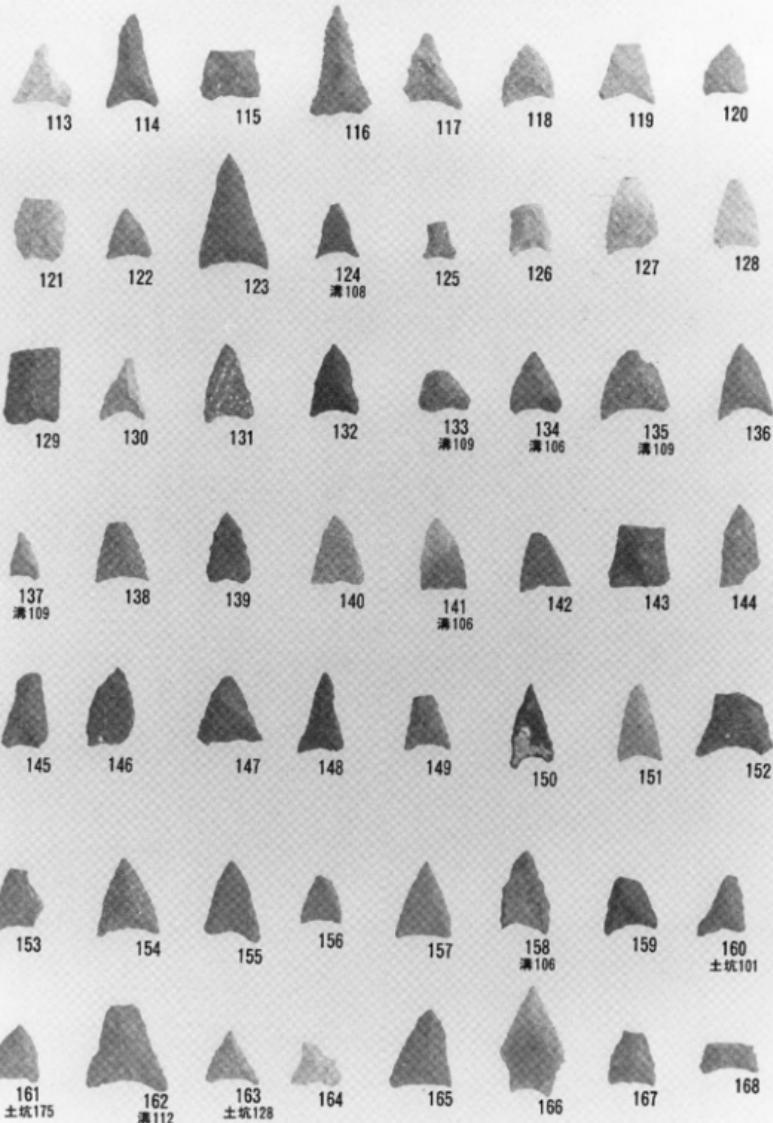
16

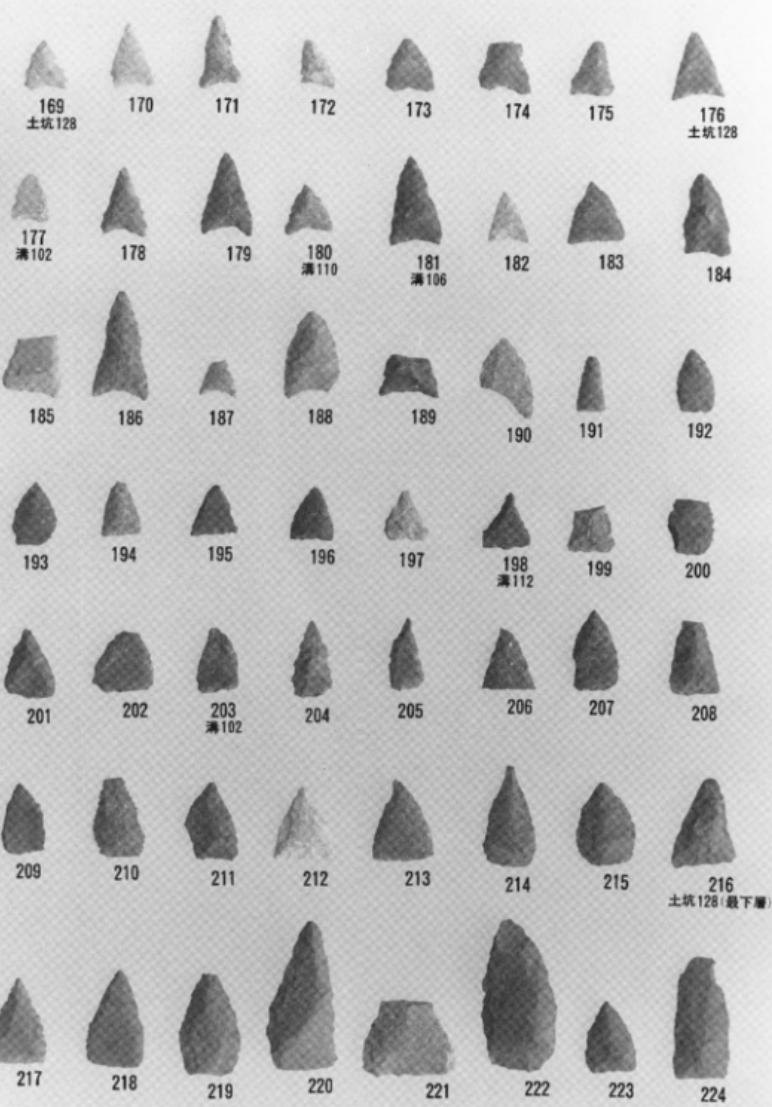


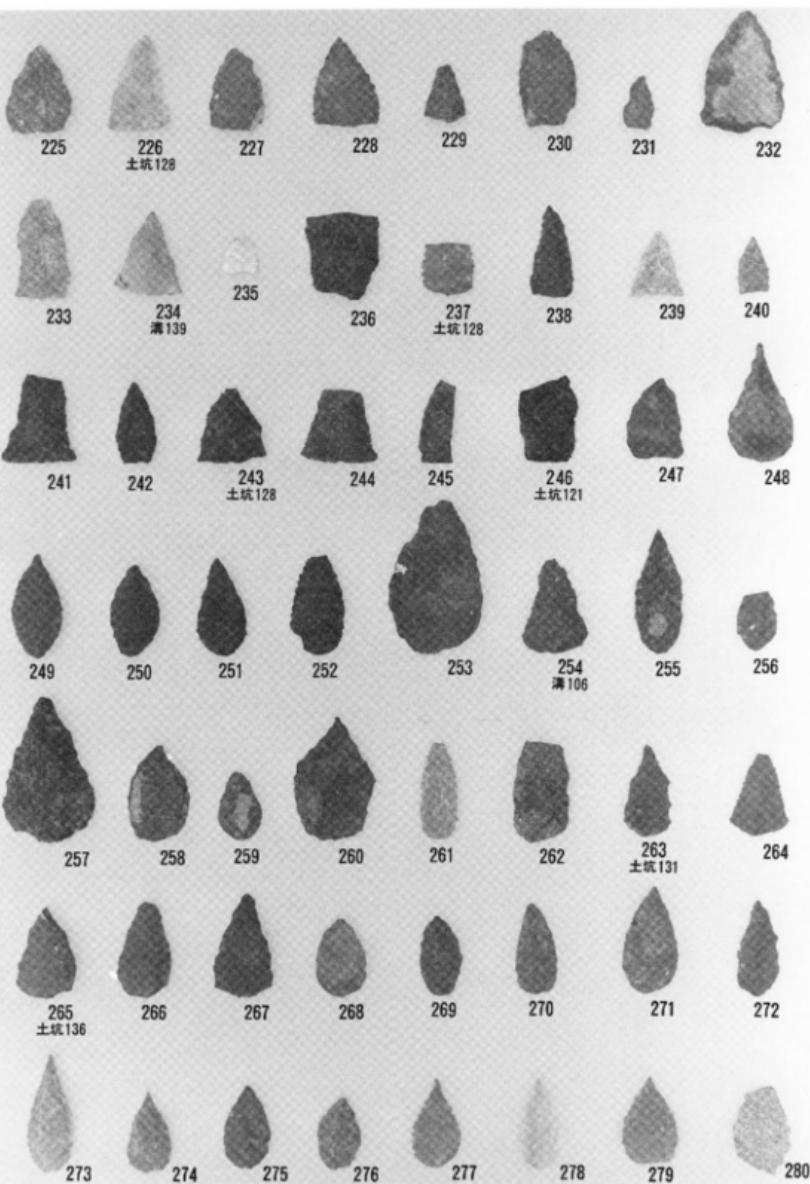
18

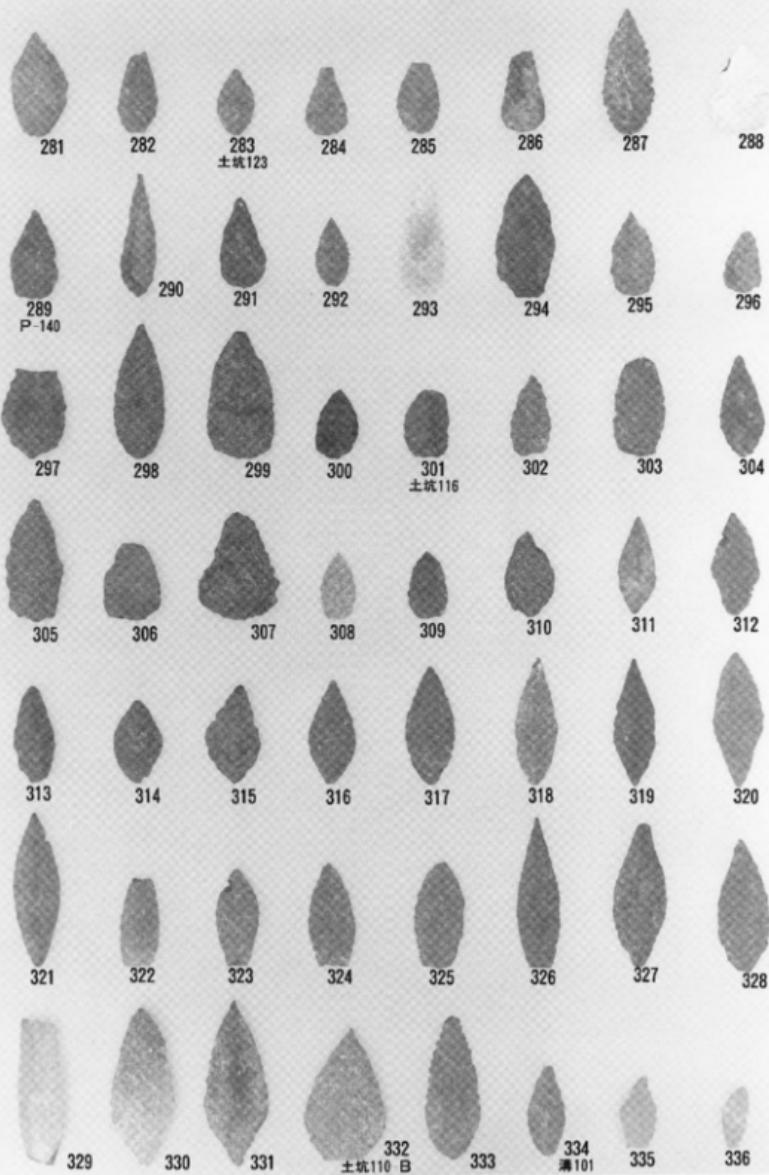


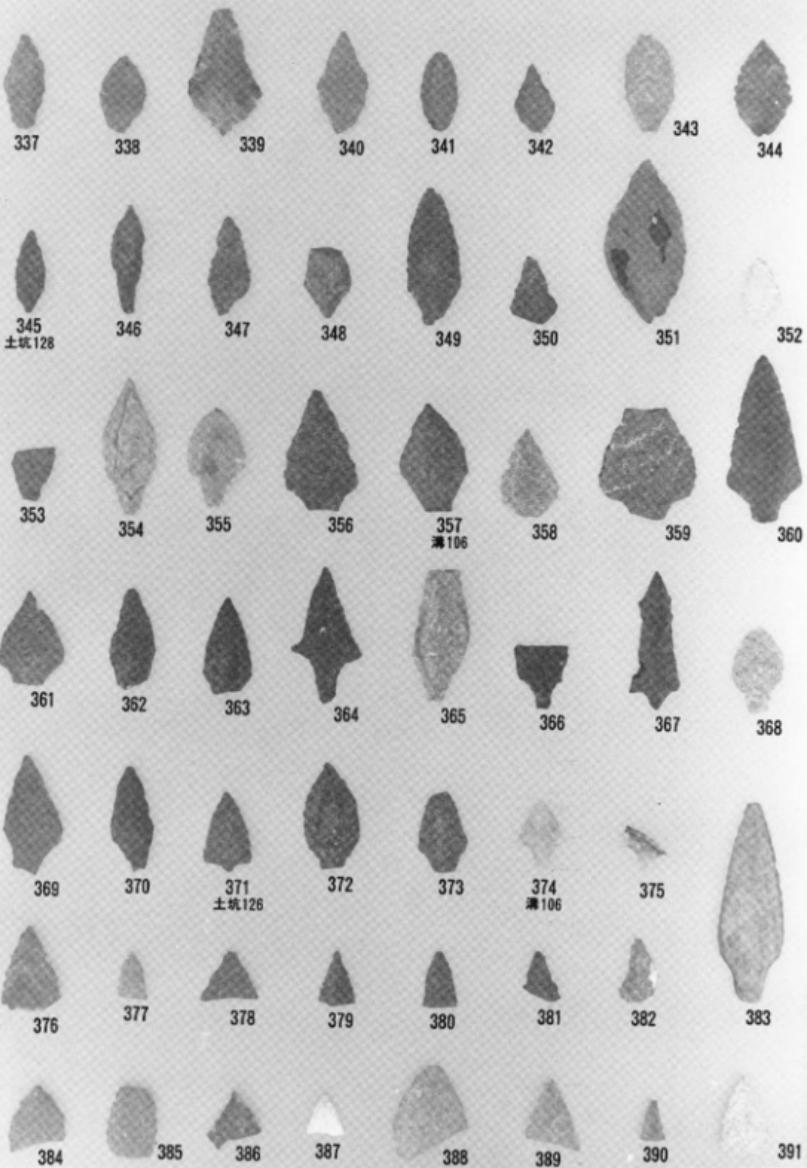


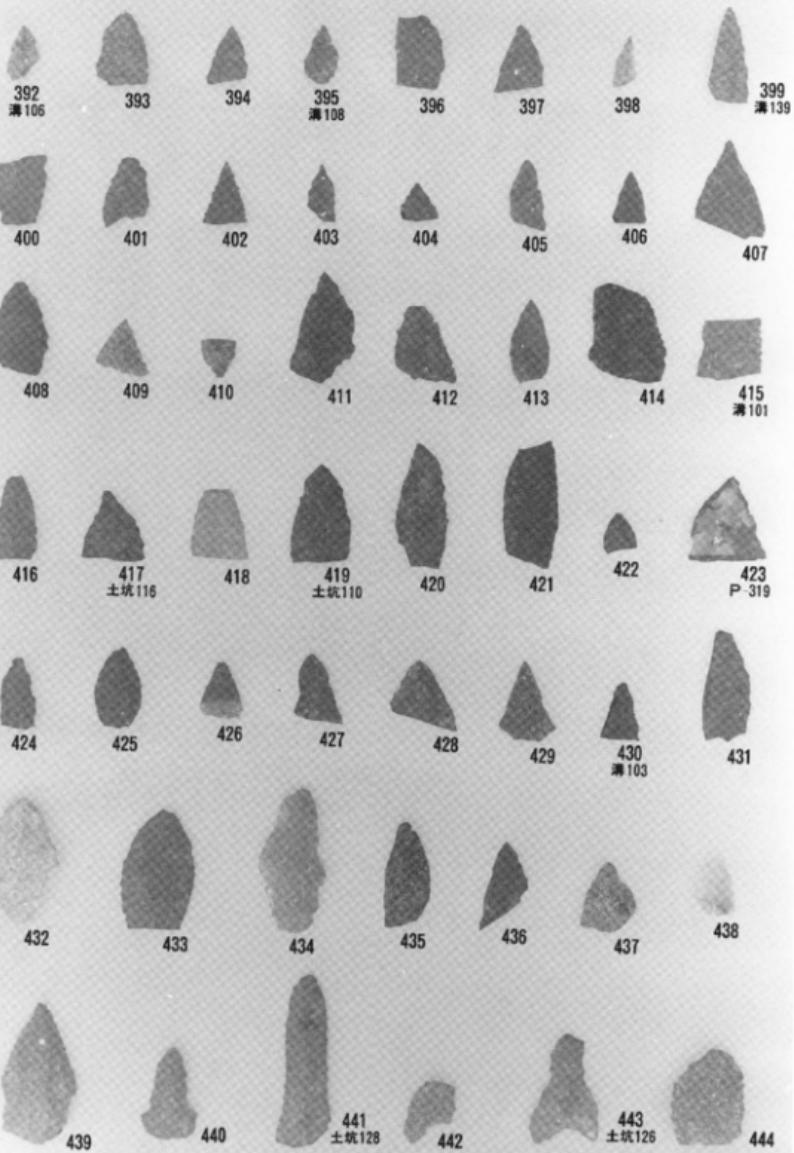


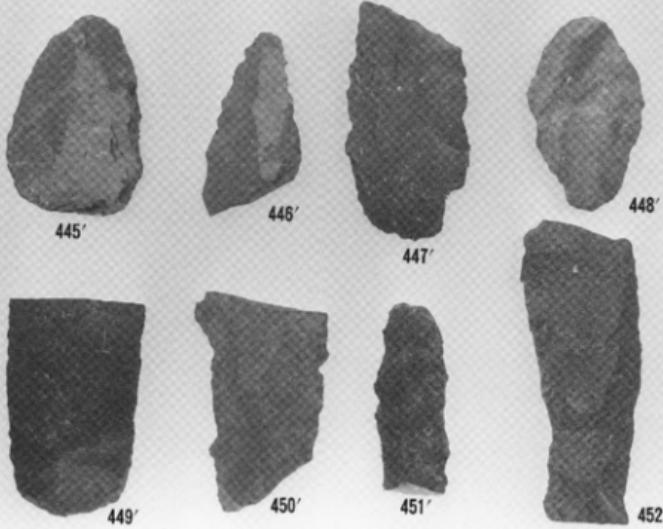
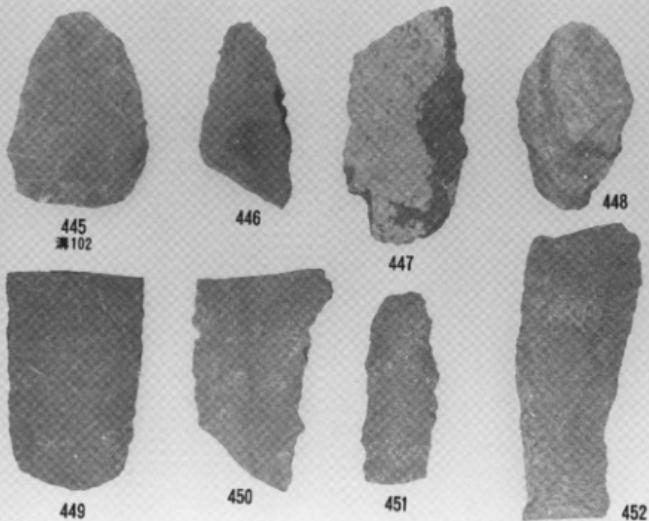


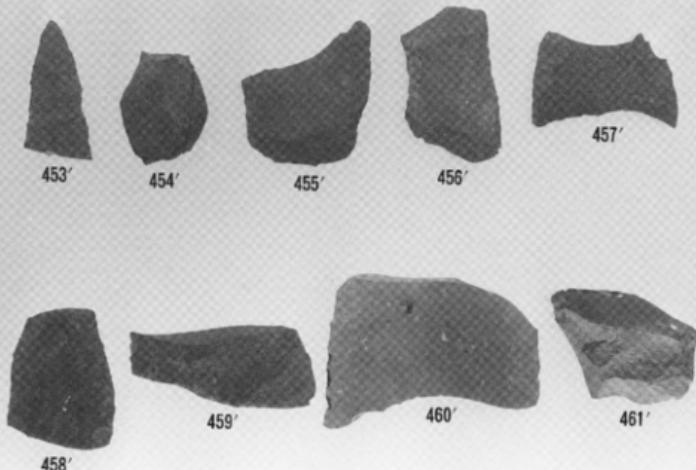
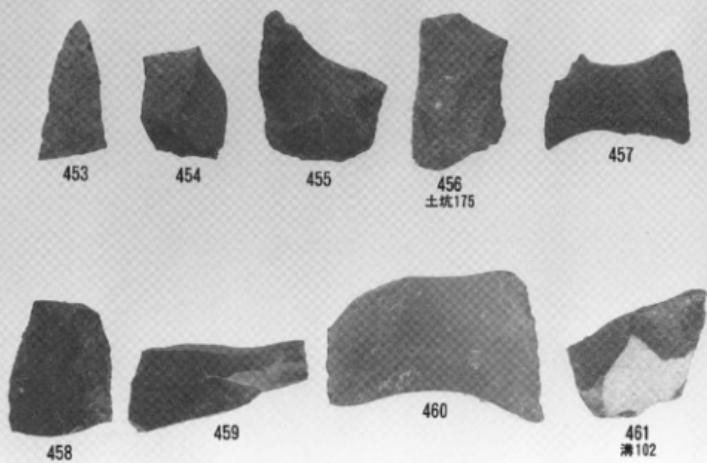














462  
溝106



463



464  
土坑116



465  
土坑128



466



462'



463'



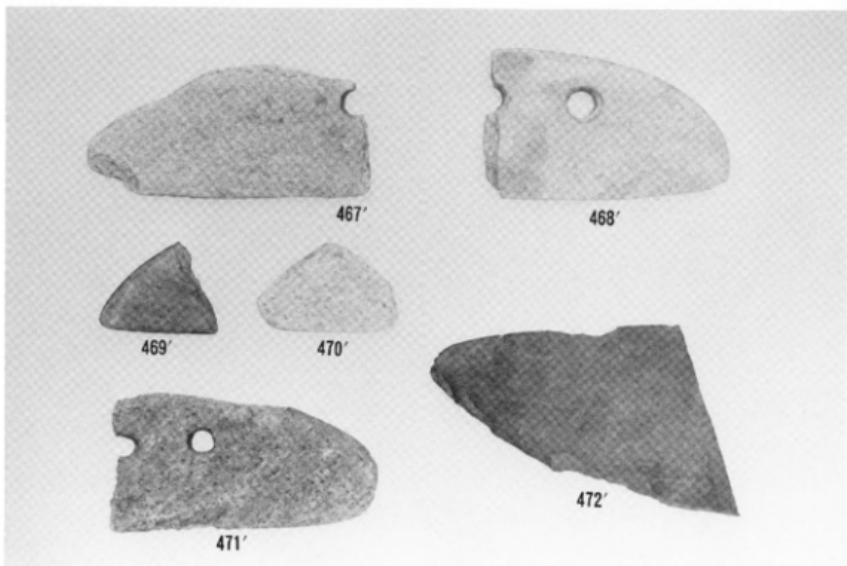
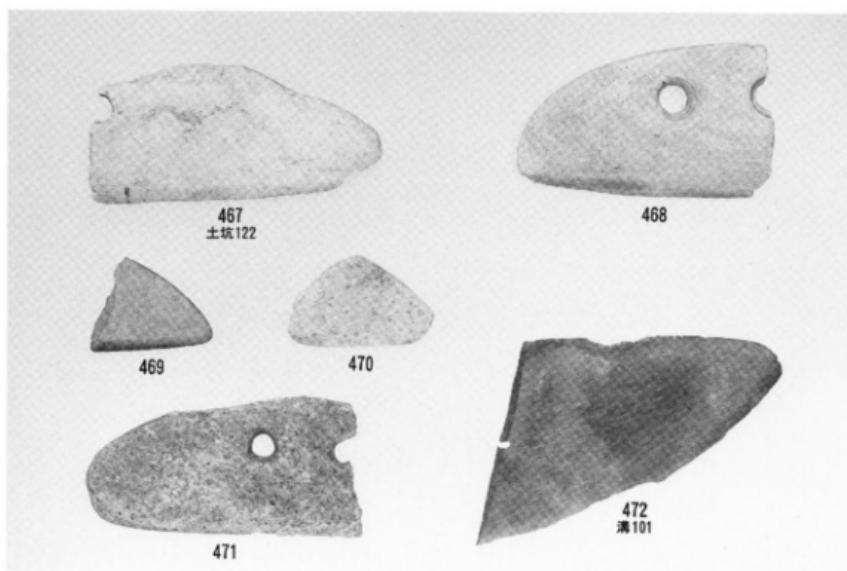
464'

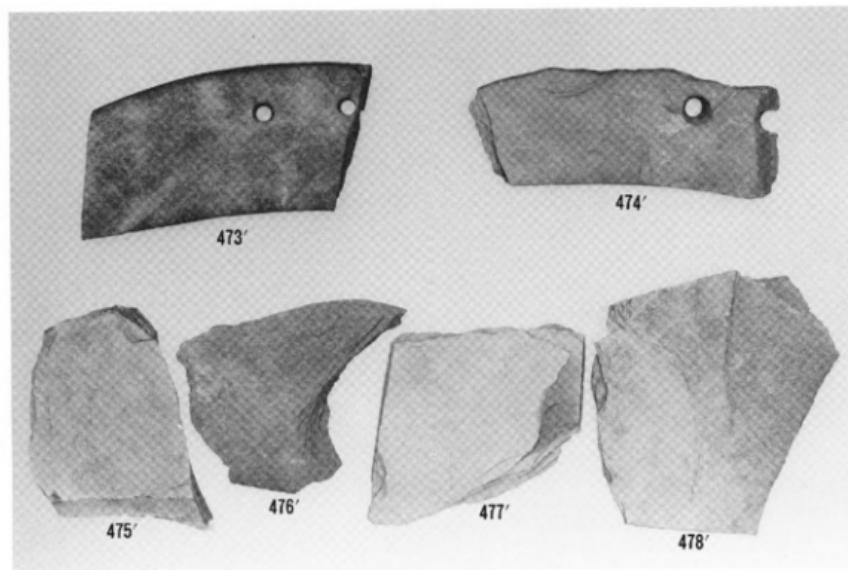
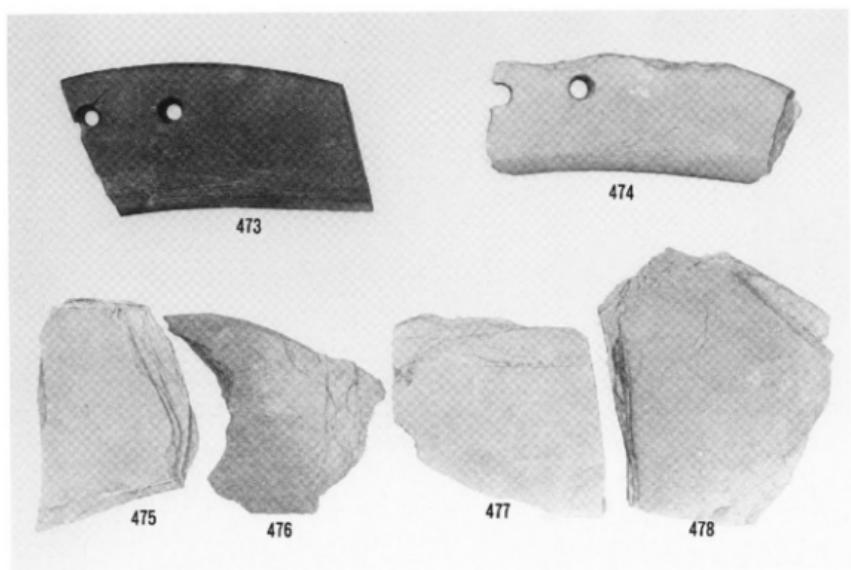


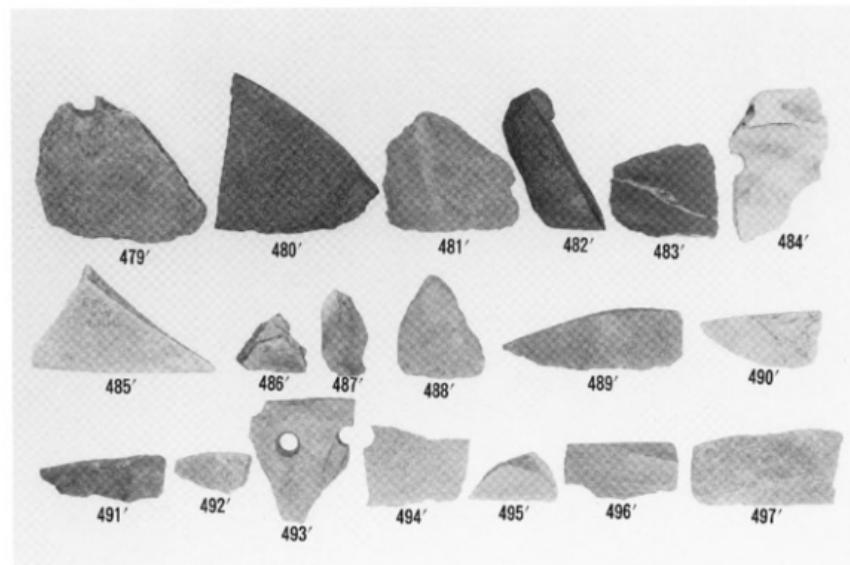
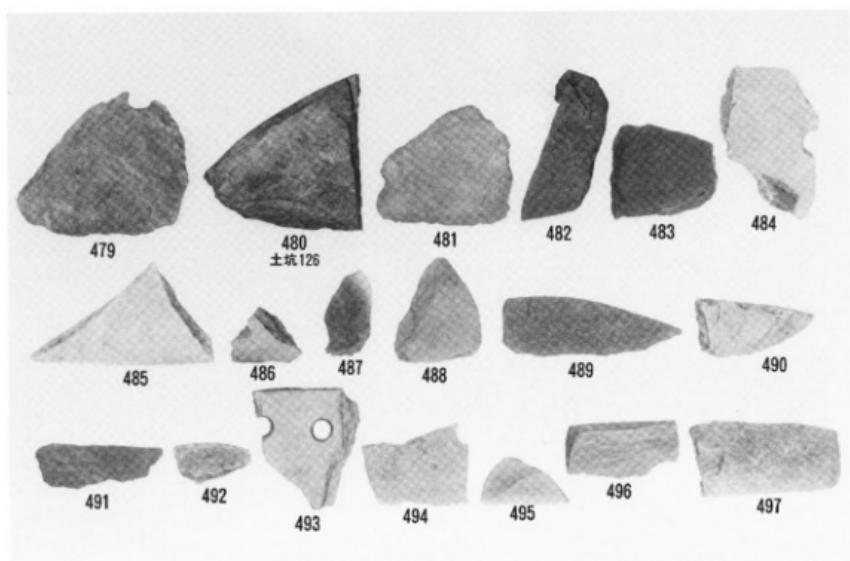
465'

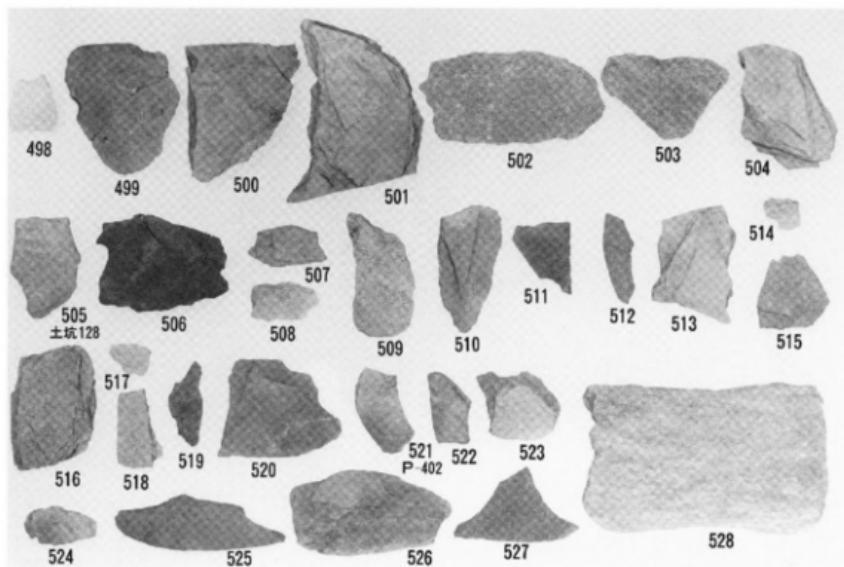


466'

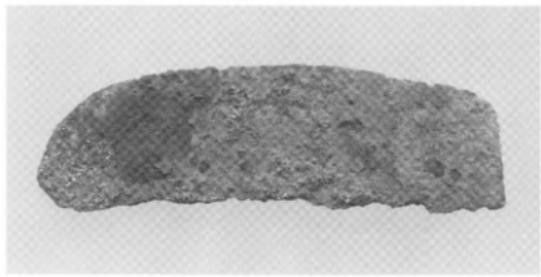
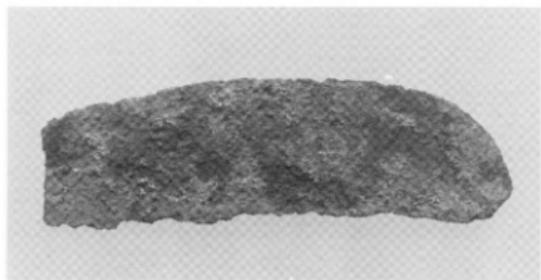








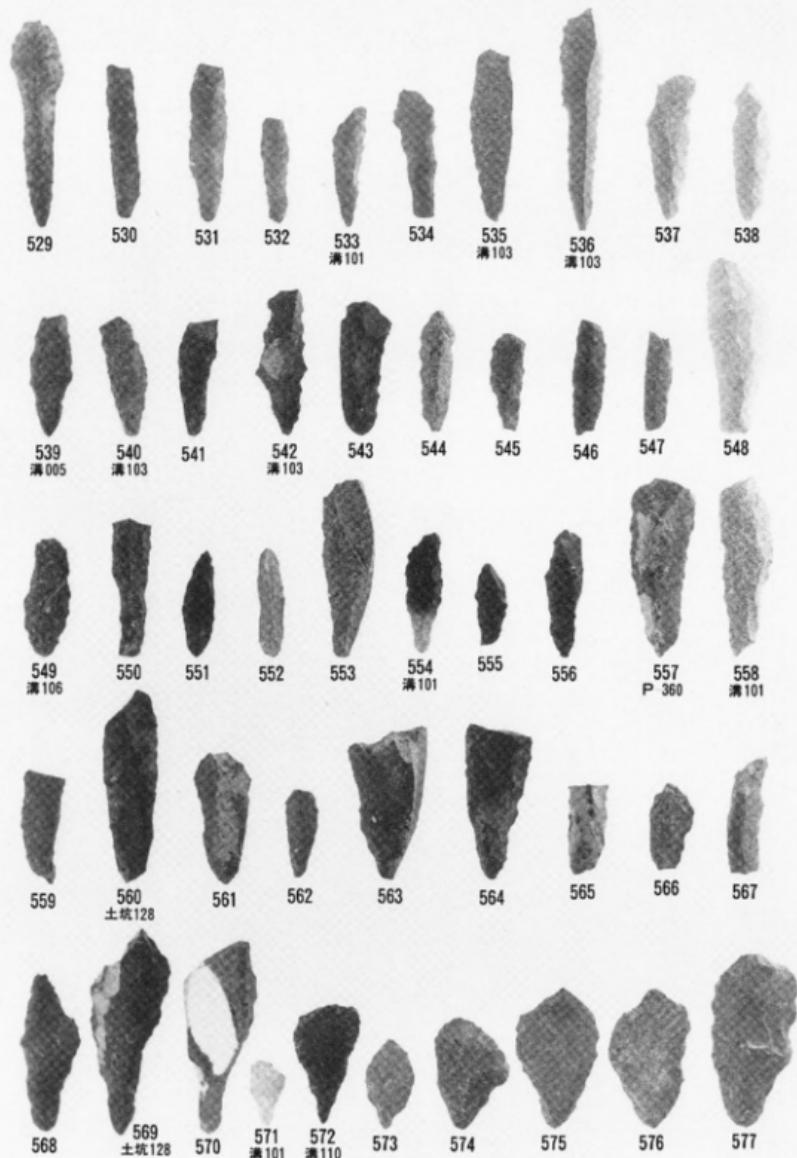
a. 石庖丁

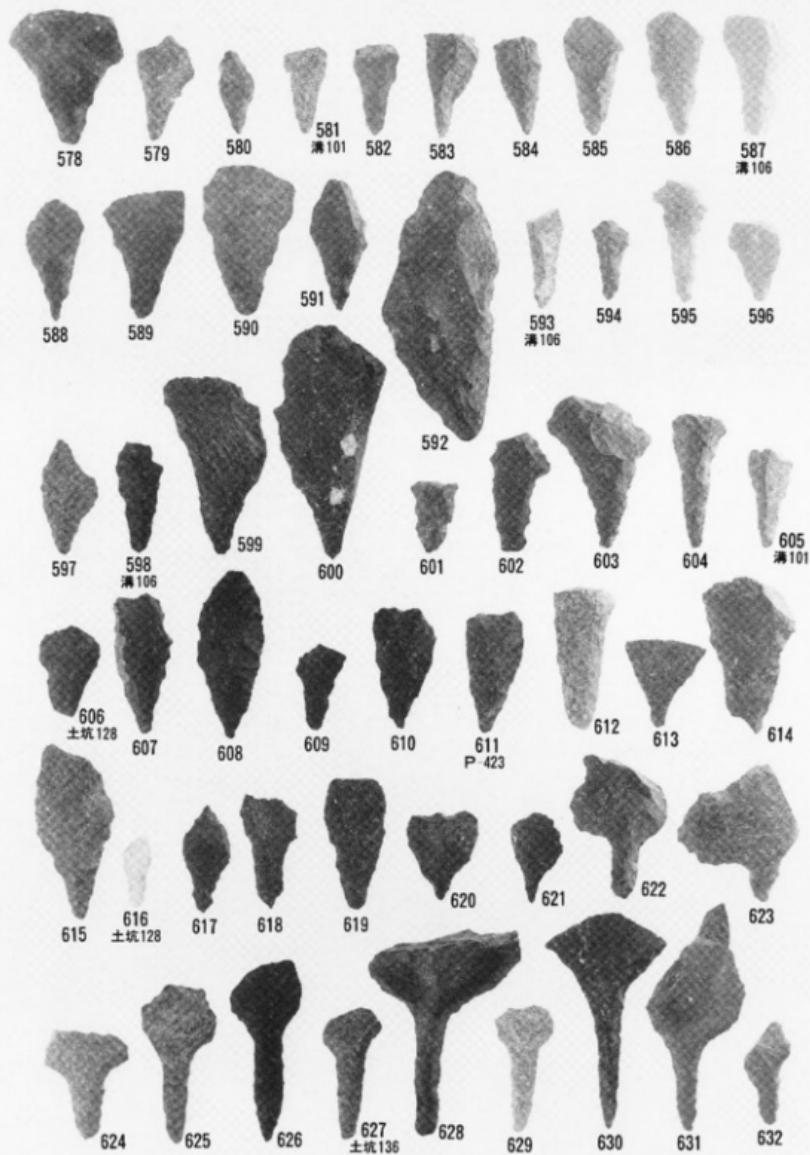


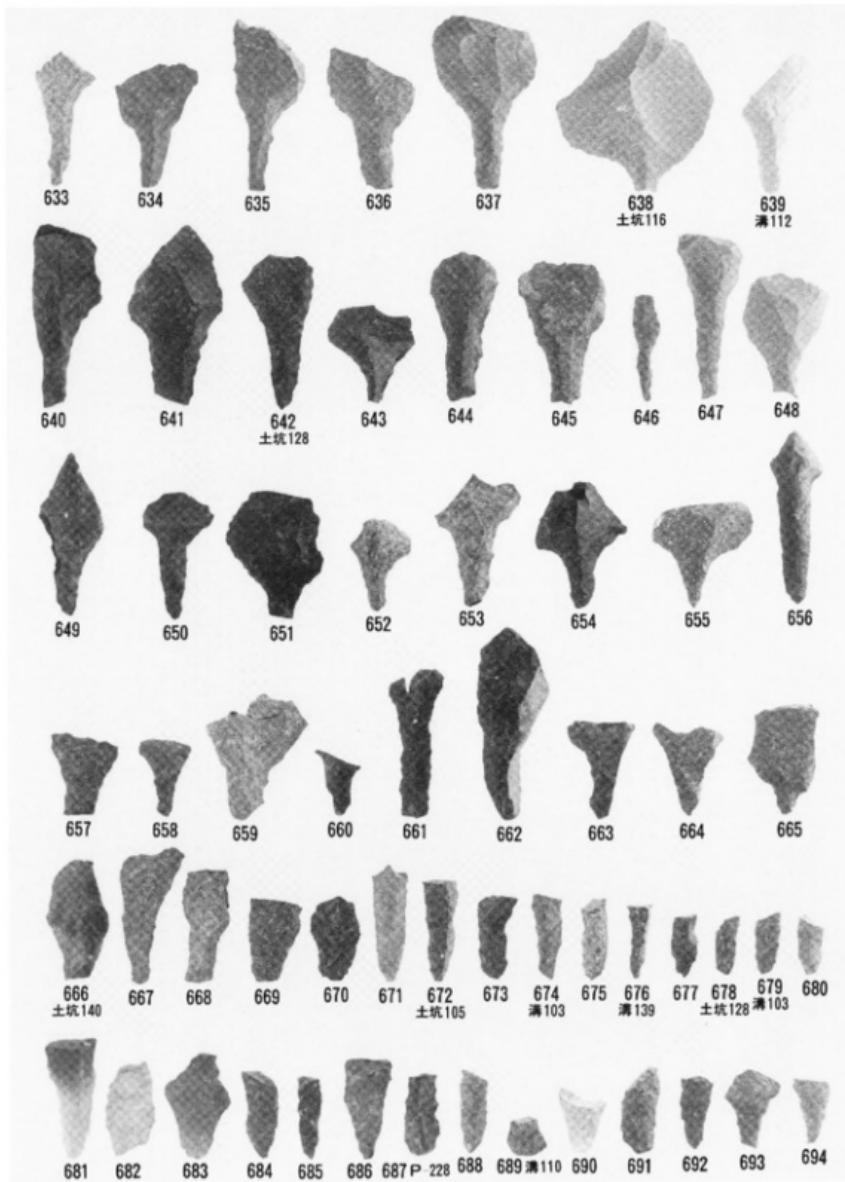
b. 鐵鎌

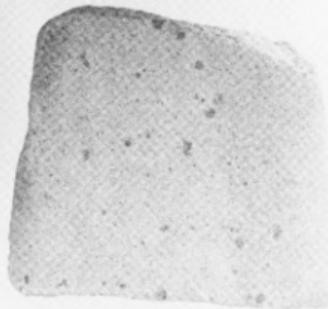


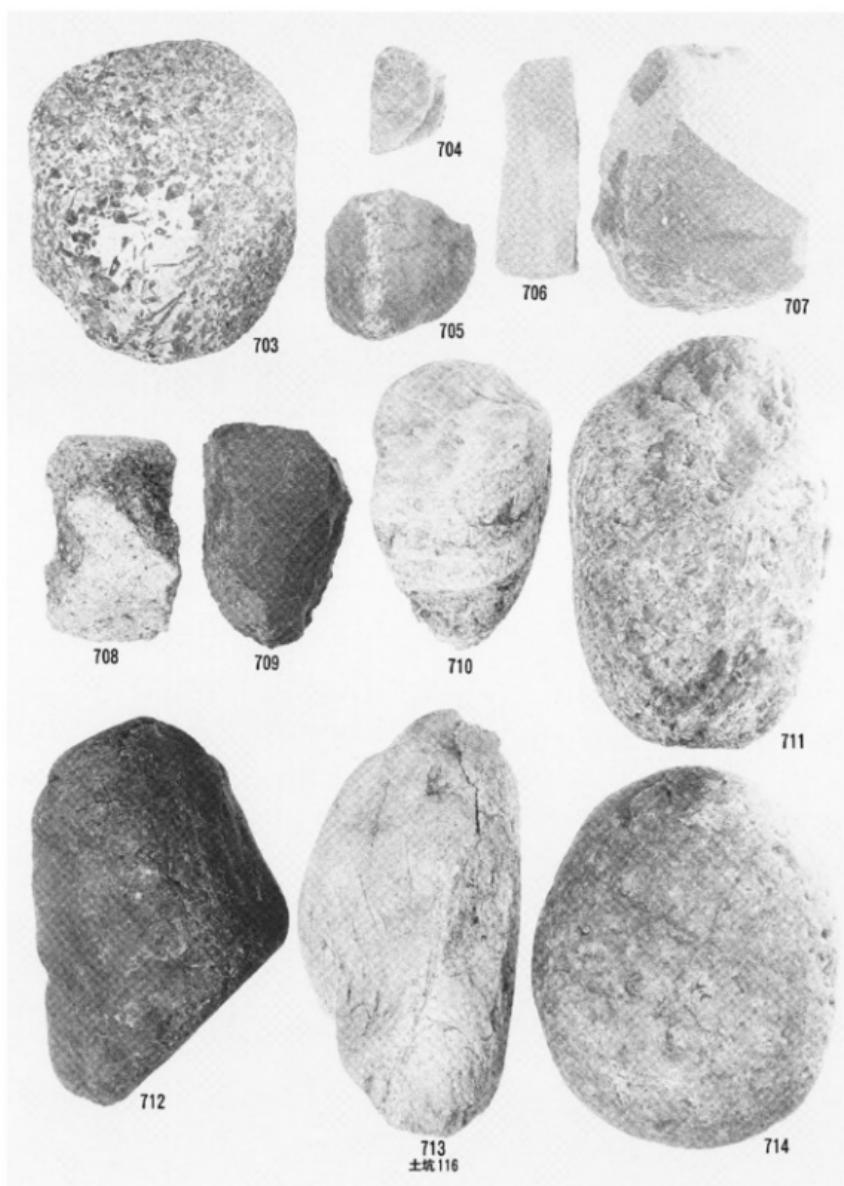
c. 勾玉狀石製品

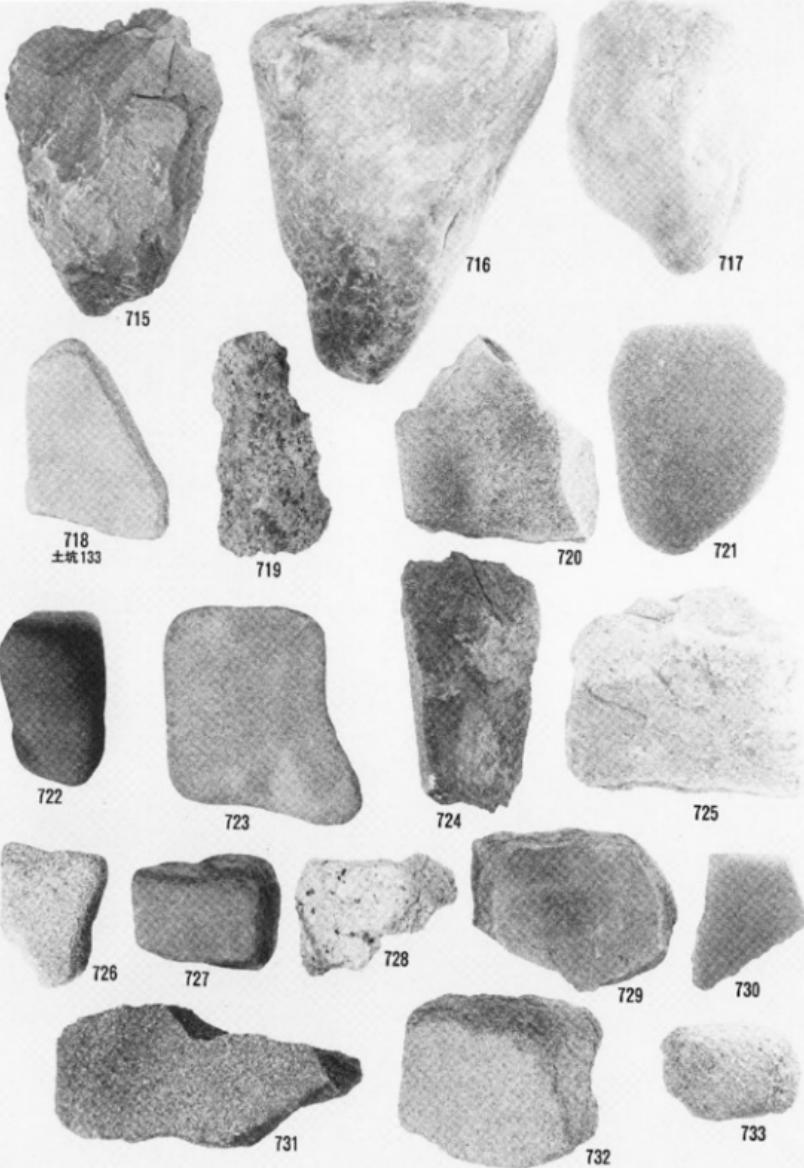














734



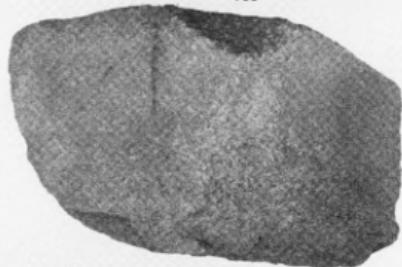
735



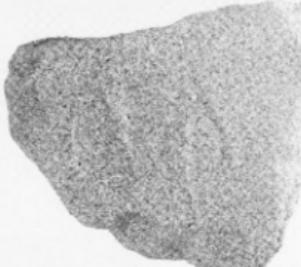
736



737 濁139



738  
土坑128



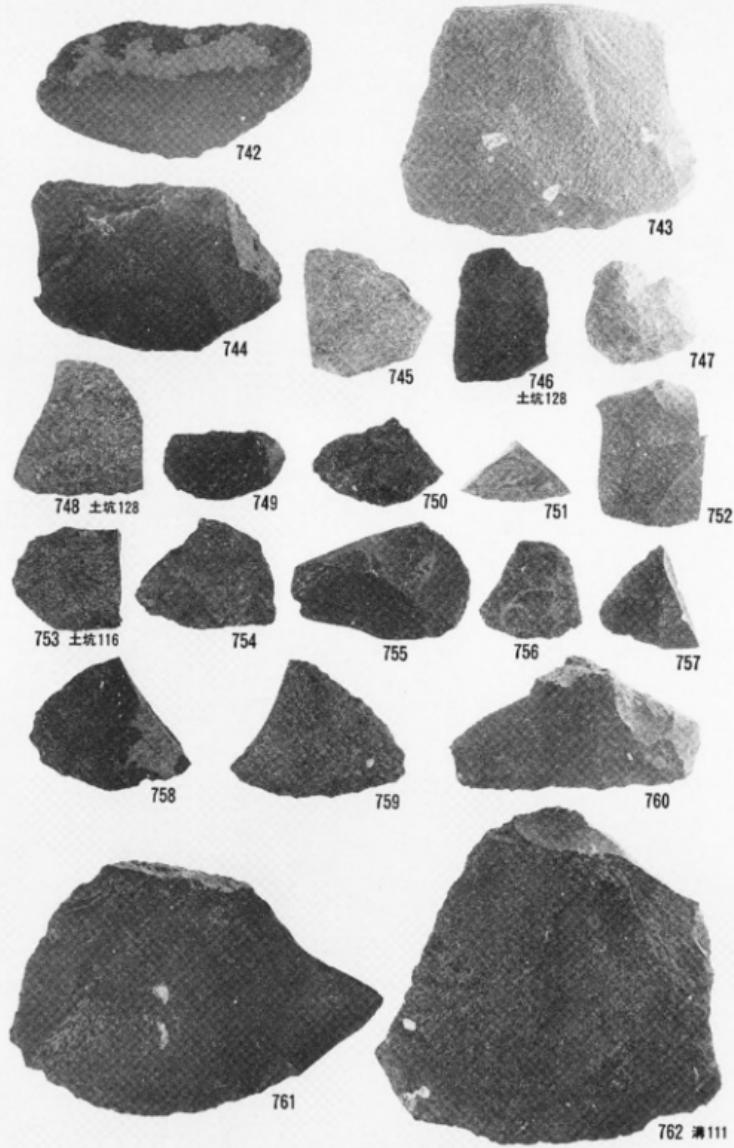
739

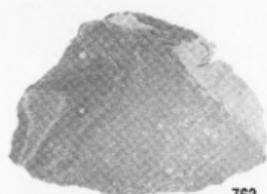


740 土坑131

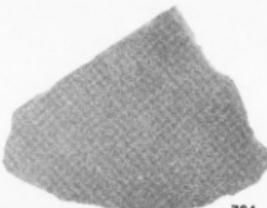


741  
P-24





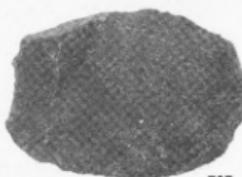
763

764  
溝101

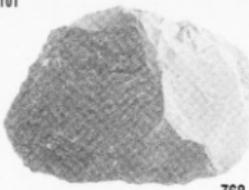
765



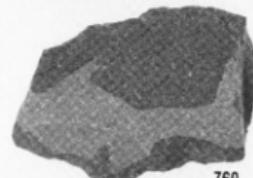
766



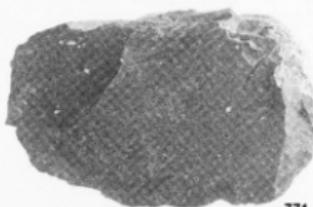
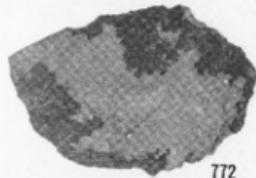
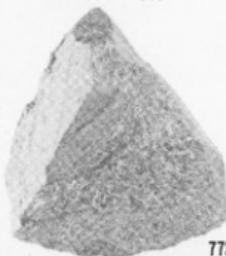
767



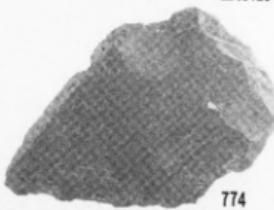
768

769  
土坑140

770

771  
土坑128772  
土坑128

773



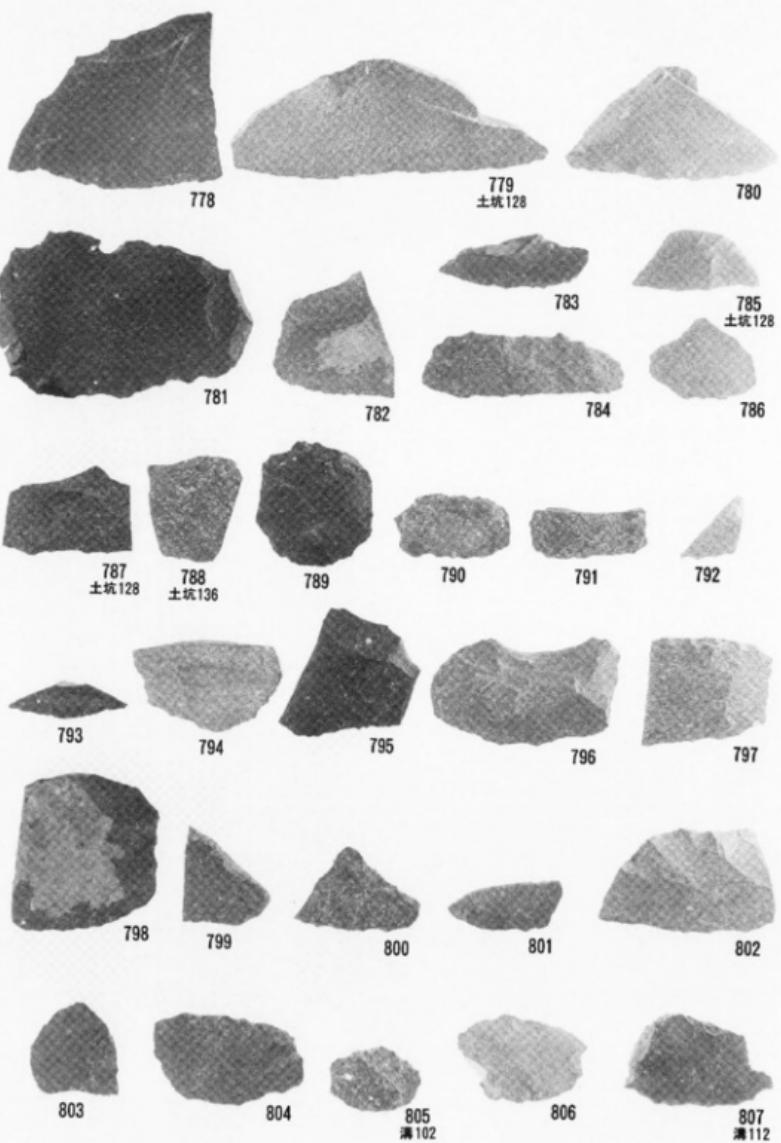
774

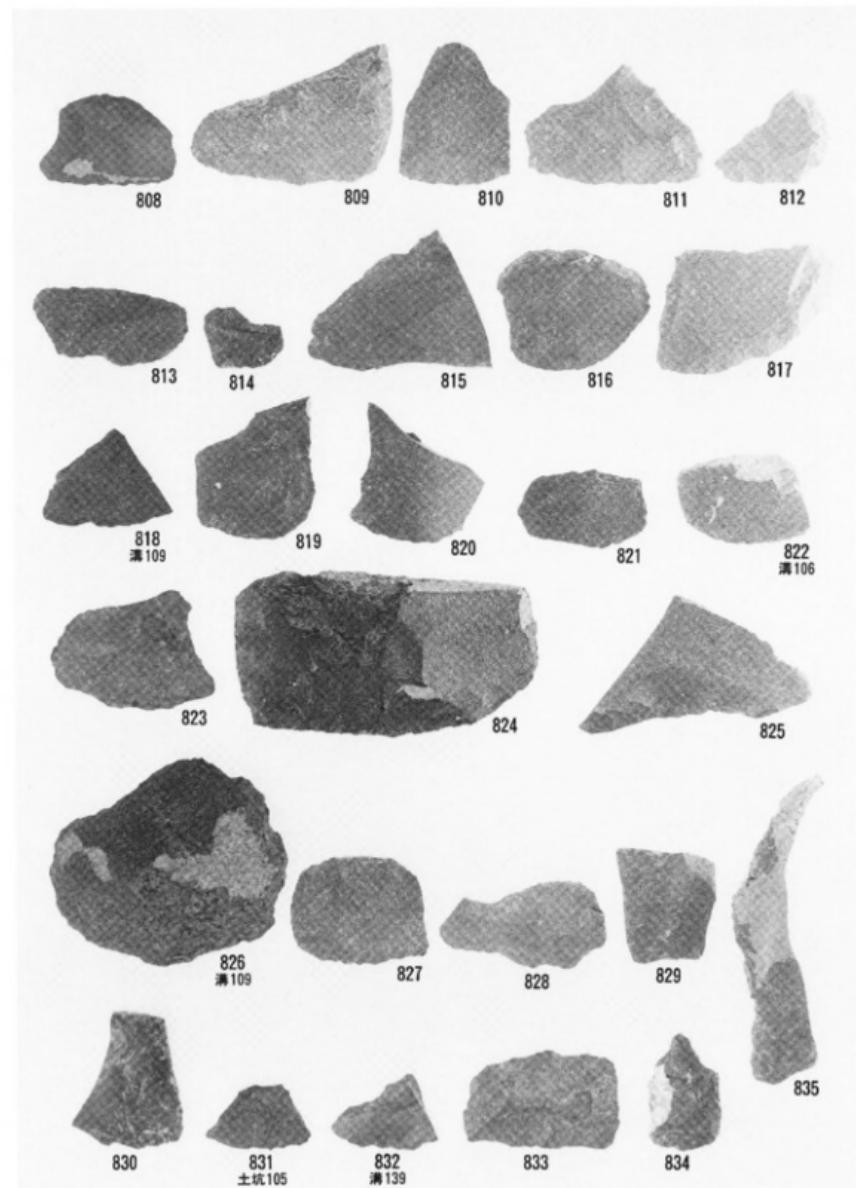


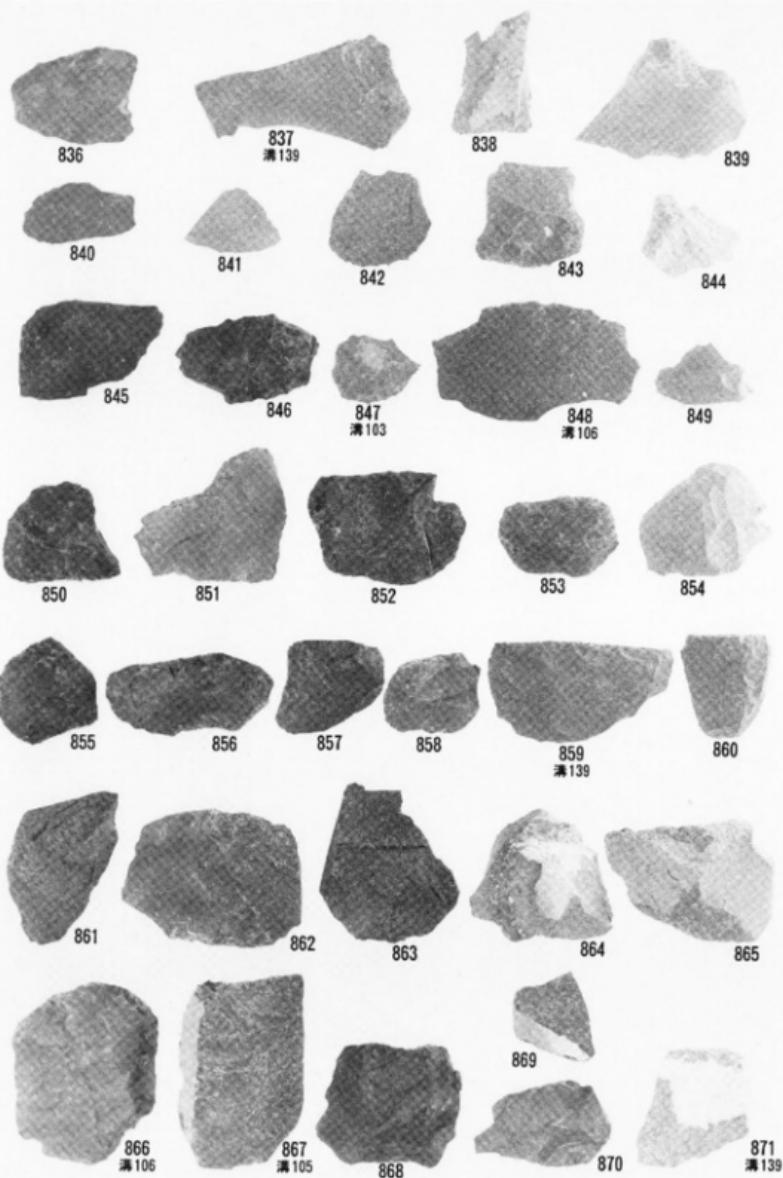
775

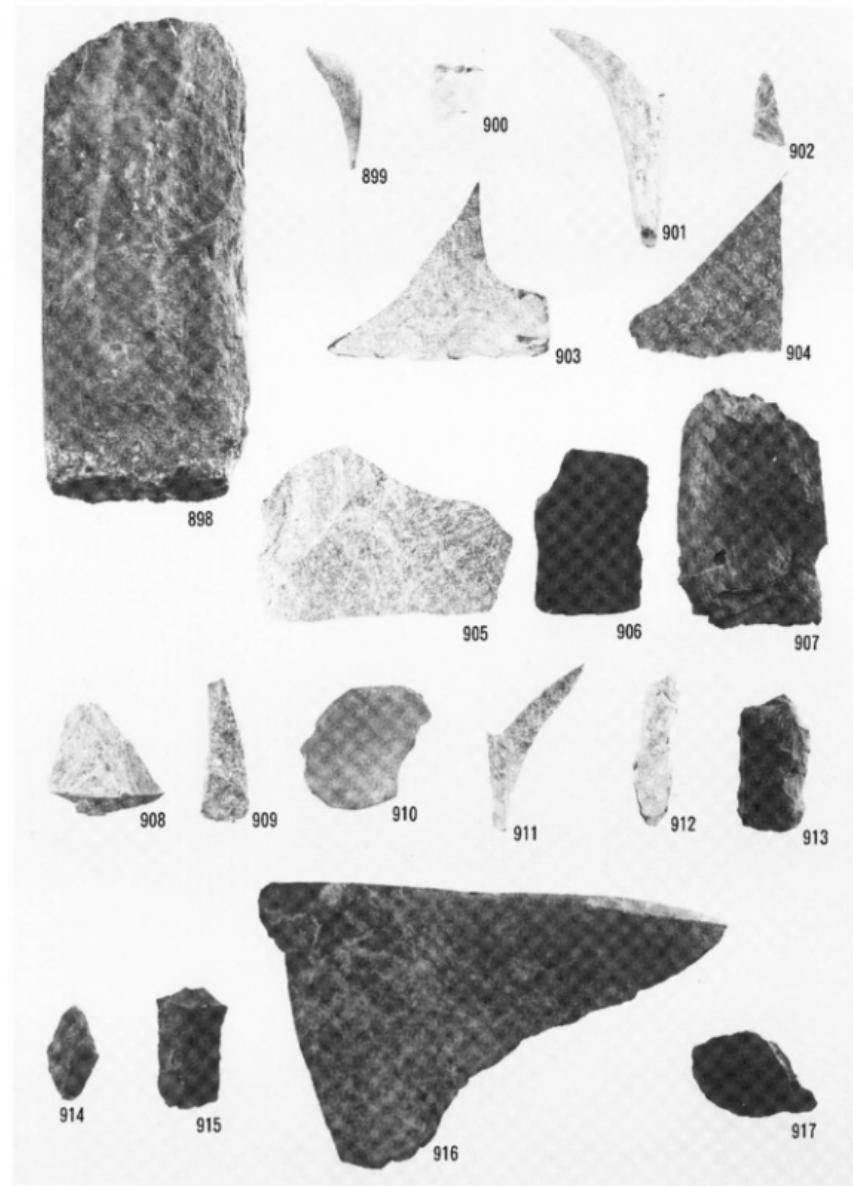
776  
土坑121

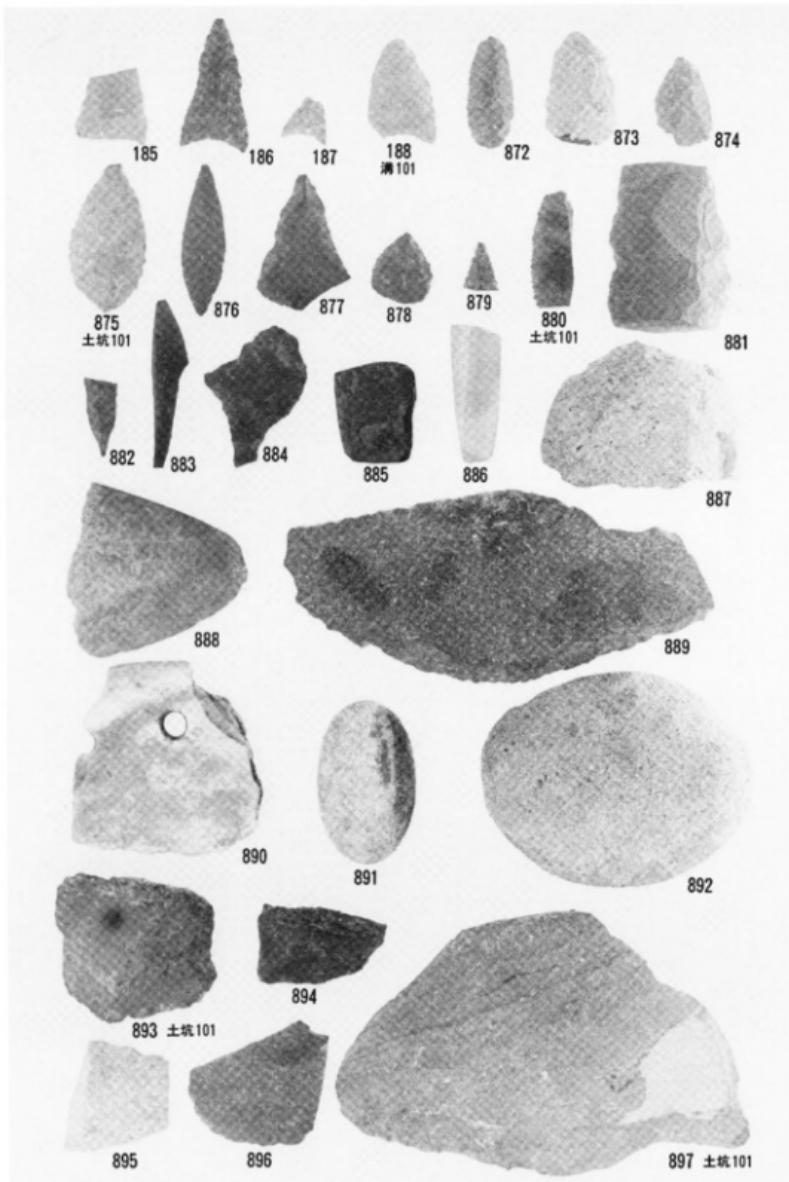
777

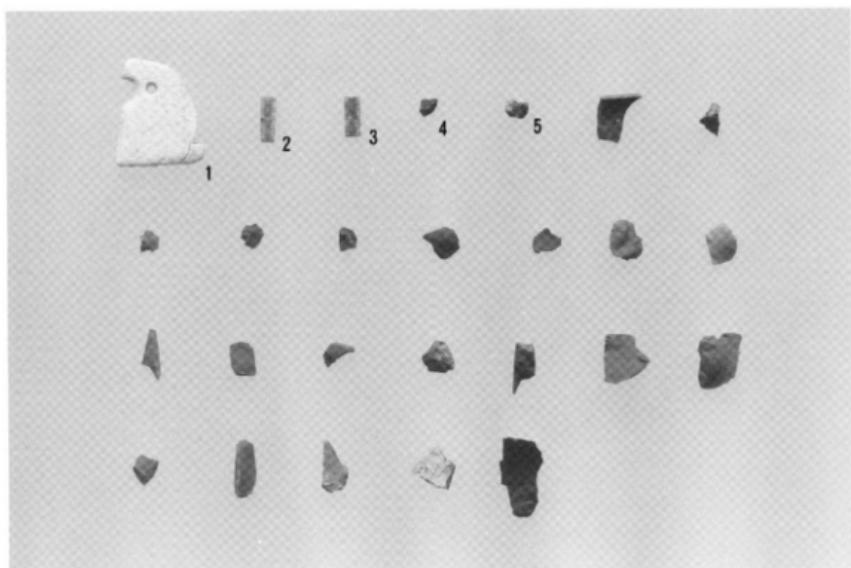




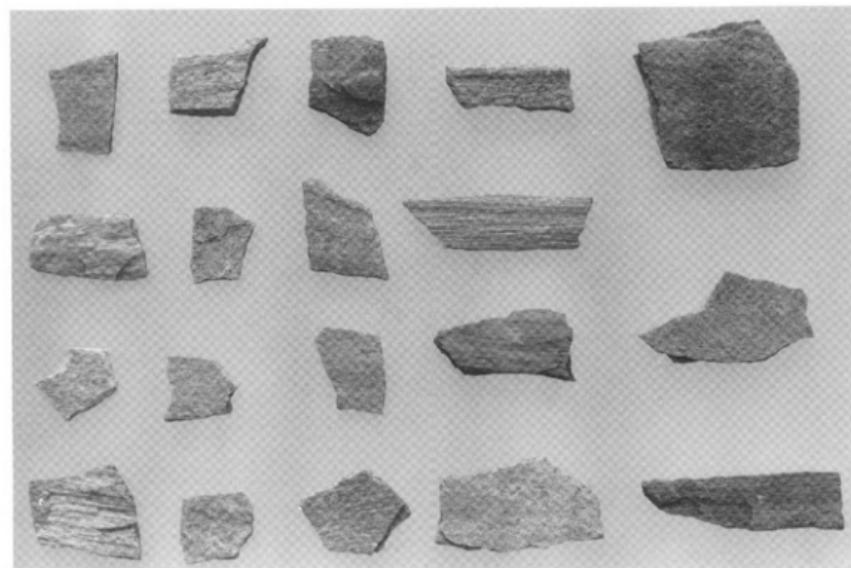




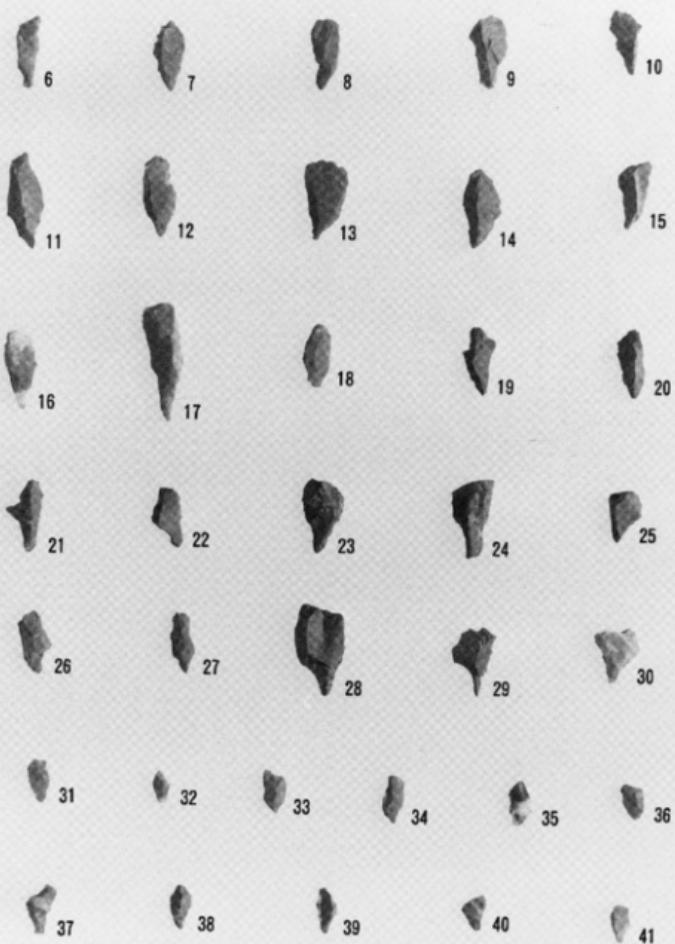


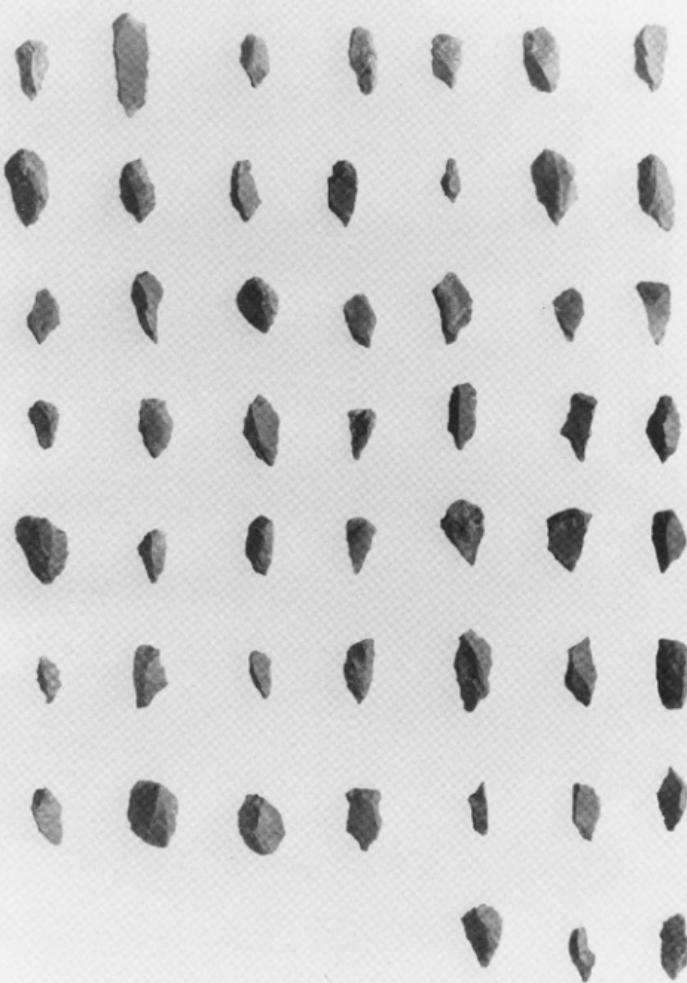


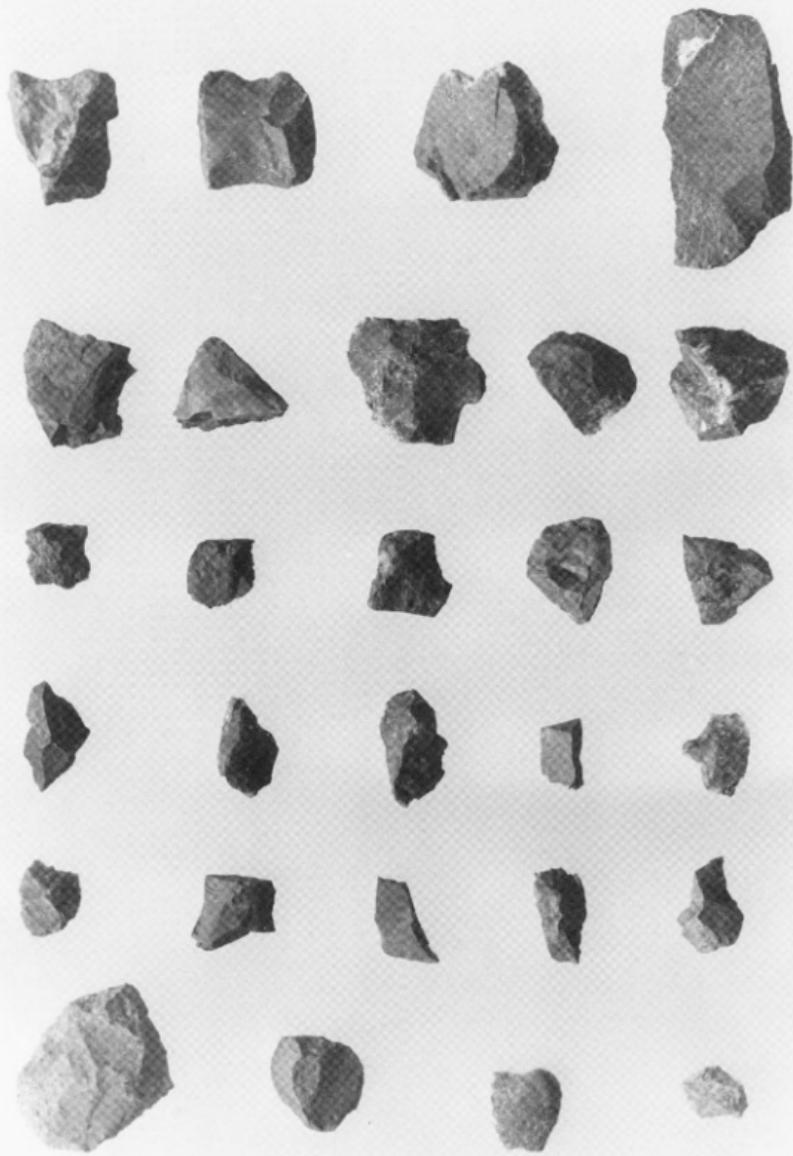
a. 玉類および碧玉剥片



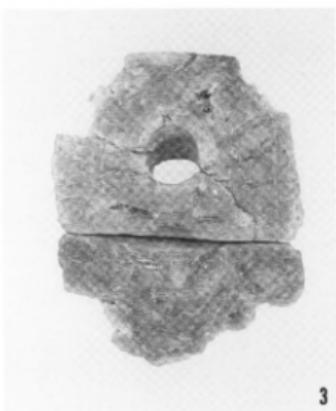
b. 紅鷺片岩







圖版 51  
出土木製品 (1)



3



1



8



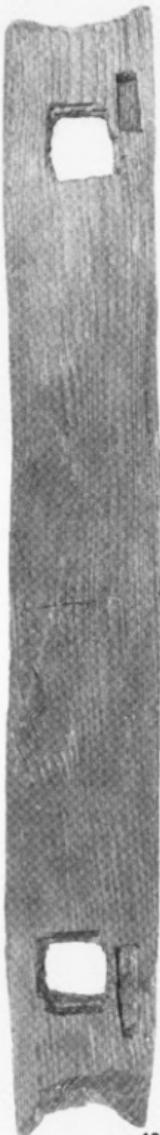
9



10



11



12



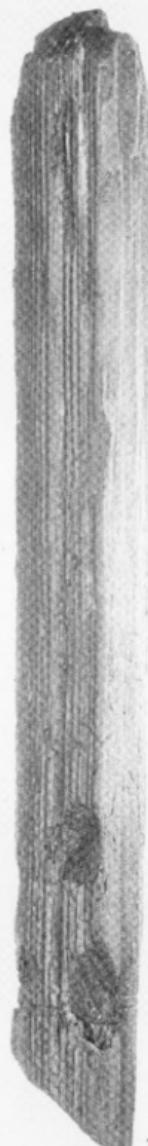
13



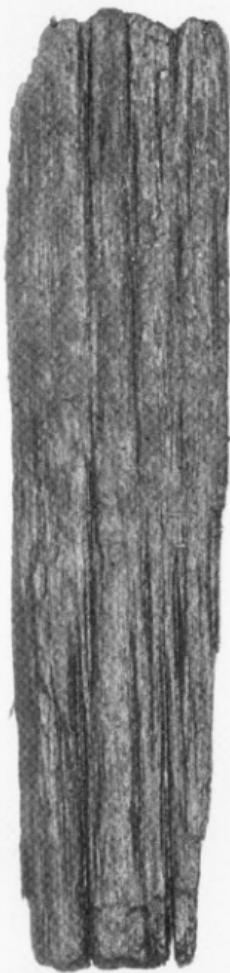
14



15



16



17



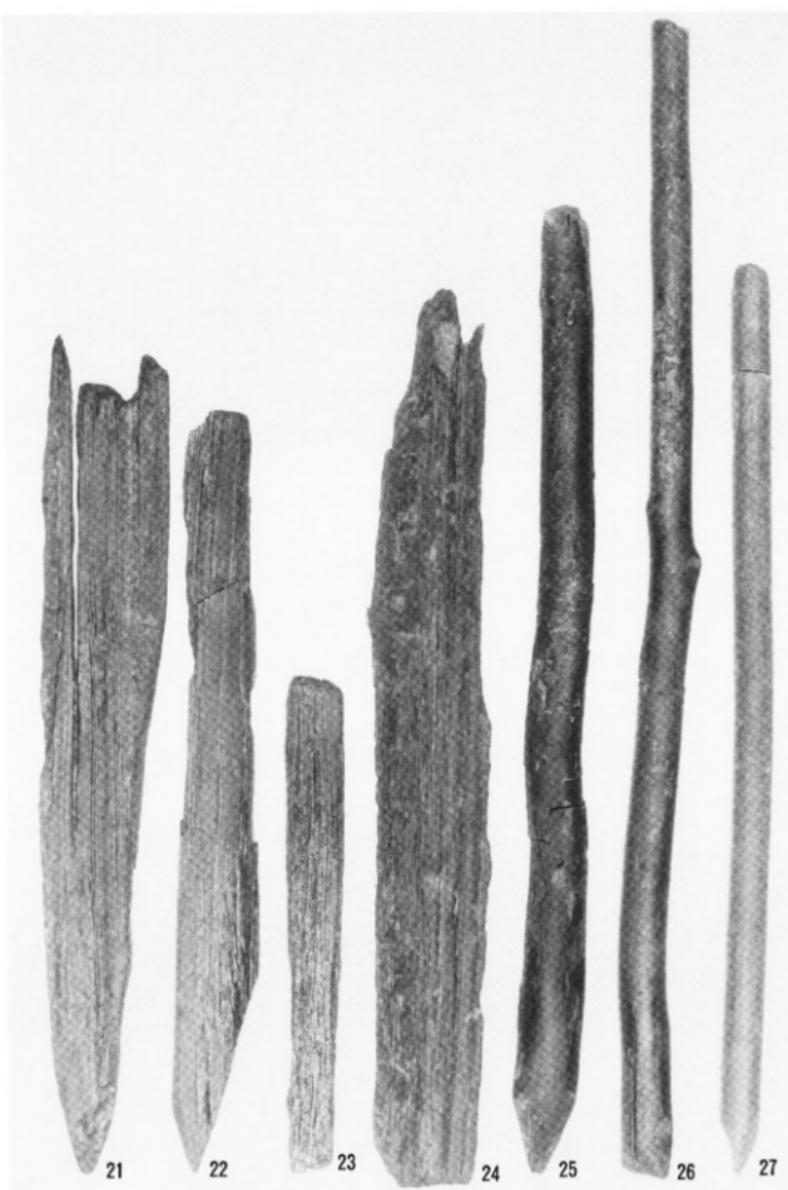
18



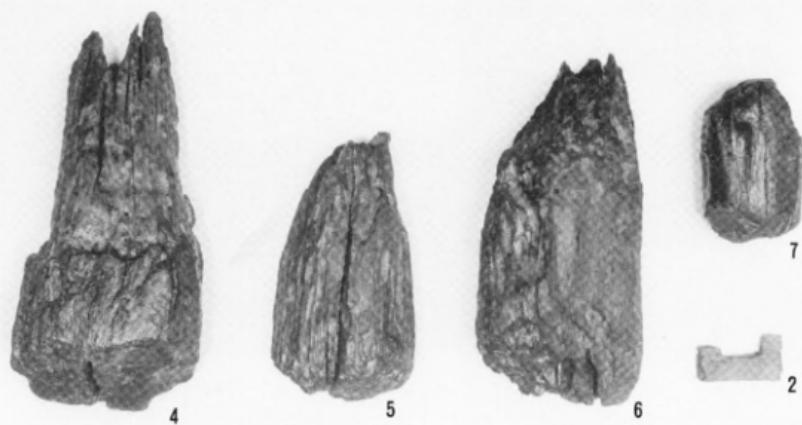
19



20







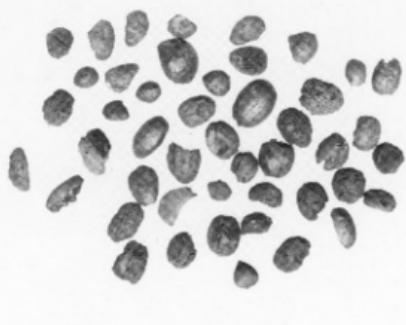
a. 弥生時代造構面出土柱根ほか



b. 桁ほか



a. 芥化米



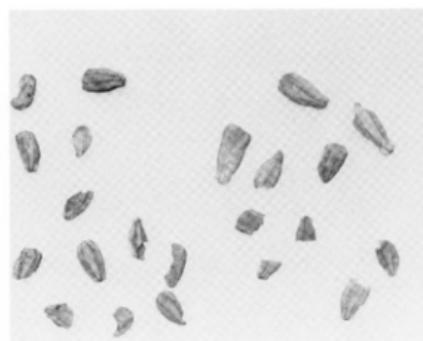
d. 堅果類



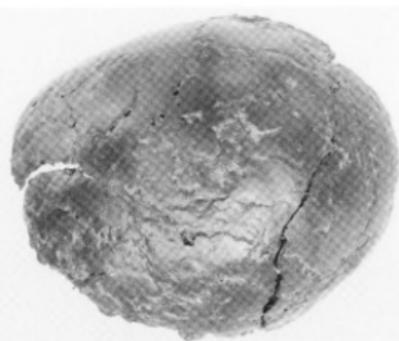
b. ウリ



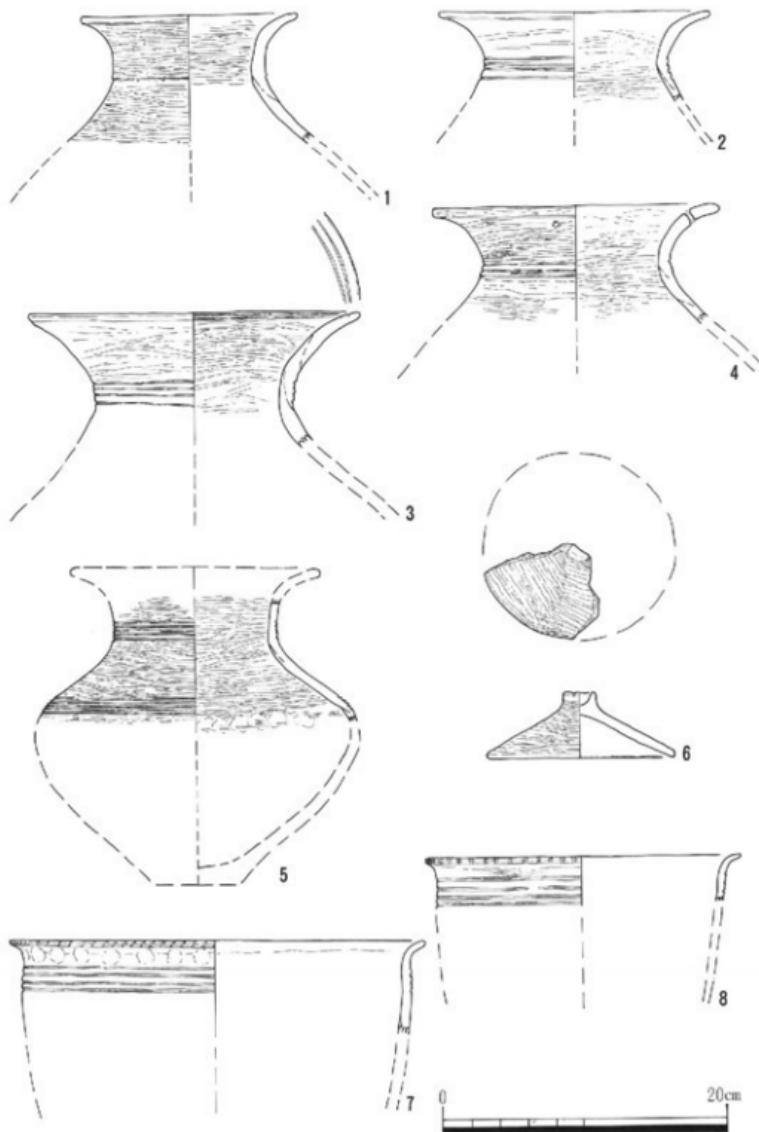
e. モモ



c. ヒヨウタン(種子)  
※全て土坑128 出土

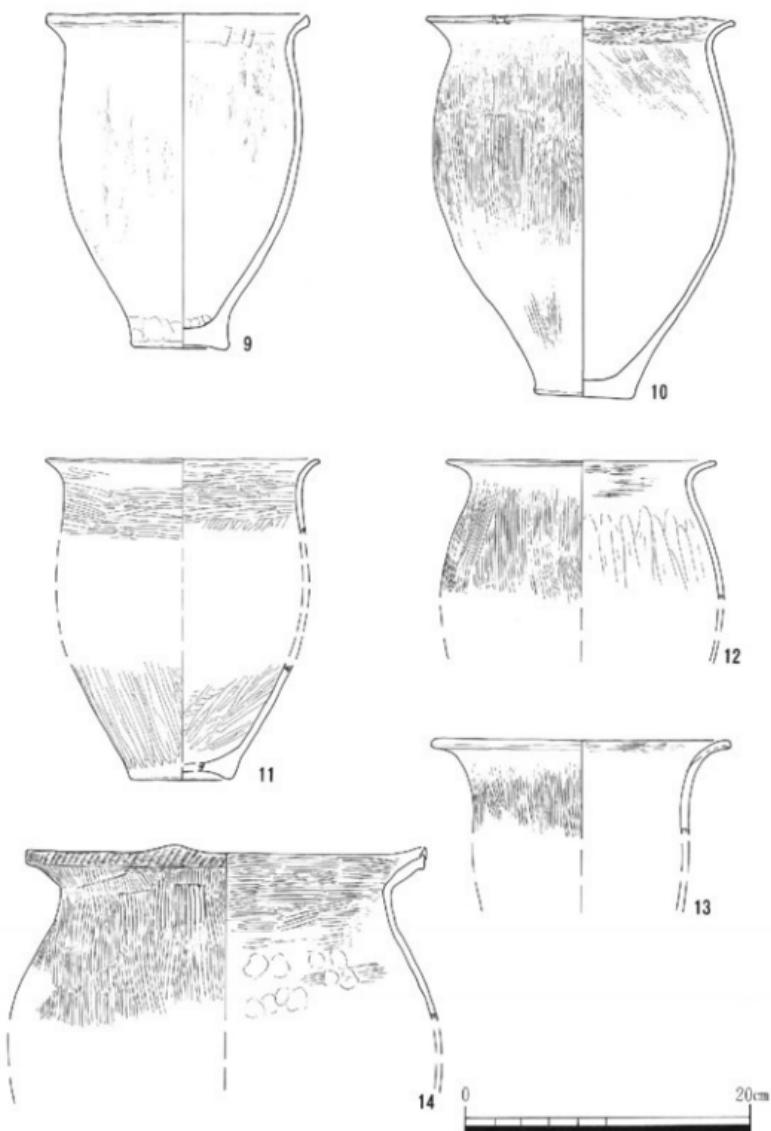


f. ヒヨウタン(果皮)



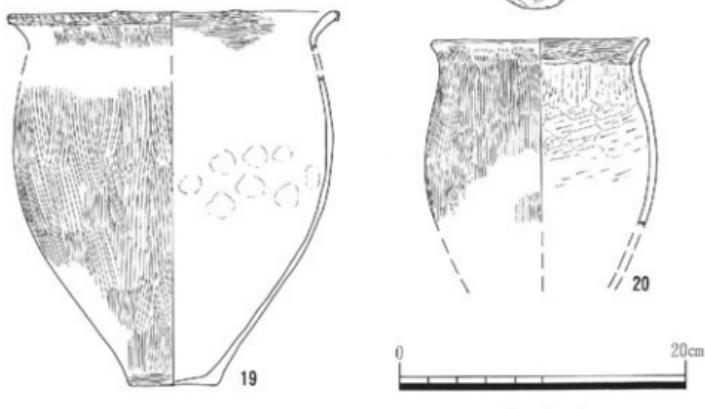
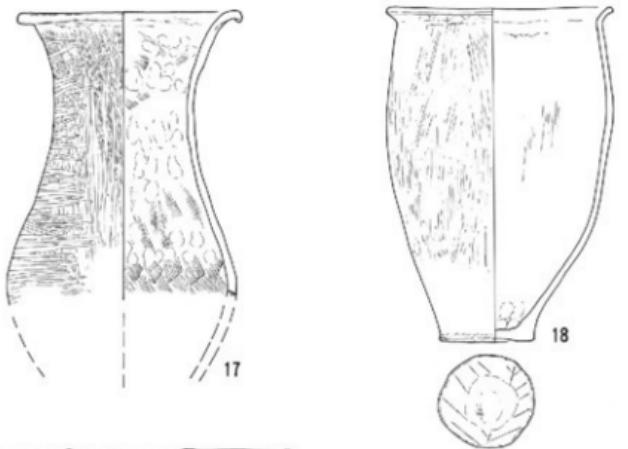
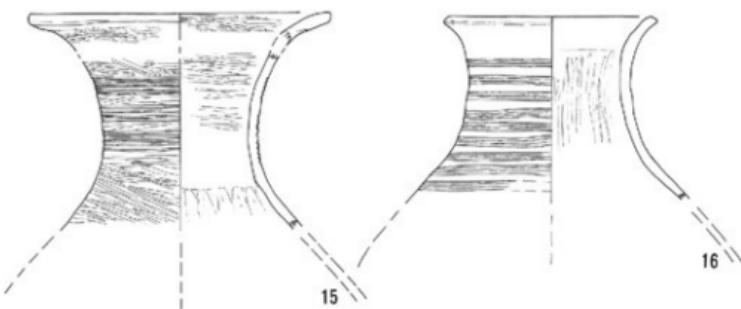
満139 出土

S = 1 : 4

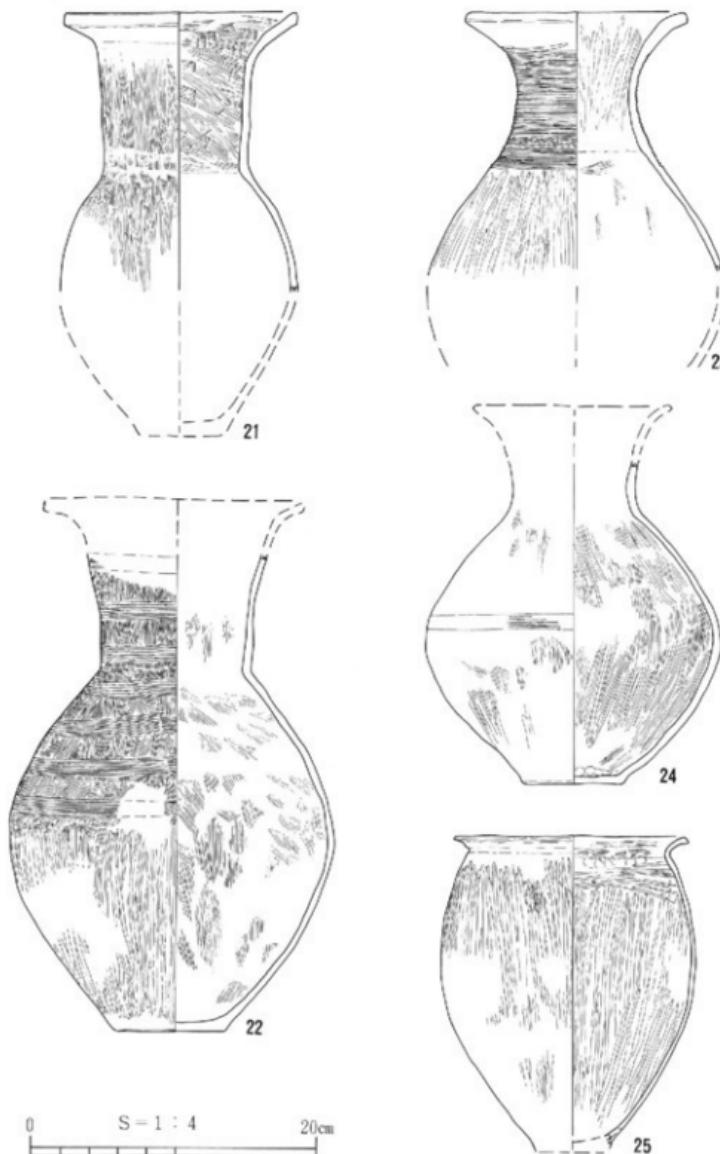


9・10 土坑115、11～14 土坑122出土

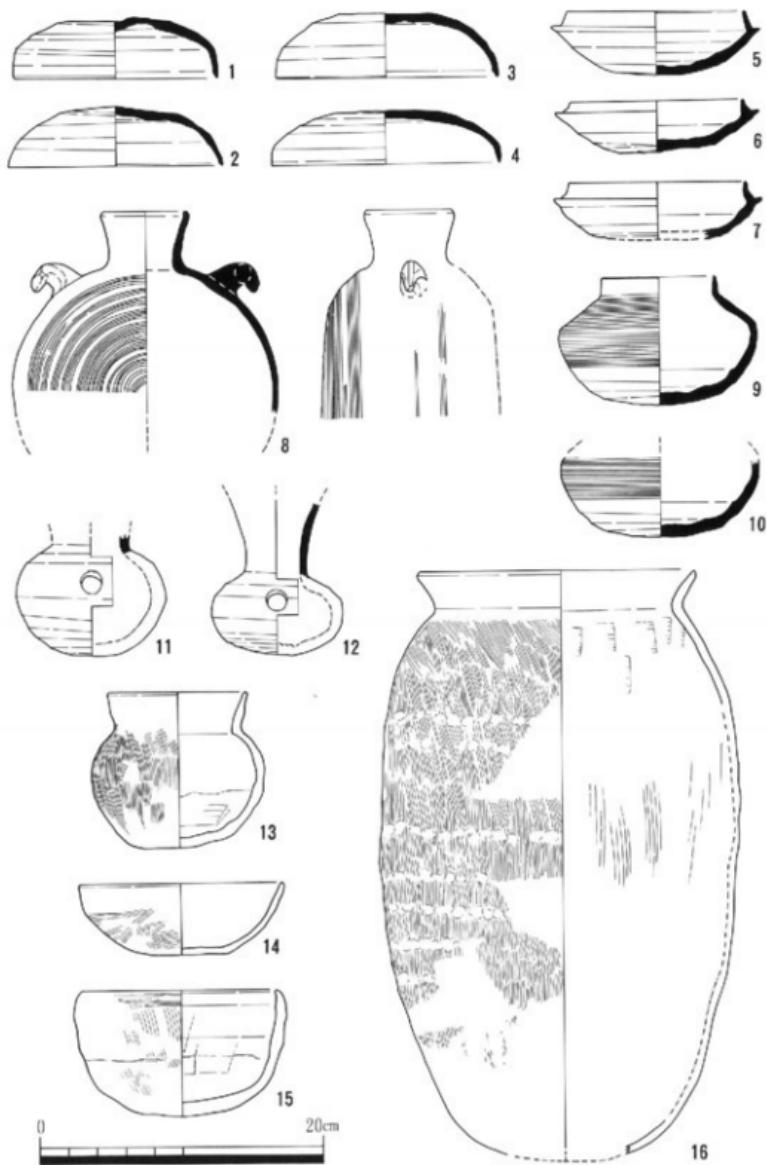
S = 1 : 4



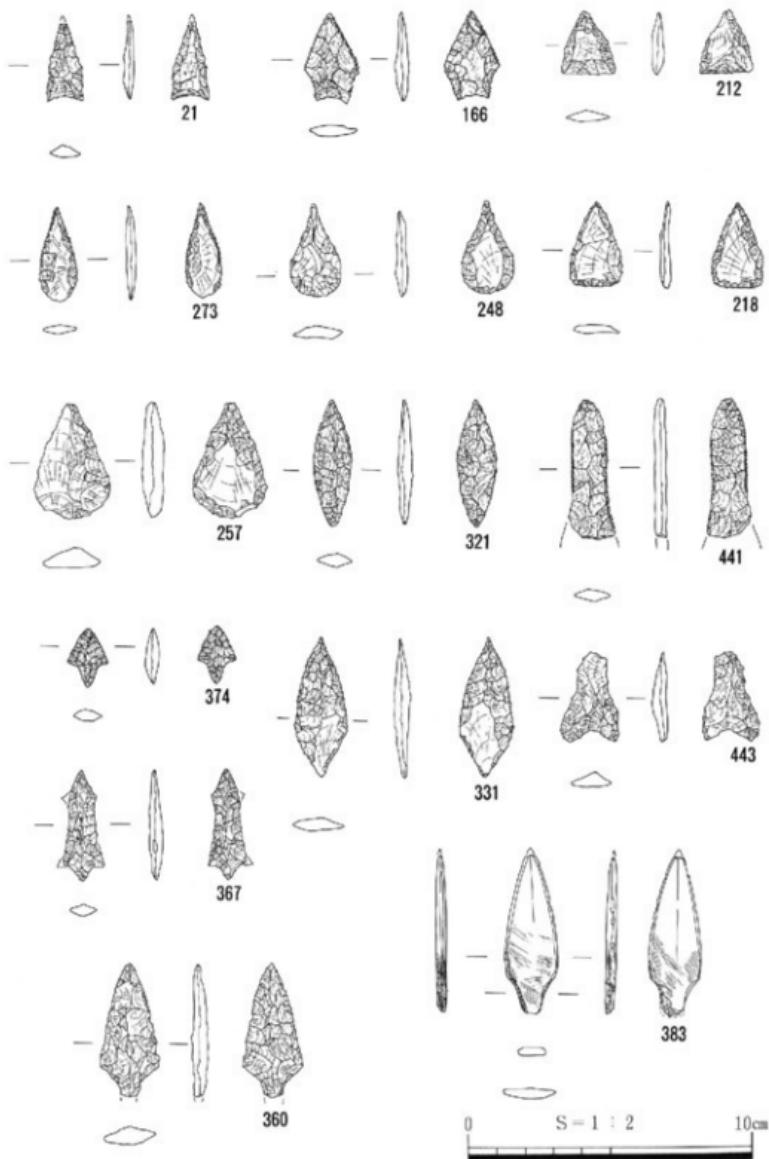
S = 1 : 4



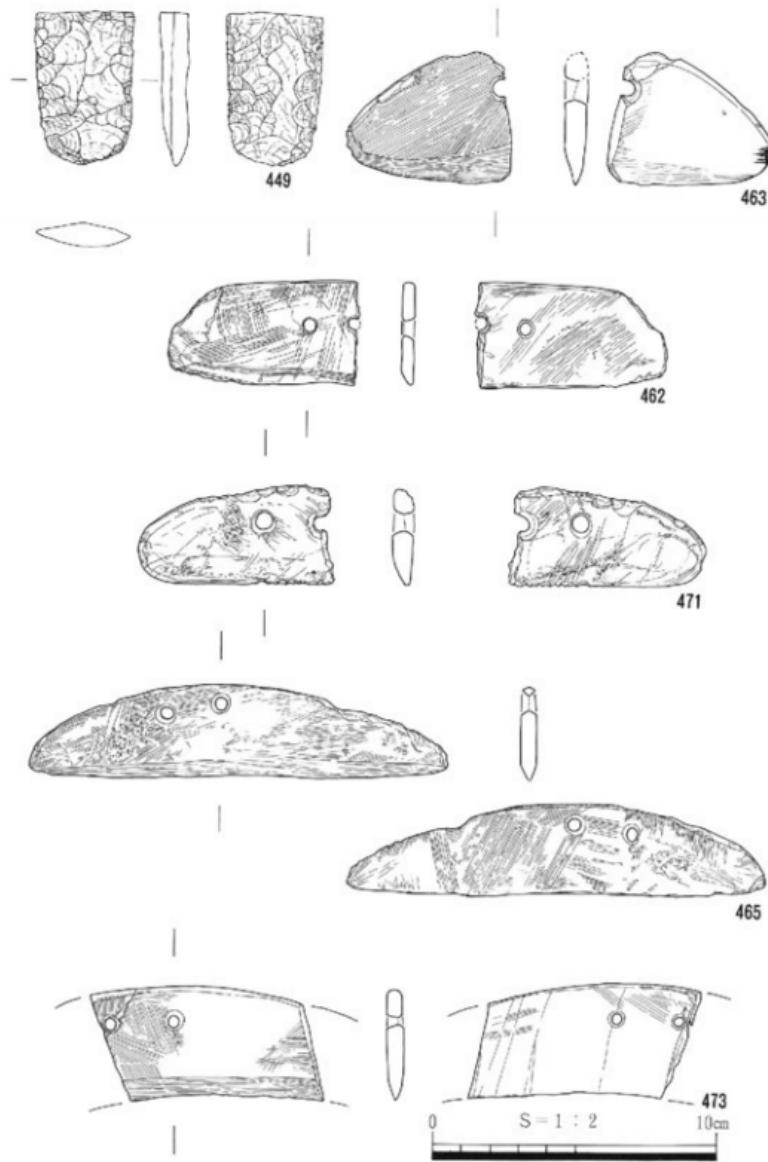
土坑128 出土



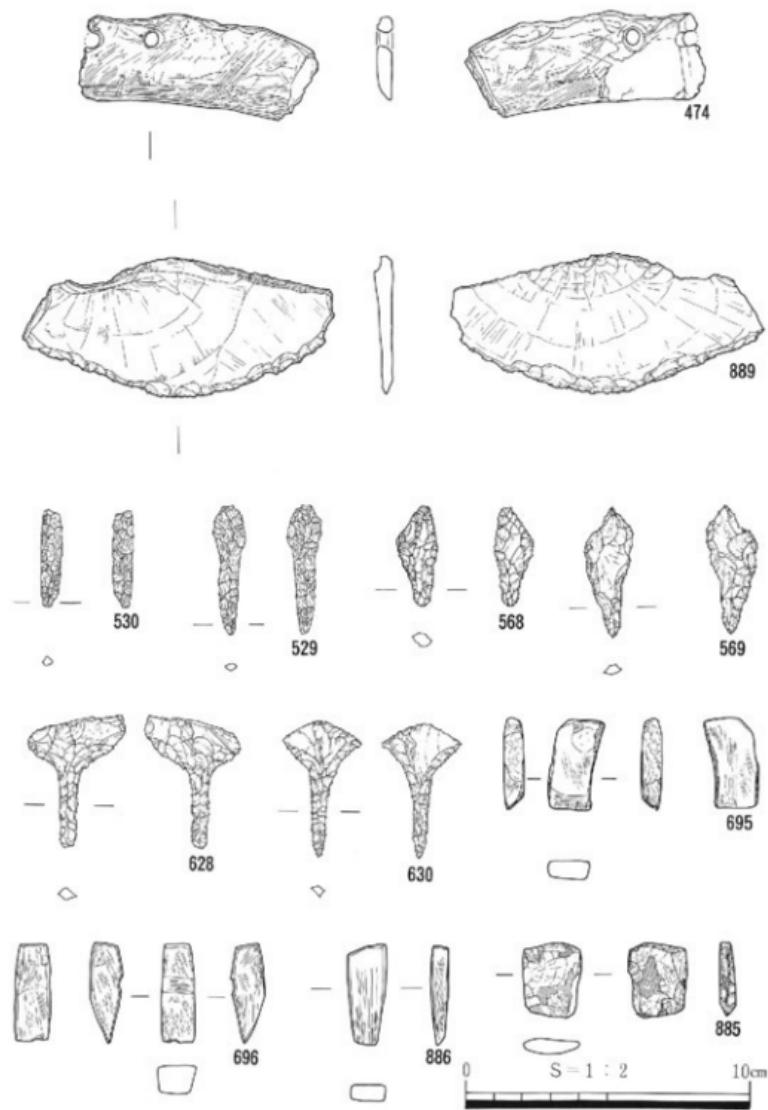
図版 61 出土石器実測図(1)



石器



打製石劍・石庖丁



石庖丁・打製石庖丁・石錐・扁平片刃石斧・柱状片刃石斧



698



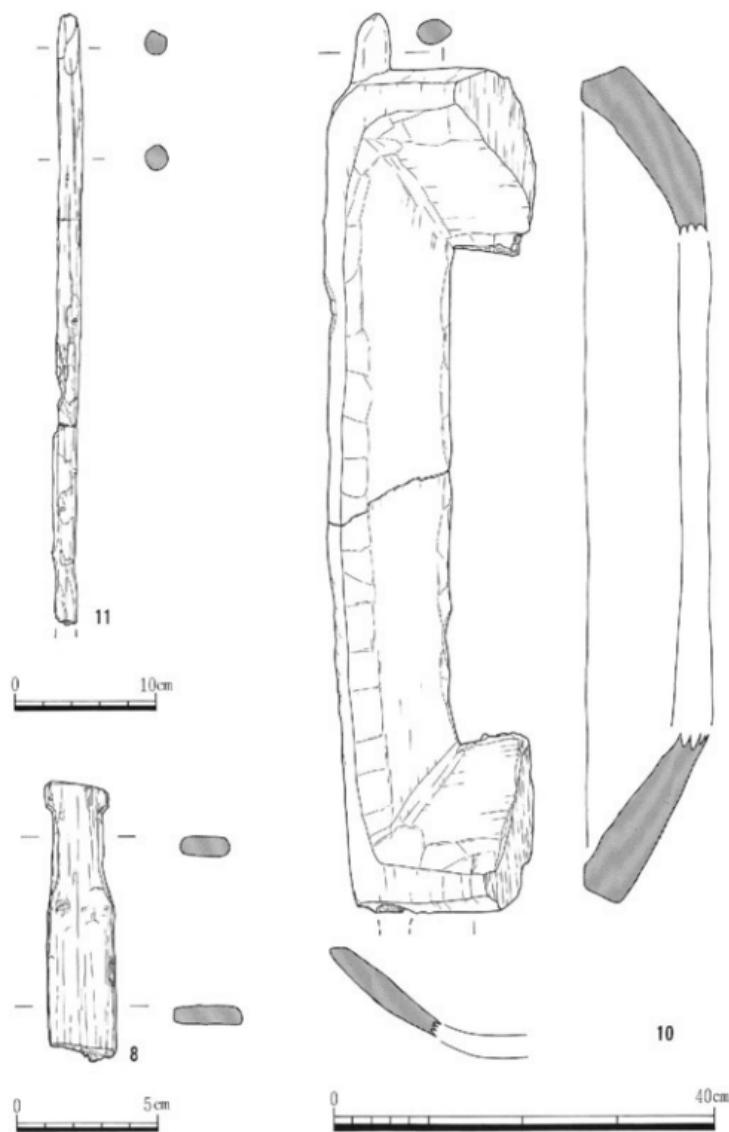
701

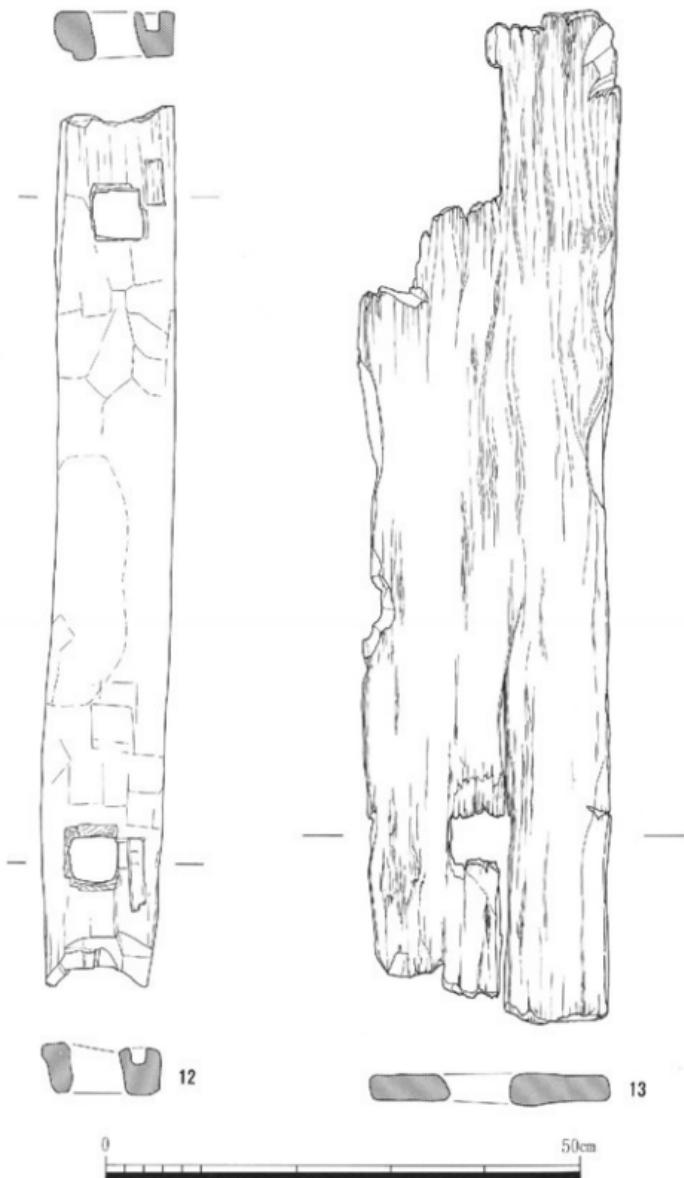


898

0 S = 1 : 2 10cm

石斧・用途不明石器





## 高宮八丁遺跡Ⅱ

—第2次および第3次発掘調査概要報告書—

平成4年3月

編集  
発行 寝屋川市教育委員会

大阪府寝屋川市本町1番1号

印刷 サツキ印刷株式会社

